史学論叢第30号（2000年３月）

縄文中期農耕論（昭和第二期）

賀川光夫

はじめに

縄文中期農耕論（昭和第二期）は太平洋戦争最中の一九四〇年から四二年まで宮坂英弐による長野県茅野市尖石遺跡の発掘[一]、つづいて戦後一九四六年から五二年までの同市与助尾根遺跡[二]の縄文中期大規模集落跡発掘にはじまる。この発掘に刺激されて一九五八年井戸尻遺跡保存会が発足し、保存会による八ヶ岳南麓遺跡群の発掘が行われた。

この戦中からはじまり、戦後の困苦のなかで宮坂は八ヶ岳西麓の集落跡に挑み、藤森栄一は縄文中期農耕論に情熱[三]を燃やした。そして九州では坂本経堯によって熊本県玉名市古閑原貝塚の発掘[四]が行われ、縄文中期、阿高式土器とともにイネ籾が検出され、新たに稲作の問題が生じた。この時期を考えると日本中は苦難の時代であっただけに、当時を回顧しておかなければならない。

一九五一年有光教一は東京国立博物館でアメリカにおける射性炭素Ｃ14による年代測定の特別講演が行われた。考古学の年代測定で欠かせない画期的な問題提起であった。まもなく年代測定に放射性炭素Ｃ14の方法が採用されたのは論を待たないところであった。このように科学的方法での測定法があっても編年の基礎を土器に頼らざるを得ないのが考古学の現状である。中部山岳地帯の集落の時代判定に縄文式土器の編年は欠かせない問題であった。この難解な作業から縄文農耕論、昭和二期をはじめることにする。

(一) 中部山岳地帯の縄文中期土器

火炎土器と渦巻把手土器

一九六〇年の暮れ、中村孝三郎が『火焔土器』[五]という小冊子を贈ってくれた。それは信濃川中流、長岡市関原丘陵馬高遺跡出土の土器の解説書であった。朝顔状に開いた土器の口の部分に勢よいよく燃えあがる炎の文様があり、それについて、こう書いてあった。「かれらは巧みなハンツマン（猟人）、フイッシヤマン（魚人）であるとともに偉大なるケラミスト（陶人）でもあった。赤粘土をこね、巻き上げ造りをした土器には、縄文人の歓喜と、悲愁が漂納されている…」（原文）と詩のような文章であった。

中村の文章を読み、土器の写真をみると、幻想を感じた。宗教的な畏怖、神秘に対する信頼、無意識のなかの創造が土器の炎のなかから生まれる。その表現がプリミティブというものなのかもしれないと感じた。土器には炎は赤く、深い影の彫りがあって感動的であった。それは中部山岳地帯に広がる縄文中期、中村の言う「偉大なケラミスト達の遺産」であった。

藤森栄一が『縄文の世界』[六]を出版し、寄贈してきたのは一九六九の暮れであったと記憶している。その本を開いてみると、「曽利1式の華やかな晩鐘」という文学的な項目があった。そこに、信濃曽利遺跡発見の水焔状大渦巻把手土器があった。藤森は「一本の力強い溝の絢爛たるあそびである。だれでもみるがいい、このおびただしい円のわだ

第1図　中村孝三郎『火焔土器』（1960）より転写

かまりは、ぐるぐる渦巻きにまいて巻き上がり、跳ねくり、そしてくねってぐるぐると一回りして、裏がわからいま一方の水焔に湧きあがる…」（原文）と書いている。藤森の感動は中村と同じであって、この彫りの深い水焔状渦巻土器にも詩情をおこさせる魔術、神秘、信頼があった。

中部山岳地帯から太平洋、日本海に向かう水系に沿って広く分布する丘陵（尾根）の縄文中期土器は縄文時代の中で最も充実した土器文化を結実させた。藤森がしばしば述べているように、この地に出土する土器には詩情があり、宗教を感じ、厳しい生活のあとがある。これほど縄文文化の様々な様子をあらわしているのは他にあるまい。中村の火炎土器、藤森の渦巻把手土器を一口でいうなら「神秘の原型」といったらよく似合う。

藤森の縄文中期農耕論の端緒は命を生む神秘の土器にあったことを生前に聞いたことがあった。更に藤森は宮坂英弐発掘の尖石遺跡の集落に魅せられ、縄文中期の大規模集落の背景を探索することになった。一九五八年からはじまる江戸尻遺跡を中心とする八ッ岳南麓一帯の集落の発掘から、栽培の可能性を具体的に論ずるようになったのは神秘の土器を出土する竪穴住居跡であった。

ここで中部山岳地帯の土器編年は農耕論確立の上で欠くことのできない課題として要求された。はじめに土器編年の経過をみることにする。

八ケ岳南麓における縄文中期土器

昭和の初め頃まで縄文式土器を厚手、薄手式とする分類用語[七]があった。厚手式土器といえば今日の中期の土器にあたり、薄手式土器は後期土器であると思えばよい。また厚手式土器は山岳地帯の狩人の土器、薄手土器は海浜の漁人の土器として普及にあたったのは鳥居龍蔵である。鳥居は大正末期に諏訪から尖石を探訪していることで影響があり、初期の尖石遺跡の発掘では狩人の土器、厚手式（中期）土器の名称が使われていた。

縄文土器の編年は昭和初期頃から前期、中期、後期の三分類をもちい、間もなく早期と晩期を加えて五分類法が確立した。早期の前に草創期を置くのは隆起文、爪形文土器などがみつかった長崎県福井洞窟など一万年を越える土器が発見されて間もない一九六五年頃からである。これらの研究は山内清男『日本遠古の文化』[八]（『ドルメン』一―四、二―二、一九三二、三四年）、八幡一郎『日本石器時代文化』[九]（『日本民族』一九三五年）らの努力であった。江坂輝弥は縄文式土器を全国規模で総覧し『縄文式土器』[一〇]（小学館　一九五五年）で詳細に述べている。

宮坂英弐は『尖石』で「尖石式土器の形式」の項目を設け鳥居龍蔵の山岳式（厚手式土器）を引用して、尖石式第一類、第二類、第三類と三分類に分けている。このうち第一類を中期の最盛期に当てている。中期の最盛期は勝坂式に編年されているので、宮坂の編年は土器形式からみて的を得ていると思う。

さて八ヶ岳周辺遺跡の縄文土器の編年については、一九五八年よりはじまった江戸尻遺跡[一一]を中心とする遺跡群の発掘で、七九基の竪穴式住居跡（一九六四年まで）がみつかり、そこで建物の前後関係などの層位的資料を得て、それぞれ竪穴出土土器のセット関係から縄文中期土器の編年が行われた。

日本考古学協会一九六四年大会（群馬大学学芸学部）において藤森英一、武藤雄六は「八ヶ岳南麓における縄文中期土器の編年」[一二]と題して研究発表をおこなった。これによって尖石はじめ、江戸尻、曽利遺跡など中部山岳地帯の土器編年が確立し、適確な時代判定ができるようになった。編年の基礎は竪穴式住居跡出土土器の相互間系を重視した賢明な方法でおこなわれた。また三〇〇個以上の土器群の精緻な分類が要求されたにもかかわらず、納得のゆく土器論が展開されている。この分類はこれまでおこなわれた関東地方を中心とした縄文土器の編年にあわせ、中期土器の比較検討が厳しくおこなわれている。

関東地方を中心とする縄文中期土器は、前期の発展期である五領ヶ台式[一三]土器の（神奈川県平塚市広川出土、江坂輝弥発掘によって注目された）円筒形全面に装飾を施したものに発展の芽ばいを認められる。中期初頭から最盛期の阿玉台

型　式	竪穴番号	編　年　資　料
九兵ヱ尾根Ⅰ式	5　号	7号－狢沢式より古い。 6号－井戸尻Ⅱ式より古い。
九兵ヱ尾根Ⅱ式	3　号 狢　沢　6号	上層－新道式より古い。 5号－藤内Ⅰ式7号狢沢式より古い。
新　道　式	九兵ヱ　3号 上　層	3号－床面－九兵ヱ尾根式Ⅱ式より新しい。
狢　沢　式	井戸尻　2号 狢　沢　7号 九兵ヱ　7号	3号－井戸尻Ⅲ式より古い。 6号－九兵ヱ尾根Ⅱ式より新しい。 5号－九兵ヱ尾根Ⅰ式より新しく、8号－藤内Ⅰ式より古い。
藤内Ⅰ式	九兵ヱ　8号 狢　沢　5号	7号－狢沢式より新しい。 6号－九兵ヱ尾根Ⅰ式より新しい。7号狢沢式より新しい。
藤内Ⅱ式	藤　内　8号	7号－井戸尻Ⅰ式より古い。
井戸尻Ⅰ式	狢　沢　4号 藤　内　7号	5号－藤内Ⅰ式より新しく3号－曾利Ⅰ式より古い。 8号－藤内Ⅱ式より新しい。
井戸尻Ⅱ式	九兵ヱ　6号 徳久利　11号 藤　内　3号	5号－九兵ヱ尾根Ⅰ式より新しい。 12号－狢沢式より新しい。 4号－井戸尻Ⅲ式より古い。
井戸尻Ⅲ式	藤　内　4号 曾　利　3号 井戸尻　3号	3号－井戸尻Ⅱ式より新しい。 4号－曾利Ⅰ式より古い。 2号－狢沢式より新しい。
曾利Ⅰ式	曾　利　12号 曾　利　4号 曾　利　5号 立　沢　4号	11号－曾利Ⅱ式　13号－曾利Ⅲ式より古い。 3号－井戸尻Ⅲ式より新しい。7号－曾利Ⅲ式より古い。 6号－曾利Ⅲ式より古い。狢沢3号は、4号－井戸尻Ⅰ式より新しい。 3号－曾利Ⅲ式より古い。立沢2号は、1号－藤内Ⅰ式より新しい。
曾利Ⅱ式	曾　利　11号 曾　利　17号	10号－曾利Ⅴ式より古く、12号－曾利Ⅰ式より新しい。 15号－曾利Ⅲ式より古い。
曾利Ⅲ式A	居　平　4号	
曾利Ⅲ式B	曾　利　6号 曾　利　7号 曾　利　9号 曾　利　13号 曾　利　15号	5号－曾利Ⅰ式より新しい。 4号－曾利Ⅰ式より新しい。 8号－曾利Ⅵ式より古い。 10号－曾利Ⅴ式より古く、12号－曾利Ⅰ式より新しい。 17号－曾利Ⅱ式より新しく、16号－曾利Ⅵ式より古い。
曾利Ⅳ式	曾　利　8号 曾　利　16号 立　沢　3号	9号－曾利Ⅲ式より新しい。 15号－曾利Ⅲ式より新しい。 1号－藤内Ⅰ式　4号－曾利Ⅰ式より新しい。
曾利Ⅴ式	曾　利　10号 居　平　3号 藤　内　2号	11号・曾利Ⅱ式　12号－曾利Ⅰ式　13号－曾利Ⅲ式より新しい。 上層－に晩期最末の層がある。 下層－井戸尻Ⅰ式である。

五　第２図　藤森栄一・武藤雄六「八ヶ岳南麓における縄文中期土器編年（上・下）
1964年『日本考古学協会』大会研究発表要旨より

式[一四]、勝坂式[一五]（朝顔形の深鉢で豊かな文様がみられる）をへて中期の衰退期、加曽利式E式[一六]へと推移して分類がおこなわれている。

藤森、武藤の編年表をもっとも分かり易くしたものに『井戸尻遺跡』で発表された「縄文中期文化の編年表」がある。これによると九兵衛尾根遺跡を初め井戸尻、曽利遺跡などの住居跡から出土した土器を組み合わせ、関東地方の中期土器と対照して分り易く説明している。

まず、九兵衛尾根一式（中期黎明期）二式（中期初期）は五領ヶ台式に並行させ、新道式（中期確立期）、狢沢式（中期初頭）を阿玉台式に当てる。藤内一、二式、井戸尻一、二、三式を中期中葉、最盛期の勝坂式に当て、曽利一から五式を加曽利式土器に当てる。このように分類すると、尖石式は勝坂式からはじまり、主体は加曽利式に当ることになる。この分類によって土器の特徴をあげてみることにする。

中期初頭、九兵尾根式土器につづく新道式には有孔鍔付土器が出土している。藤森はこの土器の用途を、醸造器かも知れぬとも称し、液体、種子等の貯蔵器を疑わないとしている。狢沢式は阿玉台式土器に並行するとして、外反り、キャリパー形の口縁部に意識的な施文がみられる。特に三本指の人体文を施した鉢形が注目される。狢沢式を初めとすて中部山岳地帯の土器に不思議な動物、人物などの画像が出現し、これを春成秀爾は「精霊の絵[一七]」として紹介している。

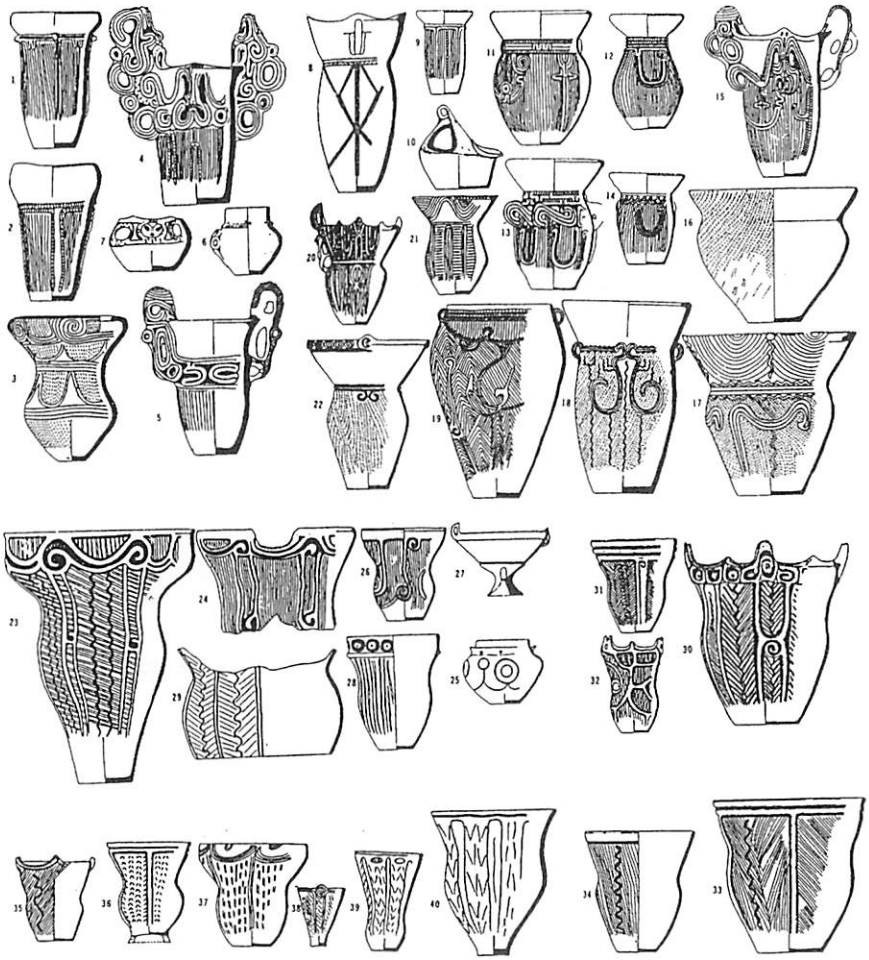
藤内式は一、二式に分けられ、勝坂式に並行すると考えられている。ここでは区画文を施す円筒土器（筒形）と、両棲類を描いた深鉢形土器がある。後者にはムカデ、蛇体などが独特の形で表現されている。二式は深鉢形が多く、横帯区画文を主体として、抽象的模様は衰退する。

江戸尻式は一、二、三式に分類されており、勝坂式土器に並行する。一式には四個対立の筒形の把手がみられ、筒状の把手は中空で、顔面をあらわしている。二式には人体、蛇体文が多くなる。三式は器形がキャリパー形の甕が顕著で、三号住居跡出土のトロフイ形土器は圧巻である。

曽利式土器は一から五式に別れ、加曽利E式一から三式に並行するとしている。曽利一式は曽利四号住居跡出土の大きな渦巻文把手土器が圧巻で、新潟県長岡市馬高遺跡、同県津南町沖ノ原遺跡出土の火炎土器と共に縄文土器最高の文様である。この渦巻文把手の文様をもつ土器は勝坂式の系統とみられるが、セット関係から加曽利E式の範疇としている。二式は文様の萎縮がみられ、懸垂文が主体となる。三式は加曽利E式の影響が定着した時期で、口縁部の横帯文と懸垂文によって構成され、甕形土器である。四式土器は地文が刷毛目となり頸部のくびれの弱い鉢形で、懸垂文は力感を失う。中期土器の衰退期は五式で頸部のくびれもなく、底面の小いさな鉢形土器で、曽利式の終息である。

一九五八年井戸尻遺跡保存会により一九六三年まで調査が継続され、各地の遺跡で住居跡は七九基に達した。藤森栄一、武藤雄六の群馬大学での編年発表は一九六九年で、この調査の間に整理検討されたものと解される。

江戸尻保存会以後、曽利遺跡だけを考えても、三、四、五次の調査が行われ、竪穴式住居は七七基に達している。この数は江戸尻保存会の六年間に発掘した七九基とほぼ同じ数の住居跡であり、出土土器も多く、分類も細かく行われている。しかも各地の発掘件数も増加し、情報量も比較にならないほど増加している中で藤森、武藤の編年は基本的に変わっていない。したがって中部山岳地帯、八ヶ岳周辺の縄文土器編年は藤森、武藤の編年によらねばならない。本稿もまた藤森、武藤編年を以て年代の基準として進めることにする。



第３図　『長野県考古学会誌』（1964）曽利特集号より転写
曽利式土器実測図（縄文中期後葉）竹内俊文実測
曽利１式（１－15）　同２式（16－19）　同３式（23－29）
同４式（30－35）　同５式（36－40）

(二) 宮坂英弐と尖石遺跡、与助尾根遺跡

尖石遺跡の発掘

尖石と周辺遺跡は一九二二年（大正十一年）鳥居竜三の遺跡踏査によって学会に周知され、そのころ地元の宮坂春三により土偶が発掘された。土偶は八幡一郎によって『人類学雑誌』[一八]に掲載されている。八幡はこの頃から尖石遺跡について深い関心を寄せ、その後いくたびか尖石周辺の探索を行っていた。

一九二九年四月二四日、伏見宮博英殿下の発掘が行われ、わずかな発掘面積から縄文式土器五個が並列して発見され、この調査に参加した宮坂英弐は以後尖石遺跡の発掘に専心することになった。三〇年には石囲い土器炉を調査し、打製石斧、石皿等の石器が出土して、石器の組成に関心が払われるようになった。

一九三三年には農道拡張工事が行われ、その調査で出土した土器に、口縁部から胴部にかけて蛇体の文様がほどこされ注目された。さらに調査地の基盤（赤土）に口径三五ンチ、深さ三七センチの土壙を発掘し、内部から、シダミ、ドングリなど植物種の完形品三〇個を採集し、出土地の土壙を貯蔵穴と推理している。宮坂の調査は次第に尖石の核心にむかい土器形式や文様の分類にも関心を持ち、同時に植物種子（クリ・ナラなど）を注意することで、縄文時代の生活の背景にまで関心を進めていった。この調査と、遺跡・遺物についての研究法は八幡一郎の助言が深くかかわっていたといわれる。

宮坂の石炉中心の発掘に転機がみえたのは、一九三九年八幡一郎、酒詰仲男の茅野市塩目日向字家上の調査[一九]であった。この調査は石炉を中心として東側に竪穴の壁面（堀穴の深さ二〇センチ）を確認、西側では土層の切り合いによって竪穴が重複していることがわかり、竪穴住居の把握が中心であった。この八幡の調査を期に宮坂の調査は転換し、竪穴住居跡の本格調査が実施されるようになった。

宮坂英弐による尖石遺跡の調査は一九四〇年から四二年の三年間にわたって行われた。三年間の調査はまさに苦闘の

連続であったが、三三の竪穴、石列など集落構造を明かにし、土器、石器の組成など注目すべき成果をあげることができた。

尖石遺跡、与助尾根遺跡の集落概要

尖石遺跡は長野県茅野市豊平（もと諏訪郡豊平村）字東嶽に位置している。この一帯は八ッ岳の西麓一二〇〇－九〇〇メートルの丘陵の上にある。遺跡は東西に長い丘陵地でその中央に小渓谷が走り、南側が尖石遺跡、北側が与助尾根遺跡である。両者の北と南はV字形の谷になり、渓谷には水田が営まれている。

東西に伸びる台地はほぼ三〇〇〇メートルに及び、南北は一〇〇〇メートルを計る。その中央を小谷がはしり二つの丘陵に分断する。南北に別れた丘陵は中央が高く、左右は斜面をもって谷に接する。尖石、与助尾根遺跡ともに丘陵の南傾斜に調査の重点がおかれているがどちらも台地の中央に空地をもつ馬蹄形の集落と考えられている。

尖石遺跡は一九四〇年から四二年の三年間にわたり、宮坂英弐によって調査され、三三に及ぶ竪穴住居跡と列石などが発見され注目されている。この調査は一九五七年発刊の『尖石』（茅野町教育委員会　一九五七年）に詳しく報告されている。

小さな谷を挟んで北側の与助尾根遺跡は尖石遺跡の史跡指定（一九四二年）後に予備調査が行なわれたが、本格的な調査は太平洋戦争集結後の一九四六年の第一次調査から一九五二年の第五次調査であった。この与助尾根遺跡の発掘については『尖石』で一括して報告が行なわれ、集落については「八ッ岳西山麓与助尾根先史聚落の形勢についての一考察」（『考古学雑誌』三六巻三号、四号　一九五〇年　宮坂英弐）で詳しく述べられている。この二つの報告書を中心として尖石、与助尾根遺跡の集落と、問題点を検討してみることにする。

尖石と与助尾根遺跡は東西に走る小谷によって分断されている。小谷は水田として利用されているが、東側は湿地で

ハンノキなどが自生し、西側は棚田として利用されていると書かれており当時の景観がよくわかる。この小谷の南が尖石で、北が与助尾根遺跡である。宮坂の戦前、戦後の調査によって小谷を挟んで南北丘陵に展開する縄文中期の集落が明らかとなった。

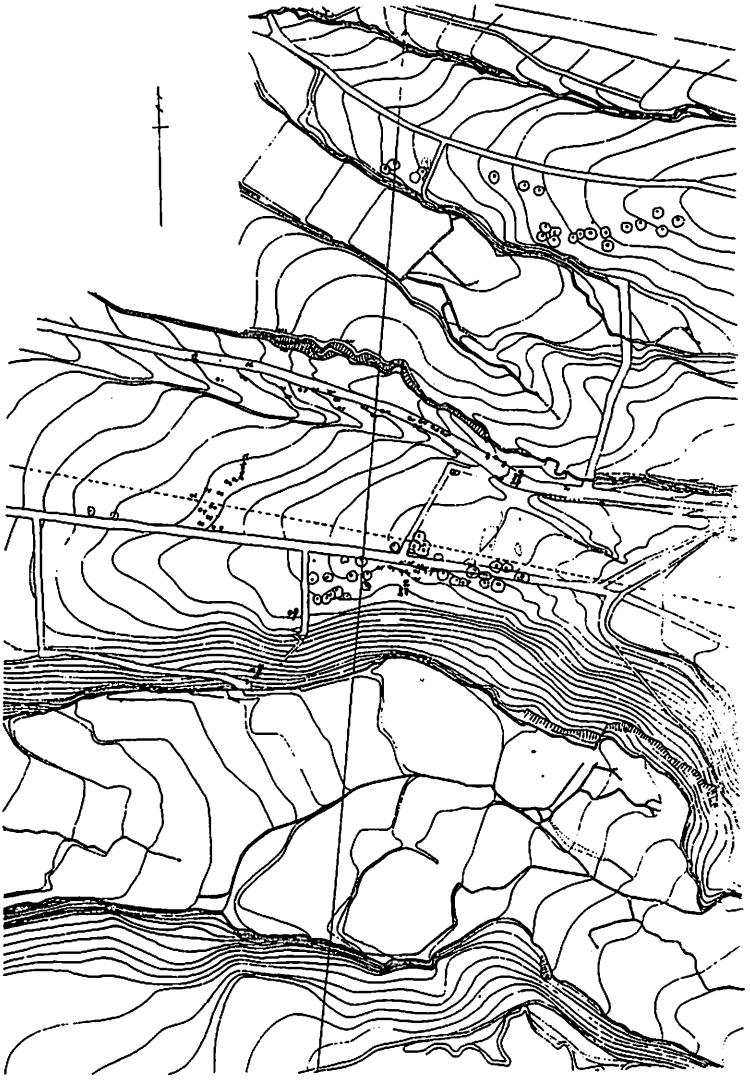
先ず尖石遺跡の発掘面積は七二六〇ヘーベ、確認された竪穴式住居跡（以後住居跡と言う）は三三である。これらはおもに台地の南側（南作場道）斜面で露出されている。住居跡は二、三号、一四、一六、一七号、二一、二五号などに切り合いがみられることからそれぞれの住居跡には時期の重複がある。これを出土した土器にあわせると縄文中期土器、勝坂式を主体として終末の加曽利E式に及び、中期末に終息している。

与助尾根遺跡は四一〇二ヘーベの発掘面積の中から二八の住居跡が発掘された。この発掘で出土した土器は縄文中期後半加曽利式が中心とされ、他の様式を含まず、短期間の集落跡と考えられている。

宮坂は炉跡の明らかな竪穴について住居跡の特徴を分類している。それによると尖石では、円形六、方形隅丸五、楕円形一、不整形六となっている。この形の違いが建物の時代をあらわすかについては記載がない。与助尾根遺跡では円形が一七と最も多く、隅丸方形が七例とつづくき、円形の住居跡が目立つ。

住居跡の大きさは径四ー五メートルが多く、尖石では一四、与助尾根では二〇を数え、最大は六メートル以上で尖石で三、与助尾根では二が検出されている。最少は尖石の一・三メートルとあり住居以外の建物跡ではなかろうか。これらは表土六〇ー九〇センチの深さで床面に達し、竪穴住居で中央付近に偏平石を方形又は円形に組み合わせた石炉がある。調査範囲は主に石炉を中心として竪穴壁面まで行なわれた。

宮坂は尖石、与助尾根遺跡で発掘した住居跡の分類は炉跡、柱穴等の配置構造、壁面下一条、内周する溝などについて特徴をのべている。とくに炉跡については細かに分類し、地床炉、土器片敷、埋甕炉（土器炉）、竪穴炉、石囲炉（石炉）等に分け、さらに石炉を方形、長方形、楕円形の三種類に別ける。この炉のうち多くを占めるのは、竪穴炉で



第４図　与助尾根（北側）・尖石（南側）に展開する縄文中期集落
「茅野市教育委員会」『尖石』（1957）より転写

尖石では八、与助尾根では一〇基を数える。ついで石炉となっている。竪穴炉のなかには石炉の石材を抜き取られたものが含まれる可能性があり、問題を残している。炉の大きさは最大で一・二五センチで平均八〇センチである。最少のものは三〇センチ（尖石）である。

炉の位置は住居跡の中央より北に偏するものが目立ち、尖石で一一、与助尾根で一六と多く、北壁との間が狭く、炉位置から南側の屋内を広くしている。おそらく屋内の協同生活空間（作業場など）と考えることができるが、炉と北側の狭い空間が問題となる。これに対して住居の中央に炉があるのは尖石で四、与助尾根で三基と著しく少ない。竪穴の位置が南斜面にあるために、入り口と炉の南側の間取りを広くするのが合理的であったため、炉の位置が北に偏することになったと解すこともできる。

さて宮坂の報告によると、尖石遺跡の集落は南作場道に沿った傾斜面に竪穴住居三三、石炉一四が検出されたとしており、石炉については住居にともなうもの、屋外炉などの記載がなく、これをすべて住居に伴うものとすればかなりの密集した家屋群となる。また北側の林道に沿って住居跡一と石炉七が確認されており、未確認を含めると数の増加は望める。また西側にも多数の地床炉が確認されたとあるから住居地帯はこの部分にも及び、全体としては馬蹄形の大きな集落となる。

馬蹄形（U字形）集落の中央は空域（広場）となり、東側が解放されている。広場の一部に径一メートル深さ一メートルの円形竪穴群があり、石蓋をした大甕形土器が出土している。この土壙、石蓋土器の推理は難しい。

宮坂は台地を取り巻く馬蹄形集落の時期を明らかにする方法として竪穴住居の徹底した観察をおこなっている。それは竪穴の切り合い、炉石の再利用、土器の編年によって研究を高めた。ここで宮坂の尖石遺跡出土の土器の観察をみることにする。

出土土器については、尖石、与助尾根遺跡をつうじて七八点を復元したとあり、これをもとにして鳥居竜蔵の「山岳

式」（厚手式）に属するものとしている。さらに土器形式を三形式に分類し、器形、文様、製作技術などを細かく検討し、尖石1類から3類に別けている。宮坂の分類を土器形式から判断すると1類は縄文中期初頭の円筒土器に口縁部朝顔状に開く深鉢形の特徴を指摘する。2類は朝顔形深鉢に隆起文と立体的把手が加わり厚手式土器の最盛期とし、これを中期の中葉に当てている。3類はやや薄手の土器になり、隆起文から刻線文に変わり、区画内の縄文は抹消して全体に消極的になると書いているいる。

この尖石1－3式土器の分類を実測図に併せて見ると、1、2式は勝坂式に、3式は加曽利式に当たり、宮坂の分類通り、尖石、与助尾根遺跡の集落は土器の分類によって縄文中期中葉から終末期に存続した集落跡となる。したがって宮坂編年は中部山岳地帯の縄文中期土器の学史となり、これをもとに以後の再分類がおこなわれている。

次に小さな谷を挟んで北側の与助尾根遺跡の集落がある。東西二七〇メートル、南北六六メートルの丘陵の中央を東西に走る作業道路の南斜面に位置し、東西一二〇メートル、南北一二メートルの範囲に二八の竪穴住居跡が東西に並んで調査された。また中央作業道の北側の斜面では竪穴住居四が確認されており、さらに未確認の住居が想定されるといわれる。推理の範囲であるが尖石と同じく、馬蹄形集落が想定される。

さて与助尾根遺跡では七号、一五号に祭壇とみられる石組があり、それぞれ角柱が立てられていた。七号は二板石の接触部に偏平石と礫で固着させ、高さ六メートルの角柱を一メートルを埋没して樹立させている。竪穴の壁（床までの深さ）を一メートルと考えると角注を覆う屋根は地面より最低四メートル以上なくてはならず、かなり高い建物が想定される。一五号住居跡の角柱は二折しているが、繋ぐと五メートル弱となり、損傷部をいれると七号とほぼ同じ高さを考えることができる。祭壇の問題と共に、建物の構造も考えねばならぬだろう。

与助尾根遺跡出土の土器は尖石式3期に納まるといわれるから縄文中期終末に当ると推定される。したがって七号、一五号の祭壇をともなう遺構もこの時期に集中するとみてよい。尖石二八号の祭壇をもつ建物、与助尾根七、一五号の

祭壇など宗教関係の遺構を含めて中期のムラの構造の一部を表している。宮坂の努力で明らかになったこれらの問題を幾つかの研究から分析してみよう。

(三) 縄文中期集落論

尖石、与助尾根遺跡集落の展開

縄文中期における集落の問題を、尖石、与助尾根遺跡のみでは議論にならないことは承知している。藤森栄一が中期農耕論を展開するために下敷きとなったであろうと思われる尖石と与助尾根遺跡がいかに重要であったか、戦後の学会の盛り上がりを考えるならば、宮坂英弐の発掘からはじまる集落論と、藤森の農耕論の因果関係から外れることはできない。縄文時代集落論を体系づけた水野正好の研究のはしり「縄文文化期における集落構造と宗教構造」[一〇]が与助尾根遺跡、二八基の竪穴住居跡の検討から始められていることを考えると、宮坂の発掘がいかに重要であったかがわかる。

藤森は「縄文中期の集落立地」[一一]について次のように述べている。

「尖石遺跡が日本縄文時代中期最大の集落址の一つであることは、いまや学界にも異論のないところである。…姫川をぬけて糸魚川地方から越中地方まで伸びておわり、千曲川も南佐久郡を最盛に、西越後山地にまで及んでいる。…都留地方え桂川の段丘をつたわって関東地方の多摩地方にひろがり、尖石遺跡に比肩する大遺跡で八王子浅川付近の川西村楢原や西秋都留の高台にも分布している」として尖石遺跡を中心とする縄文中期の大集落の広がりを論じている。

八幡一郎は一九五三年、大深山遺跡を発掘し「長野県南佐久郡大深山遺跡調査」[一二]で縄文中期の竪穴住居一〇基について詳細に竪穴内部の状況を報告している。その中で第六号竪穴において炉と竪穴の北壁との間隔が四〇センチに満たないことを指摘し、炉は南北径で八二、東西八六センチで大小の板石を寄せほぼ方形であった。炉の南に偏平石がすえられ、その周辺の床面が鮮赤に焼け、木炭、灰が広がりを見せていたと書いてある。このことについて八幡は後に「炉と

北壁の『座』は主座で、家長の場所と考えるのが妥当だが、六号住居は炉と竪穴北壁までの間隔が狭く、ここは人の座と考えられない。炉の南には異常な焚き火の跡があり、通常生活の炉火とは違うと思われる。また南西壁近くに伏甕があり付近に土器の大破片（勝坂式）が多く、土偶の下半部、朱彩滑車形耳飾り等、祭具と司祭者を想定できるものが出土した。このことから、炉と北壁は間の狭い間隔の主座、『神の座』で供献火祭の宗教と関係があるかも知れぬ」と話された。縄文中期勝坂式期の特殊な竪穴について興味深く拝聴したことが脳裏から離れない。

一九六四年桐原健は「南信・八ケ岳山麓に於ける集落構造」[三]を発表し、尖石、与助尾根遺跡を分かり易く解説し、勝坂期（尖石1式）と加曽利期（尖石3式）の住居の広がりを説明している。ここでは尖石丘陵、北に中尾根、小谷を挟んで与助尾根丘陵の三地点にわけそれぞれ丘陵に展開する集落について検討を加えている。

尖石丘陵においては、尾根上をはしる南作場道に添って一〇余りの炉跡（一九三三年調査）と三三の住居跡（一九四〇－四二年調査）並びに西側にくだったところの一一の炉跡をあわせて、五四の遺構が調査されている。また尖石遺跡の範疇としてとらえていた中尾根丘陵の南林道における二五の炉跡（一九三〇年の調査）がある。

与助尾根遺跡は中尾根丘陵と小川を挟んで東西に走る長峯状の丘陵の南斜面の三〇〇メートルの間に、一九四〇年－四二年の調査で二八基の住居跡が発見された。この与助尾根遺跡をふくめ三丘陵の竪穴式住居跡は六一基、炉跡四六が検出され、これを総数とみている。この数値については報告者、研究者によって若干の違いがあるが大差なく、ここでは桐原の論文を全ての住居またわ炉跡としておく。また炉跡がことごとく住居と見ることはできぬとしても、大多数は未調査の竪穴住居内部の炉跡とみて間違いなく、百基以上の竪穴住居が存在していたことが明らかとなった。また三丘陵における未調査部分を含めるとさらに大な住居跡群が展開していたことになる。

さて桐原の分析では尖石、中尾根の土器は、勝坂式、加曽利式の二式で縄文中期中葉から終末の二時期にあたるとしている。このうち勝坂式土器を出土する住居（地床炉）は尖石の西限に塊状をなして存在したとして残りの南作場道一

帯に東西に広がる住居跡の大部分は加曽利E式期に属するものとしている。これを先の水野の論文を参考にして、炉石の存在、欠如（廃屋）などをもとにして尖石最後の構築家屋は一〇棟程度と計算し、中尾根では一時期八棟内外の建物が推定されるとしている。尖石、中尾根の二丘陵における加曽利E式の住居跡は二〇戸内外の建物が存在していたとみている。

中尾根の北、小川を挟んで、与助尾根遺跡は二八基の住居跡がみつかっているが、すべて加曽利式に属しており、水野の研究により、最終の建物は一二としていることに同調している。

桐原は尖石遺跡など三丘陵の住居跡を分析し、最終建物を遺跡の状態で検討したうえで、土器の編年、周辺の環境、遺跡の比較検討をふまえて述べている。この集落論には水野の「縄文文化期における集落構造と宗教構造」が大きな影響を与えた。また縄文土器の変年については、武藤雄六の「富士見町における中期縄文土器の展開」他に強く影響を受けている。これらの研究を通じて八ケ岳山麓に展開する遺跡と環境を加えて集落の特徴、土器の検討を項目を上げてまとめているのは圧巻であった。

縄文時代集落の復元

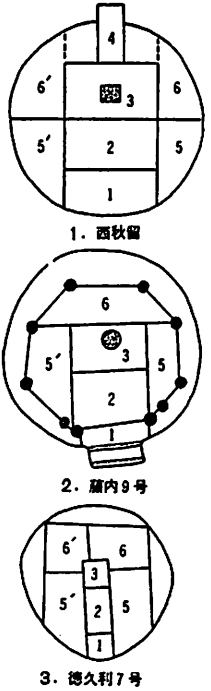
水野正好は「縄文時代集落復元への基礎的操作」[二四]という画期的研究を発表した。この研究は先の「縄文文化期における集落構造と宗教構造」が基礎となっているが、はるかに広い集落遺跡にわたっての研究にもとずいている。その内容は住まいとしての住居からはじまり、住まいの動き、流れなど細かな分析を論じ、最終的に集落の立地、構造、存続、廃絶などをまとめたものである。また住居跡の分析によって家族構造にふれ、家族集団の役割、ムラへの広がりを示し、最後にはムラのテリトリーに発展し、同族的部族に及ぶ問題を上げている。

水野はこれまでの竪穴式住居の規模と家族員にふれ、これまで用いられてきた一人が専有する面積二・五－三平方メー

トルとする数値に疑問をいだき、「人の使用の仕方」に注目して検討を始めている。竪穴内の「間」のとりかたは炉の位置と柱間のとりかたから検討している。

縄文中期後半、藤内遺跡九号住居は南面する円形住居跡で建物は八柱からなる。先ず南側の入り口を一とし、中央の炉辺三区として入り口との間を二区、炉の左右を五（東）、五′（西）、北を六区として全体を六区画に分ける。

入り口に近い二区には作業台とみられる平石、粘土をおさめた竪穴があり、昼間の採光と炉明りにより木工、土器、石器製作の作業空間と考える。三区は炉を中心とした、厨房を兼ね所として炊飯、摂熱、夜の証明、食事対話、家又はムラの行事、伝承、継承などがおこなわれ、家の中心である。一（入り口）から三（炉辺）までを協同の空間とみる。ここで一はときに幼児の埋葬（埋甕）があり、供儀的性格も考えられるとしている。炉の左右五、北側の六は敷石の間仕切りがあり居間、儀間と考えている。



第5図　竪穴内の間の取り方
水野正好・「縄文時代集落研究の基礎操作」『古代文化』21巻3・4号（1969）より

与助尾根遺跡では炉の三区を挟んで五（東側）の間には男性祭祀につながる石棒が出土し、五′（西側）の間では土偶が出土し、埋甕がみられたことから女性祭祀が考えられるとしている。また北の間については、石柱が立ちこれを祖霊を祭る石柱としている。このように間の使用については性別をもとにした家族関係が定まり、居間の性格は「座」をあらわすものと考える。炉を挟んで左は女の座、右側は男の座となる。炉の北側六の間は家長の座に相当する。

竪穴住居の「人の使用の仕方」を炉を中心として六つの間を考え、大別して協同の使用場と家長を中心とした家族関

係を「座」であらわし、性別を当てて間仕切りを考えた水野の研究は家屋構造の基本として興味がある。

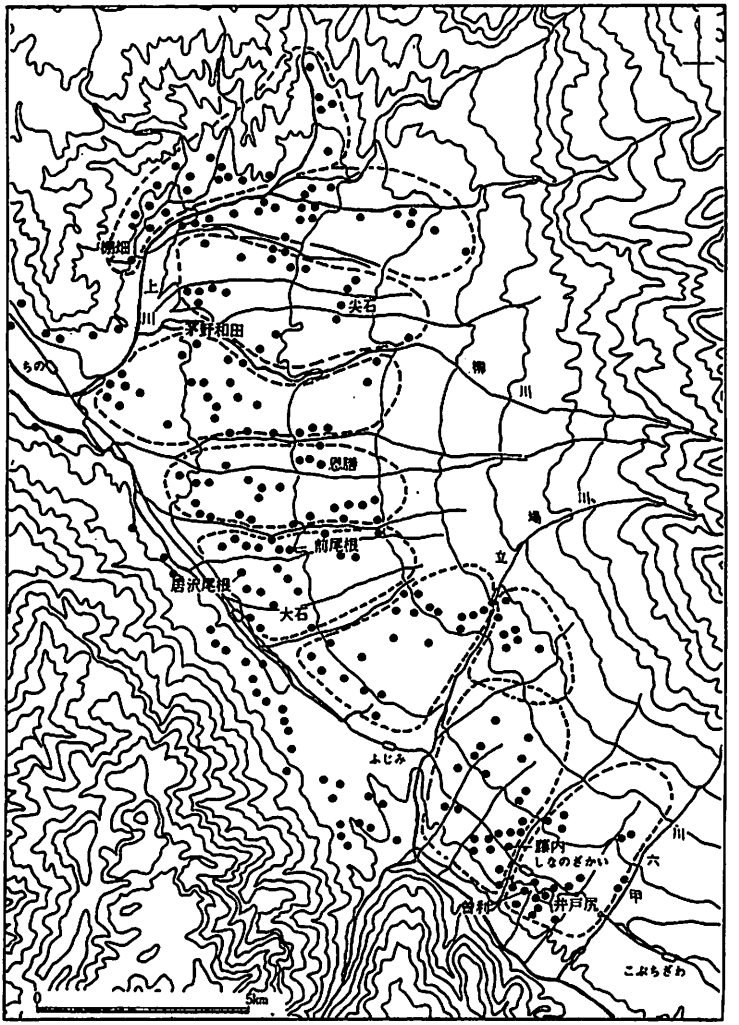
さて、遺跡に於ける遺構は住居をともなう場合、長期の定住を考えねばならぬ。立替え、移住、廃絶などについては住居跡の拡大、縮小、切り合いなどの観察が必要である。水野は与助尾根遺跡の七号住居と一七号住居跡について観察して次のよう述べている。一七号住居奥室（炉の北間）中央の石壇に建てられていた石柱は炉石とともに抜き取られて七号住居跡に移されたと観察している。一七号住居は廃止され、七号住居として立替えられたのである。このように考えると建替のさいには石炉の石材を抜き取り、再利用されることになる。炉石の有無について問題があるが、与助尾根遺跡の住居跡二八基の検査からすると水野の「住まいの流れ」の観察は興味深い。

水野の住まいの動きについての観察によって与助尾根遺跡検出の二八基の住居について炉跡の残されているものと、運び出されたものとを別けてみると、半数の一二棟に整理できるとしている。このようにみると、住居は二棟が関連して一小群を作り、小三群が左右に別れて連なる「型」が指摘できる。小三群が大群をつくり、二大群が並存している。このムラの構造が普遍的「型」であると考える。

二棟関連の小群の一棟には石柱、石棒、土偶など宗教的遺構をもつことで、ここには家長夫婦と幼児が住み、祭祀は家長がおこない、他の一棟には家長と血縁の男子や子供が住んでいた可能性がある。この二棟単位の小群に住む者は少なくとも一家族と見るべきであろとみている。

さて八ケ岳南麓に派生した丘陵を解析した川や谷、境立する丘陵にある九兵衛尾根はじめ江戸尻、曽利遺跡などのムラがあり、狩猟、農耕、採集などの生産の場はムラを構成する成員の共有するテリトリーである。ムラとムラをつないで一つの「圏」ができる。圏は「族」として把握し部族としての血縁性が想定されると結んでいる。

水野の縄文中期の集落についての歴史学的研究には幾つかの山があるが、ムラの構造と祭祀の問題は圧巻であった。その祭祀について桐原健の「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」[一五]があり指示に富む。桐原の室内祭祀は長峯状台地



八ヶ岳西南麓における縄文人の領域

八ヶ岳につらなる長峰状の尾根を単位に縄文ムラが営まれ、そのムラは尾根上を移動し、2～3の尾根状のムラと交流しながら、生活や生業の領域をつくっていた。

第6図　『長野県史』戸沢充則・「信濃史の黎明」（1989）より転写

の南斜面に位置する竪穴式住居の構造に注目する。すなわち尾根側の北の内壁は高く、左右は南に従って低くなり、南の入り口付近では内壁はほとんど見られない。このような竪穴構造にあっては北壁（奥壁）に近い位置（水野の六座）が主座に当ると推理する。

中部山岳地帯の縄文中期末（加曽利Ｅ式。曽利一－五）の住居跡は炉の位置が北よりにかたより、狭く造られる傾向があるとしている。尖石三三、与助尾根遺跡二八の住居跡のうち、炉が北にかたより、北壁の間の狭い場所に柱穴、敷石、石壇、立石などの遺構があるものは一四例に達する。特に尖石一号、与助尾根一〇号住居跡の炉の北側は極端に狭く、北壁に接して柱穴があり、このスペースでは人は座れない。かりに柱に寄り掛かっても膝頭は炉に出てしまうほどである。一般に炉の北側は上座とする考えが一般的であるが、狭い空間と、石柱などの施設からみて「人の座ることを許さない場所」、先に八幡一郎が指摘した如く特別の座を考えなくてはなるまい。

石壇、石柱、立石の前に設けられた石炉は平石を縦にして敷いた方形竪穴炉で、大形で深く造られている。とくに加曽利Ｅ式（曽利一－五期）の石炉は大きく、炉では豪勢に火を燃やした形跡がある。この痕跡は暖炉、炊飯など家族団欒の火勢を越えたものとなっており「立石に宿るマナーに奉供」するものと述べている。供物としては黒曜石、原石の破片、炉縁石に描かれた原始絵画等をあげ、関連したものとして、埴科郡戸倉町幅田遺跡一号、二号住居などの石炉をあげている。そして燃焼、破壊した打製石斧、凹石、土器、イノシシ、カモシカ、ニホンジカなどの牙、骨片等を散布、埋納などの儀式が行われたのではないかと推理している。

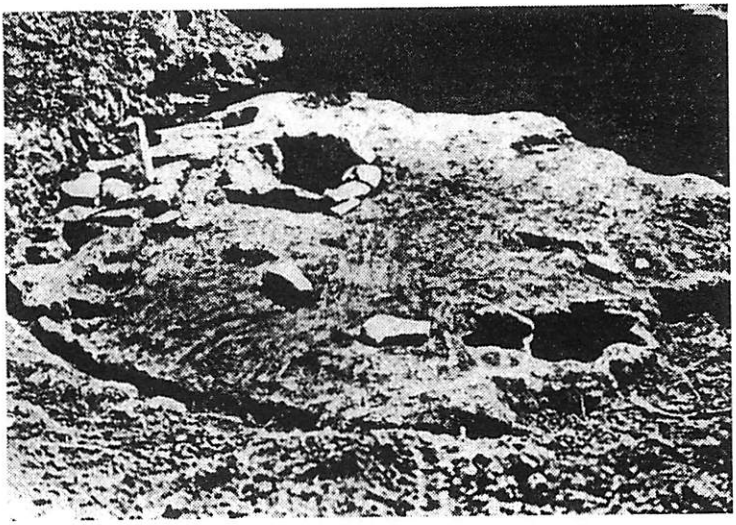
石柱・石棒などによる儀式の開始は縄文中期勝坂式期で、小田野駒方遺跡に好例がある。環状集落内部の広場の中央に長さ三一センチ、胴部径一一センチの笠形頭部を持つ石棒がみつかっている。また尖石遺跡の広場では炭屑混在の黒土充満の小竪穴が三五基以上発見されるなど、戸外儀式を考えさせる。石柱、石棒が住居の定位置に据えられ、豪勢な炉火で供物を浄化し立石にこもるマナーを祀る儀式は中期後半（加曽利Ｅ式、曽利一－五）であると述べている。

さて八幡一郎は「縄文遺跡と石」[一六]という論文で「屋内祭祀」及び石信仰について述べている。特に祭祀の場とみられる立石について、住居の北よりに石棒を立てた神奈川県秦野市寺山（後期）や山梨県南都留郡法能遺跡などの例をあげて説明している。そして与助尾根七、一五号住居跡の如く石壇を整然ともうけたものは他に知らないとして詳しく検討を加えている。これまで石敷き、組石、列石などについて墓地説があった。八幡はそれらをふまえ、石遺構についての広範な研究から詳しく考察したうえで、大場磐雄の「環状石籬」をひいて「石を立てたり、組み合わせたりすることが、ある宗教行事を示すことになる。配石遺跡をもって祭祀跡とする根拠はここにある」と述べている。八幡が啓発された大場の石籬の解釈は次のとおりである。

「原始人が石に対して有した観念は、神霊の憑依する霊体として、心霊を招く座と考え、またはそれ自体神と仰いで信仰するなど、信仰の当体とみることはそこに石崇拝が原始宗教の一課題としてあらわれてくるのである。石をもって囲み、敷き詰めた場所は心霊の宿る聖いなるところ斉庭となり、一本の立石は神を請招する憑代となり、一個の小石にも霊の宿ることを信じて、これを聖地の標的とし、呪物と見るなど、広範にわたってゆく。私は環状石籬のあるものにはかかる観念のもとに設けられたものの存在をひそかに信じたい」（原文）八幡は石敷、石組、立石などについて大場の石籬についての吟味、解釈に啓発されたようである。八幡はそれ以前ににも巨石、立石についての祭祀説は持論としていたが、屋内祭祀にふれたのはこれが始めてであったように記憶している。

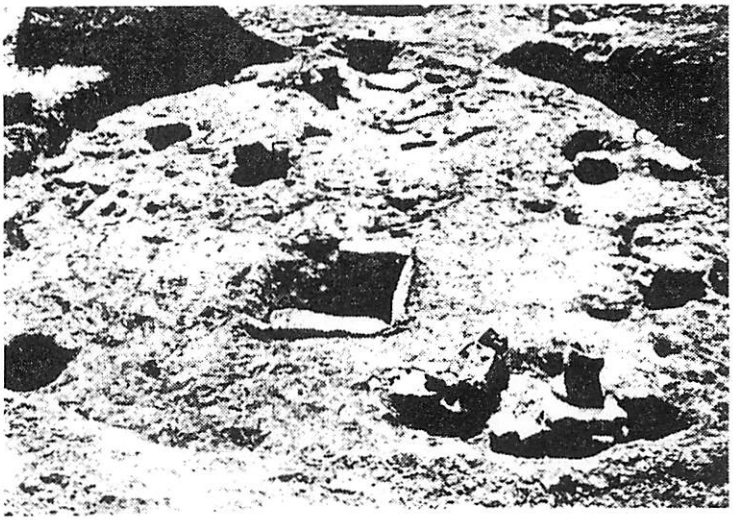
さて石壇、石柱、石棒などがみられるいわば特殊な竪穴住居跡についての論文は数多くあり、それをすべてあげることは不可能である。その総括として山本暉久によっておこなわれた分析をもってこの問題を閉じることにする。この問題について山本はかなりの研究歴がありすぐれた論文を数多く残している。

山本の最近の論文「石柱・石壇をもつ住居跡の性格」[一七]はこの問題にたいして将来の課題を残した点において注目できる。その一つは分析の緻密さである。分析から導入される結論として「縄文時代中期中葉に萌芽し、中期後葉期の中部



第７図　祭祀遺跡

１　与助尾根第七住居址（西方より、北側に石炉、さらに石柱がある）



２　与助尾根第五住居址（北方より、西北隅に石壇がある）

１、２　茅野町教育委員会『尖石』（1957）より転写

山岳地帯を中心とした地域の諸集落にみられる石柱・石壇は、中期終末期に忽然と出現する柄鏡形敷石住居との関係において、屋内敷石風習の祖源を探るうえで重要な現象と理解される」としている。この敷石住居との関係において祭祀の問題を探ろうとしている。

山本は長崎元広の共同際祀場説、水野正好の集落内際祀分掌場説を一応評価し、竪穴成員祭祀説については疑問を投げている。そして石柱、石壇を備える家についてこれまでの解釈、特殊祭祀家屋説、司祭者家屋説などではなく、祭壇状施設を住居内に設置したという時代の特性にあると考えている。しかし石柱・石壇をもつ住居から柄鏡形敷石住居への具体的変化の過程についてはいまだ十分に解明されたとはいえないとして結論を先送りにされている。

山本説をあげるまでもなく中部山岳地帯の縄文中期中葉に萌芽し、中期後葉にいたる住居跡内の石柱、石壇、石棒などがどのような目的で備えられたのかについては適格な判断は難しく、多くの推論が出ることを期待したい。藤森栄一の呪術論もここの推理にあって興味深い。

江戸尻、曽利遺跡の集落

一九三三年井戸尻遺跡保存会発足と同時に、富士見町を中心として、池袋・鳥帽子群、立沢群、釜無群など八ヶ岳南麓の遺跡調査が始まった。一九六三年保存会終了までの調査記録、『江戸尻』『江戸尻遺跡』があり、それによっておおかたの状況が把握できる。このうち池袋・鳥帽子群のなかに井戸尻、曽利などの主要な遺跡があり、曽利遺跡はその後も調査を継続し、一九七三年までに五次の調査がおこなわれた。その結果、竪穴住居跡七七基が発掘された。この調査で曽利と井戸尻遺跡は谷を挟んで、対峙し、あたかも尖石と与助尾根遺跡との関係のように、同一の集落として把握できるとしている。曽利遺跡は継続調査によって八ヶ岳山麓最大の集落跡となり、出土土器の整理、細分が竪穴ごとにおこなわれ、納得ゆく土器編年によって縄文中期初頭から中期末までの集落の変遷を検討することができるようになった。

従って八ケ岳山麓の縄文中期集落の変遷は、曽利遺跡の分析が最も参考になるように思う。

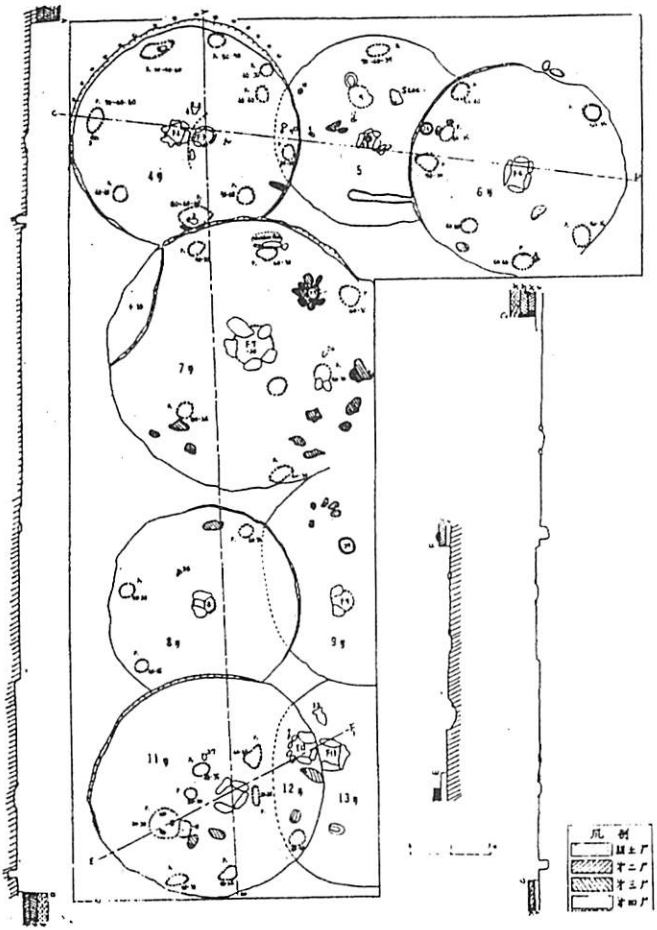
さて曽利遺跡については一九六四年の『曽利遺跡特集号』[二八]一九七八年の『曽利』[二九]の二つの報告書によって縄文中期土器の編年、集落の構造、変遷が明らかにされている。また後に藤森栄一の縄文農耕論の一つの課題となった五号竪穴出土の炭化物（パン状の食品）など興味深い問題が数多く含まれる。

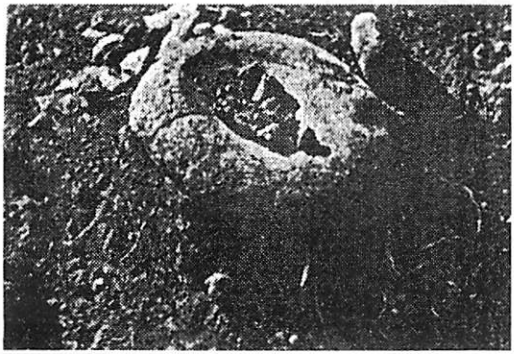
まず竪穴別による土器の編年が試みられ、土器様式と竪穴住居が識別される。例えば五号住居は四号の一部に食い込んでこれを埋め、六号に三分の一を切られている。ここで五号は四号より新しく、六号より古いことが分かる。なお住居跡の石炉の配置、形式等の特徴の吟味も注意された上で、建造、廃絶の関係を明らかにしている。さらにそれぞれの竪穴に所属する土器のセット関係をもとにして五号住居跡の土器を曽利一式として、同じ土器を出土する一二号、一八号等をおなじく曽利一式として分類する。この分類方法によって曽利五式まで分類しており、曽利編年表が確立された。

曽利遺跡の土器編年の確立は曽利遺跡における縄文中期初頭から、終末期までの集落の変遷、盛衰を明らかにした。さらに各時期の集落には大小様々な住居の組み合わせからなり、住居内の数の大小、家族構成などは住居様式に反映されることになるのかも知れないと考えている。ここで注目されるのは、各時期の住居群には一戸の大形住居がある。曽利三式を除く一、二、四、五の各時期の大形住居は台地東側の同一場所に造られていると報告されている。これを家の踏襲とみることができれば水野正好の部族としての血縁性が構成され、テリトリー（池袋地区）「部族」を考える基礎になるかもしれない。

次に祭祀の問題である。既に尖石、与助尾根遺跡で述べた埋甕、伏甕、土偶、石柱、石壇、石棒などであるが、曽利一式期の二九号住居跡では、東北隅に石柱が立てられ、釣手土器、香炉形土器が床上に残されていた。この状況から祭祀専用の竪穴かとの疑問をいだかせるとしている。

石柱、石棒の背後には祭祀権を握った特定の人物を想定させる。このことと先の家（職業）の踏襲とみられる大形建





第８図　曽利遺跡住居址の検討
『長野県考古学会誌』曽利遺跡特集号（1964）より転写

竪穴の前後関係検出（上）
５号住居址炭化植物出土状況

物とは関係があるのかもしれない。このことは縄文農耕論の基礎となる問題でもあり、今後厳しく追及の必要があるように思う。曽利遺跡は八ヶ岳山麓最大の集落であり、長期にわたり調査の結果最大限に討論された遺跡とみられ、それだけに充実した集落論を展開したといえる。

さて中部山岳地帯の縄文中期集落については藤森が縄文農耕論を述べるにあたって下敷きにしたであろう尖石、与助尾根遺跡について述べるつもりであった。しかしこの地の中期集落がみせた数々の顔があまりにも大きく、つぎつぎに発表される論文に魅了され、いささか蛇足になった。しかし今日に至まで数多くの研究者によって有益な研究発表が相次いでいる。そのうち目に止まったものについて興味あるものを羅列しておきたい。日本考古学協会以外の発表については浅学にして資料不足のため割愛する。

「長野県における縄文集落の変遷」[二〇]（一九八四年大会発表・長野元広・宮下謙司）は、八ヶ岳山麓に広がる中期初頭狢沢期から中期末曽利三期間での集落分析である。主要な遺跡の特徴をあげ、住居と墓地の関係、特種住居の問題点などを周辺の遺跡と関連ずけて展開した集落論である。

「山梨県大泉村甲ッ原遺跡の調査」[二一]（一九九二年五八回大会発表・末木健、山本茂樹、今福利恵）は前期諸磯期に散在する住居跡が、井戸尻期にはじまり、曽利期を中心として環状集落に発展する構造過程を土器形式で論じている。

「敷石住居体制下の北村文化について」[二二]（一九九三年五九回大会発表・平林彰）は長野県東筑摩郡明科町北村遺跡の集落について述べている。加曽利E三式にはじまる小集落が後期堀ノ内式期に拡大する集落を検討し、土偶、石棒を出土した集石を祭り場として集落の特徴を指摘する。

次に論文として注目したいのは「縄文集落研究の系譜と展望」[二三]（『駿台史学』第五〇号一九八〇年、長崎元広）である。一九二四年柴田常恵の富山県朝日貝塚における住居跡の発掘から半世紀にわたる集落跡研究史として重要な論文である。この論文では尖石からはじまる八ヶ岳山麓の集落に就いての論評が大半を占め、そこから起こる問題点を整理して、広

がりを関東中部地方全域に及ぼしている。論旨は明快で理論的、集落論の圧巻と言うことができる。

最近の研究発表、論文のうち幾つかを羅列したが、更に多くの研究ある。それを網羅することはできないが、それぞれ注目すべきものばかりである。

沖ノ原遺跡の集落

井戸尻遺跡保存会の調査が終了した一九六三年以後の調査で注目すべき縄文中期遺跡として一九七二年から七三年にかけて日本海斜面の新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡の調査[三四]を注目しなければならない。この遺跡が日本海斜面にあり、南斜面の八ヶ岳山麓の遺跡とともに中部山岳地帯のスケールで観察できるからである。

沖ノ原遺跡は信濃川の中流に沿った丘陵にあり、長野県栄村と接している。沖ノ原遺跡の発掘は江坂輝弥、渡辺誠などが積み重ねた編年論をもとに集落跡に挑んだ調査で、一九七二年から七三年にかけて三次の調査がおこなわれた。この調査は縄文時代の様々な問題点を余すことなくとらえたことで注目された。沖ノ原遺跡では五三基の住居跡がみつかり、直径一二〇メートルの環状集落の中央に広場があり西南に自然湧水点がある。縄文時代の典型的集落跡である。発見された住居跡は五三基で竪穴式住居跡二九基、長方形大形住居跡三基、敷石住居一基が含まれ、その特徴が細かに分析されている。

そのうち長方形大形住居跡（一号）は長軸一〇メートル、幅四メートルで、中央より西側によって長さ二一七・五センチ、幅九五センチの大形石囲炉がある。この炉を囲む四つの柱穴は直径が一八〇センチに及び、巨大なものであった。奥壁に沿って火災にあって炭化した建築材がみつかり検査によってクリと測定された。また家屋の入り口よりの覆土からクッキー状の炭化物、炭化したクリが大量に出土した。

一号住居跡は長軸八メートル弱、短軸六・四五メートルの楕円系竪穴があり、柱穴二二個が並び、やや南よりに複式

炉（U字形の石炉、北側に底部を欠いた鉢形土器が埋設されている）がみつかった。炉の長軸は一九〇センチ、短軸一二〇センチと大きい。

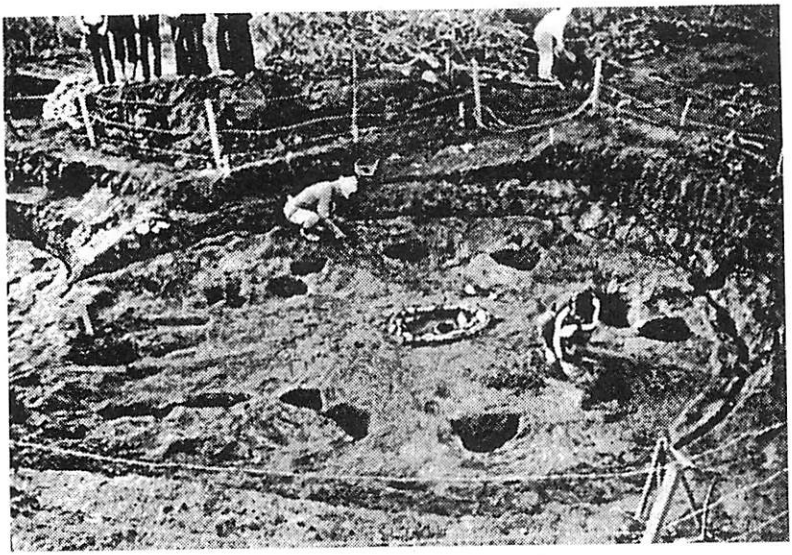
沖ノ原遺跡の住居跡の五〇パーセントは時期を明らかにすることはできず、未確認のものをふくめて集落の構成は糸口をつかんだにすぎないと謙虚に述べる。しかし長方形大形住居跡出土の木炭、炭化材などの放射性炭素C14測定をおこない四一七〇±一七五年BP（沖ノ原V期）、四四四〇±一九〇年BP（沖ノ原V期）の年代を計測している。

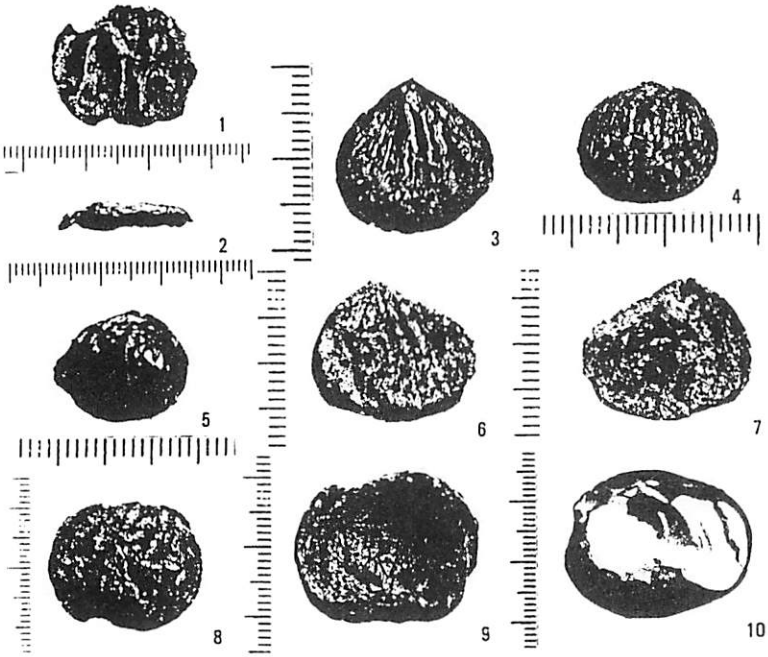
敷石住居跡は直径五メートル、偏平な敷石で床を敷き、入り口（西北西、集落内部を向く）近くに埋甕がある。埋甕は他に一〇一、一〇六号にもあり、屋外の一例とあわせて四例である。

集落は直径一二〇メートルの規模をもつ環状集落で、中央に広場をもつ典型的な縄文中期の集落である。現在までに明らかにされた住居跡は五三基であるが、未確認を含めると二〇〇を越えると推測される。これらの住居は土器によって一から六期に分類されている。その三期は馬高式で、火炎式土器が標式とされおり、八ヶ岳山麓では江戸尻三式に、関東地方では勝坂式の後半期に当る。また四期は八ヶ岳山麓の曽利一式に、関東地方では加曽利E一式に相当するものと考えてよい。この土器の分類からみると、沖ノ原遺跡は中期のほぼ全時期に及んでいると考えられ、一貫して環状集落としておきたいと提言している。

沖ノ原遺跡で重要な発見は。植物遺体であり、オニグルミ、クリ、ドングリ（ミズナラ）、トチノミなどである。この中でクリの発見が多く、大形のクリが目を引いた。ヤマグリより大きいクリは栽培種と考えられていたからである。

クッキー状炭化物は一号長方形大形住居跡付近を中心に約五〇個の多くの出土をみた。クッキー状炭化物の出土例は岩手県から岐阜県まで六件で、いずれも縄文中期遺跡に限られている。長野県では富士見町曽利遺跡（曽利三式期・コッペパン状炭化物）、豊丘村伴野遺跡（曽利三式期・パン状炭化物）などから出土し、縄文中期の生産基盤の問題には欠かせない資料である。





第９図　沖ノ原遺跡の住居址と植物炭化物

沖ノ原２号住居址・中央に石炉（中に土器）上、植物食（下）

江坂輝輝弥・渡辺誠編「津南町文化財調査報告書」12『沖ノ原遺跡』（1977）より転写

集落の全容

一九八九年『長野県史』通史編第一巻が刊行された。その第一巻（原始・古代）第一章「信濃史の黎明」[三]は戸沢充則の執筆である。第二節「原始文化の繁栄」はこれまでの中部山岳地帯の縄文中期集落論を見事にまとめた項目であった。戸沢は「一般的に評価の高い中期土器は縄文文化が生み出した象徴的な一つであるが、長野県は中部高地の中心であった」として、広義の八ヶ岳山麓文化を縄文中期の中核と位置つけている。

戸沢はこれまで尖石文化、江戸尻文化として八ッ岳山麓の集落論の総括に完掘されて全容をあらわした塩尻市俎原、茅野市棚畑遺跡に着目した。この二つの環状集落跡は完掘によって集落の全容をあらし、これまでの集落論を総括するのに相応しいと判断した。

塩尻市の東、筑摩山地から西に延びる平坦な台地の先端を占める俎原遺跡は一九八六年に発掘された。約六八〇〇平方メートルの広さから東西一〇〇、南北八〇メートルの広さに一四七基の竪穴住居と一六九基の土壙の全容が露出された。中央の広場は径四〇メートルの円形、外側に幅二〇メートルの帯状空間に住居跡が配列されていた。中央の空間を輪のように囲む典型的な環状集落であった。

戸沢によると一四七基の住居は、縄文中期の初めから終末までの長期に亘って建てられたと述べており、少ない時期は二軒、最盛期では二七軒と一三の小期があり、その全期間にわたって中央の広場に規制された集落があったと述べている。

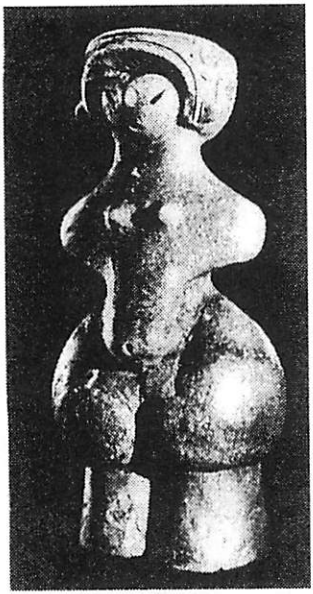
この環状集落の在り方から、中央の広場は、住居の数にかかわらず中期初頭から宗教的理由で保護され、踏襲され、規制された空間であったとみられる。そして広場は墓地、祭祀、集会などの場として利用されたと推理できる。

中央広場については茅野市霧ヶ峰南麓に突き出た棚畑遺跡の例をあげている。棚畑遺跡は一九八六年に完掘され、一四八基の竪穴式住居と、内側に約一〇〇〇ヶ所の土壙と小穴遺構がみつかった。台地ごと掘り出された一面の環状集落

は中央に広場があり、そこに土壙が掘られ、副葬と見られる完形土器、ヒスイやコハクの飾り玉が出土、墓地ではないかと推理されている。また広場の一角の小さな穴から出土した高さ二七センチ、臀部が誇張され妊娠形の大形土偶（頭部の巻文、蕨手文など呪術的文様がある）は明らかに生産祭祀をあらしたもである。

広場には建物跡と思われる小穴（柱穴）も多くみつかっており、ここに宗教的目的によって建物が建てられたとすると、広場は宗教的に規正をうけた神聖な場所となる。縄文中期の環状集落は、はじめから宗教的目的によって規正され、それを長期にわたって踏襲された構造とみることができる。この宗教的規正と踏襲によって本格的定住生活を生みだし、高い生産活動にもとずいて繁栄が持続され、そこから豊かな土器文化が形成された。

戸沢は八ヶ岳山麓、伊那谷の段丘に展開する中部山岳地帯の集落構造についての総括に集落全体を掘りだした俎原、棚畑の二つの環状集落に着目した。その理由は中央の広場の解釈を重視したからではなかろうか。とすれば尖石、井戸尻文化（中部山岳地帯の縄文中期）といわれる集落論の総括としては素晴らしい。



第10図　棚畑遺跡出土土偶
『長野県史』戸沢充則・「信濃史の黎明」（1989）より転写

四　藤森栄一と縄文中期農耕論

日本原始陸耕の問題

藤森栄一の縄文農耕論の第一報は一九四八年一一月「夕刊信州」に「原始焼畑陸耕の諸問題」[三六]というエッセーではじまる。このエッセーは当時の考古学会でも知る人は余りなかったと思う。当時は八ケ岳山麓で尖石遺跡につづいて隣接の与助尾根遺跡の発掘が行われていた最中で、学会では尖石の集落について関心が集中していた時であった。ところが翌四九年になると『歴史学評論』に「日本原始陸耕の諸問題」[三七]を発表する。この発表で縄文農耕論はにわかに学会の評判になった。私もこの論文を熱心に読んだ一人であったが当時の縄文文化研究者のなかでは賛否相半ばした。一九五〇に『史実誌』第四号には「縄文中期の集落立地について」[三八]という一ページ半程のエッセーが掲載された。これも幸い読むことができた。この三編を読んでみると、「日本原始陸耕の諸問題」は一九四八年と五〇年のエッセを書いた後にまとめたように思う。

さて「日本原始陸耕の諸問題」は冒頭で弥生時代水稲農耕社会の裏付けのために短い生涯を捧げた森本六爾の半生の旅をつづる。藤森の森本六爾えの思いは一九六七年河出書房から出版された『二粒の籾』という書物で推察できる。この書物は九州大学の岡崎敬から進呈をうけて読んだのであるが、森本を慕う藤森の心がよく描かれていた。

本論に入ると諏訪湖底の縄文前期曽根遺跡で大量に出土した石鏃が中期の尖石遺跡では僅かな出土量であったことに不信を抱いたことからはじまる。この石鏃後退について、大集落形成の背景に狩猟以外の生産活動があったのではないかとの考えを述べている。

次に尖石遺跡をはじめとする縄文中期遺跡から大量出土する打製石斧について述べている。打製石斧については大山柏が勝坂遺跡の発掘で指摘した分類を評価して打製石斧論[三九]を展開し、大山が石斧の身が彎曲しているものと彎曲していないものを分けたことをうけ、前者は柄ずれ、使用痕などの特徴から石鍬、石鋤と判定し、後者は着柄しない手持ちの

握り槌（斧）であるとする。そして木鍬は水沢沼地に、石鍬は山土に適しているとして打製石斧論の機能に触れている。

尖石遺跡で出土する石皿、石臼については木の実、芋または雑穀を製粉（臼）し、パン状に捏（皿）ねた道具とし、さらに協同の製粉台が複数発見されたことを強調し、雑穀栽培を推理している。

与助尾根遺跡第七号住居跡で明らかにされた石棒に近い石柱が床面の北隅に石で囲まれ鄭重に立てられたことについて、植物栽培の具現化した地母神信仰のあらわれとして生産祭祀に関心をしめしている。原始的な地母神信仰は初期陸耕の象徴であるとして、石柱、石棒の出土とともに土偶（女性）の出土をもって有力な証拠であると説明できるとしている。

さらに凹石については火切りの上圧石であると述べ、八ケ岳山麓の中期遺跡で数多くみつかる手頃な石には摩擦による凹がある。この石は間違いなく発火器として使用された道具であり、かくも多くの凹石が存在することは同時発火を必要とする焼畑用の道具であるとして凹石は焼畑に使用された具体的な証拠であると述べている。

焼畑の背景は尖石をふくむ大形集落、馬蹄形集落にある。その集落の立地、これまで例のない大規模構造からみて狩猟生活の範囲を越えた生産活動が要求されるとしてユウラシア大陸の森林地帯に始まったハック陸耕に類似するものであると述べている。

「日本原始陸耕の諸問題」発表以来、藤森の研究発表は数えきれないほどであるが終始一貫この論文が基礎になっている。そして藤森の縄文農耕論の理論的根底には、宮坂英弐の尖石遺跡発掘によって出現した大規模集落が下敷きとなっていることがこの論文を読めば理解できる。

一九五三年「石棒と原始農業」という論文を『農業信州』[四〇]に書いている。大筋では「日本原始陸耕の諸問題」と同じであるが、石棒についての解説が目をひく。与助尾根遺跡第七号竪穴で石棒状の石柱が立てられたことを注目し、石棒は大地から生み出す「生殖の祈り」として土偶と共に神格したものとして焼畑に関係があると述べる。さらに焼畑は地

味劣化により耕地移動を余儀なくされ、尖石遺跡も長期の定住地ではなかったと述べて短期間の集落であると書いている。

藤森の農耕論実証期

藤森の縄文農耕論は問題提起の時期から、飛躍期に移ったのは一九六〇年代前後、井戸尻遺跡群の発掘に始まる。その第一弾は一九六一年の日本考古学協会第二七回総会（国学院大学）における「縄文中期農耕存否に関する新資料―信濃境住居跡群に於ける所見」[四]という表題の特別研究発表であった。

一九六一年の曽利遺跡の発掘で勝坂式から加曽利Ｅ一式相当の竪穴住居で出土した有孔鍔付土器をはじめとし、粗製甕、装飾豊かな鉢は三つの機能別に分類できるとして、これを弥生時代水稲生活の貯蔵、煮沸、保存の三機能に相当すると述べている。また多くの勝坂式期の竪穴住居から乳棒状石斧が、加曽利Ｅ期の竪穴では打製石斧が出土（曽利五・六号の床面でそれぞれ二〇本が出土している）しており、これを堀棒から鍬の使用の転機ととらえている。

更に曽利五号の竪穴住居跡の炉跡に接して石皿が据えてあり、石皿周辺より推定五個分のコッペパン状の炭化物、一個の捻り餅状の炭化物が出土した。武藤雄六の注意深い発掘で、パンは上下に木葉をあてて焼いたもので石皿の凹みにぴったりと合っていた。このパンを調べた直良信夫はササ、ハジカミなどが含まれると報告された。このパン炭化物の出土は食物の具体的資料であり藤森の農耕論を前進させることになった。

この藤森の発表は多くの研究者を魅了させ、縄文農耕論についての議論がおこり、かつ賛否の輪が広まった。この発表で注目されたのは有孔鍔付土器を初め縄文中期土器のセットについての報告が第一で、次にパン状の炭化物の出土であった。

藤森の縄文農耕論実証期、井戸尻遺跡群の発掘は、武藤雄六との二人三脚の時期でもあった。その象徴的研究が前述

の一九六四年の「八ヶ岳南麓における縄文中期土器の編年」である。夥しい土器の分類は竪穴住居跡の出土状況によって厳しく検討され、関東地方の中期土器との対比で編年された。この研究には、武藤の冷静な作業が大きく貢献したようである。

中部山岳地帯の縄文中期土器の編年確立は関東地方の編年を普遍する上で研究の目安を広げる結果となった。特に有孔鍔形土器を初め、釣手土器などが出土し、更に人面装飾土器など多彩な土器文化の製作時期を明らかにした。この藤森、武藤の中期の土器編年は、わが国の縄文土器研究の白眉であると評価してよい。

一九六〇年前後は縄文時代の食物栽培の起源についての研究が盛んになった。注目すべきものに江坂輝弥の研究がある。その一つ「縄文文化の時代における植物栽培起源の問題に対する一考察」[四一]は藤森の研究に大きな支えとなった。江坂は縄文前期と中期の間に大きな違いがみられ、社会形態に変革があったことを裏書きしている。変革の一つが植物栽培で里芋のごとき栽培食用植物の伝播が考えられ、農業文化の芽生えがあったのではなかろうかと結んでいる。

里芋が縄文時代に栽培された可能性については一九五四年、国分直一の「粟と芋」[四二]という論文がある。民俗学を駆使した素晴らしい論文の数々を残した国分は絶えず評価されている。国分の研究も藤森の農耕論には大きな支えであったことは間違いない。

江坂は一九六二年に「縄文時代の植物栽培の存否の問題」[四四]という論文がある。ここで藤森の日本考古学協会第二七回の研究発表のパン状炭化物を引用し、この時期には穀類ではなく、芋類かも知れぬとし、芋自体を遺跡から発見するのは困難だとしながら縄文中期は日本列島における植物栽培開始の時期のように思われると述べている。

江戸尻文化と縄文中期農耕論

一九五八年江戸尻遺跡保存会発足後の発掘によって新事実か次々に発見されると藤森の縄文中期農耕論は一段と強化されていった。前項の「縄文中期農耕存否の新資料」の特別研究は自信に満ちた発表であった。その夜、藤森から発表の詳しい内容を聞くことができた。とくに蓋付壺（樽形）土器（有孔鍔付土器）については興味が集中した。何を貯蔵したのか想像を逞しくして議論が伯仲した。この発表のあと藤森は一九六三年に「縄文中期文化の構成－日本石器時代研究の諸問題」（考古学研究、三二八）を発表した。この論文では、農耕起源論にたずさわった大山柏は文化論者であり、土器編年より石器から文化階程の変遷に強い関心をもち、打製石斧から農耕の姿を追及した。その大山の姿勢は編年論者によって冷酷に否定されたとして編年学者に疑念をい抱いている。

藤森は森本の反骨的精神を評価し、その学風に深く引かれて行く様子を詳しく書いている。この項で森本が福岡県遠賀川流域の立屋敷や城ノ越遺跡の発掘をへて奈良県唐古池の発掘に至る経過が述べられているのは劇的である。

この論文の中心は縄文中期勝坂式土器についての問題である。藤森は「加曽利E式土器は全国に普遍し中期縄文の粗製煮沸器具であり、勝坂式及び阿玉台式はその極盛帯に豪華に発展した供献の形態である。勝坂式土器の編年は一向にはっきりしないとしながらその追及に努力し、五〇ちかい竪穴の発掘でその原案ができてきたとしている。

論文の後半は最初の「日本原始陸耕作の諸問題」を手直して個条的に分析したものである。その分析の一二、「貯蔵形態の発生」に注目したい。藤森は「蓋付樽形土器」とよんでいる有孔鍔付土器である。この土器は、新道一号、曽利四、五号、江戸尻二、三号、藤内一号、狢沢一号などの廃絶した跡から煮沸、供献形態の土器とともにたいてい一個づつ出土している。時期は縄文中期前半、新道期（阿玉台相当）からみられ直行の口縁部の下に凸帯を巡らし、その上縁に添って小孔一〇－二〇か貫通されている。口縁部の凸帯は上からの木蓋をうけ、小孔は蓋どめの緊縛孔で農耕用の種子貯蔵の土器である。種子は芋、穀物、木の実だろうかと思案したが武藤雄六は酒樽だといったと書いている。最近渡

辺誠は飯田箱河原遺跡の釣り手土器とともに出土している有孔鍔付土器の出土状況から果樹酒を醸す壺を連想しているようである。まことに面白い推理である。私もこの酒樽説には何となく賛成である。

一九六三年『考古学研究』に発表した日本石器時代研究の諸問題という三部作の一つ「縄文時代農耕論とその展開[四七]」がある。この論文の冒頭は、大山柏、森本六爾の農耕論と山内清男の反論からはじまり直良信雄の「古代の穀物」、江坂輝弥の「後期縄文式文化期に農業は行われたか」、樋口清之の「稲以前の日本の農耕」、井沢幸平の「栗帯文化圏」芹沢長介「縄文文化の性格その位置」などなど縄文中期農耕論賛否について述べている。

さてこの賛否の項の終わりに澄田正一の飛騨高地における石皿の研究「日本原始農業発生の問題[四八]」数点の研究をあげてその成果を述べている。澄田の研究は地味であるが厳しく吟味して石皿の用途を指摘している。この石皿の研究は感動をこめて拝読したこともあってその業績に注目していた一人であり、何時か許しを得てその研究足跡を追い求めたいと思っていた。

藤森の農耕論の支えとなったのは国分直一の芋作[四九]の予想である。曽利遺跡発掘のパン状炭化物などの食品（雑穀）のつなぎには芋のような粘性の強いものが必要であるとして、パン状の炭化物に執着し、今後の方向を箇条書きで述べている。

1　縄文中期の自然環境（気候）から植物の種類を限定する。

2　中期遺跡に伴う湧出、渓流などの地点での泥炭、泥床の調査による花粉研究から栽培植物を期待する。

3　曽利遺跡三号住居跡出土の五個の焼パンの材料の分析に注目する。

4　集落の大小にかかわらず焼畑は行われている（三宅島の切りかえ畑など民俗資料）ことから中期集落論の見直しが必要である。

5　土器の見直し、特に有孔鍔付土器については醸造樽にしろ、種子貯蔵しろ農耕的なものとして注意したい。

このように述べて、曽利五号住居跡出土のパン状炭化物と有孔鍔付土器に注目が集中している。そして森本六爾の「一粒の籾、もし地にこぼれ落ちたら、ついにただ一粒の籾に終わらないだろう」（『日本原始文化』序文）との文章をひいて、坪井清足[五〇]、水野正好等の尖石、与助尾根遺跡の集落構造論を一粒の種とし、さらに村落祭祀（勝坂期）、家族祭祀（加曽利Ｅ期）との間に農耕社会発展段階を試みた桐原健などの構想を二粒の種とし、江坂輝弥、野口義麿の勝坂式土器の蛇身装飾文の展開は縄文農耕論のさらに一粒の種となると結んでいる。

藤森の「一粒の種」の中で最も大きな「種」は壺井の岩波講座『日本歴史講座』一の「縄文文化論」ではなかったろうか。壺井は藤森が持つ疑問に答えるように、縄文中期の集落の拡大と定着性、破壊された土偶の出土に関心を示している。前者は採集から初期農耕の可能性を、後者は生産祭式（儀礼）について、大集落と農耕との関係を方向づけた点である。ここでも具体的な栽培植物の出現に問題があるが、農耕こそ集落の拡大を支える基本的基盤であると考えれば、壺井の縄文中期の集落の拡大には原初農耕の存在は欠かせない。

壺井の「縄文文化論」は藤森の「農耕を否定しては理解できない社会機構」の考えとにており、藤森にとっては一粒の種（集落論）二粒の種（際祀）を合わせた「大粒の種」であったように思う。

曽利遺跡五号住居跡出土のコッペパン出土と反響

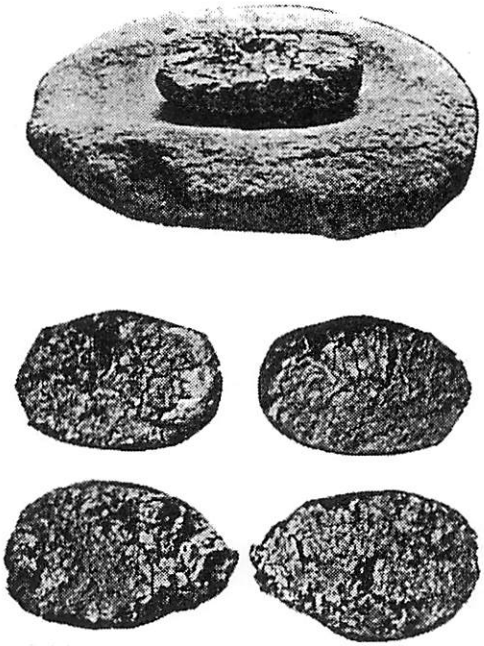
藤本栄一の縄文農耕論の圧巻は、曽利遺跡五号住居跡からコッペパン状炭化物が出土たてことである。『長野県考古学会誌』創刊号[五一]には一九六〇年三月一六日のコッペパンの発掘状況が詳しく述べている。まず安山岩の自然石四個を組み合わせた炉がみつかり、炉の中央には土器が埋めてあった。この炉址付近から石皿、釣手土器、有孔鍔付土器などが出土した。とくに炉址の西側から大変な炭化物が出てきた、と書いている。コッペパンを蒸し焼きにしたような炭化物である。三号住居跡に近いところの床面上の凹みにも石皿の凹みと一致する炭化物三個分と、捻餅状の炭化物が発見さ

れた。捻餅の炭化物は幸いに完全であったので石膏でかためて採取すると書いている。

炭化物については「五号竪穴出土のパンジ状炭化物」の項目をもうけて発見状態と復元について述べている。そこには「バラバラに検出された炭化物がパン状に復元されようなどとは夢想だにしなかった」と書いている。午後から発掘に加わった藤森は、かなりまとまった炭化物を指頭とナイフで完全に掘り出し、石膏で固めた。あたかも最近まで食品として作られた「捻餅」と同じ形であったことに驚嘆したとも書いている。

パン状炭化物は武藤雄六が二年に渡って小片をつなぎ合せて二個の固体に復元することができた。復元された炭化物は次のような大きさである。

形状	重量	長径	胴幅	厚さ
コッペパン状 一	四四〇g	一六・五cm	一〇・〇cm	四・〇cm
コッペパン状 二	三三九g	一五・六cm	一〇・〇cm	三・七cm
ひねりもち状 三		一三・〇cm	五・〇cm	三・〇cm



第11図　曽利遺跡５号出土炭化パン状食品
『長野県考古学会誌』曽利遺跡特集号（1964）より

二個のコッペパン状の炭化物は濶葉樹または笹の葉を上下に挟んでいたようで葉脈らしいあとが残っている。完形以外の残片一二〇ｇは直良信に、八〇ｇは渡辺直経に鑑定を依頼したとしている。出土したコッペパンは四個、捻餅一の計五個である。

鑑定をうけた直良はカタバミとササの核らしいものを検出したとの連絡があったが、渡辺は検査の過程にあったようで報告書には記載がない。藤森は分析にかける希望を率直に現している。

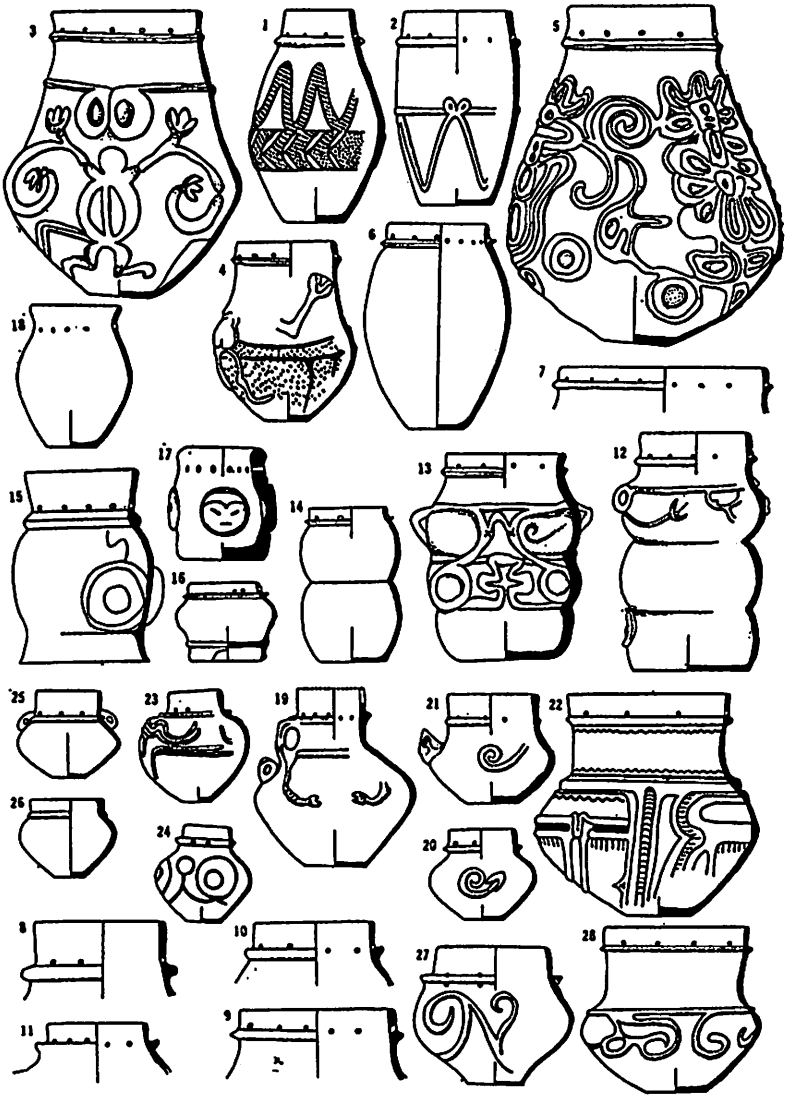
渡辺は一九六五年、江坂輝弥が司会する「縄文時代農耕をめぐって」[五二]の座談会で「イモという澱粉質は残っておらず、炭酸カルシュームが圧倒的に多いことが分かった」として具体的な植物には触れることはなかった。

曽利五号住居跡から出土したパン状の炭化物は一体どのような植物が食用化されたのであろうか、にわかに食用化された植物に関心が集中したのは当然のことである。しかし藤森が病で倒れ、無くなられた一九七三までコッペパン状の植物の正体はついに分からなかった。

有孔鍔付土器

藤森栄一の縄文中期農耕論の中で一番興味を引いたのが一九六三年『考古学手帖』二〇号に発表した武藤雄六共著の「中期縄文土器の貯蔵形態について―鍔付有孔土器の意義―」[五三]という論文である。藤森は最初にこの土器を富士見町高森新道遺跡第一号竪穴住居でみつけだした。この樽のような形をした土器に藤森は特別に執着した。この不思議な土器の器形、文様などを観察した藤森は、蓋付樽形壺とよび、ひそかに穀物などの貯蔵器ではないかと考えて農耕論の組み立ての論拠とした。その論旨は一貫していて数多くある論文の中でこれほど具体的で明快な研究はなかったように思う。

さて、有孔鍔付土器は新道一号竪穴出土土器のセットとして掘り出された新道期（勝坂式の初期）、縄文中期前半に登場する。新道遺跡では竪穴の東壁近くで床面に据えられた状態で立ったままの姿勢で潰れて出土した。高さ三六セン



第12図　有孔鍔付土器集成図
藤森栄一「中期縄文土器貯蔵形態について」
『考古手帳』20（1963）より転写

チ、胴径二七センチでその用量は日本風で七升ぐらいであると書いている。

有孔鍔付土器は壺形土器（樽型、壺型）で口縁直立し頸部に凸帯を巡らし、その上縁に小孔を配列する。胴部は樽状に膨らみ、文様として動物、蛇、日輪、人面と思われる文様をあらわし、平底に終わる。土器の内外壁に塗料（樹脂と思われる）が塗られ、磨研されている。この土器については藤森と同じように武藤も興味を持ち、実験を含めてかなりの研究成果をあげ、議論をたたかわせている。このように有孔鍔付土器は藤森と武藤の協同研究の形で進められた。

藤内遺跡の円形空地でミミズク取手区画文土器とともに出土した大形有孔鍔付土器は据えられたまま潰れていた。高さ五三センチ、容量は一斗八升で、大きさ、施文などからみて有孔鍔付土器の最盛期とみている。精選され胎土を厚く練り上げ、内部は黒、外部は朱色の塗料を塗り、表面には踊る人らしい表現をあらわしている。この踊る人らしい表現について、春成秀爾は佐原真と共著の『原始絵画』[五四]で「この人にはヘソの緒がついている半人半蛙の精霊で三本指、足の開きは蛙だ」とみている。藤森は有孔鍔付土器の文様についてマジカルな精霊的モチーフとよんでおり、この点は春成の視点と同じで面白い着想である。

この有孔鍔付土器の用途であるが、藤森は植物の編み物の蓋を鍔まで被せ、小孔列と結び付けて種子貯蔵具と考えて原始農業と結びつけようとしている。これに対して武藤は酒樽説で対抗する。藤内水道一号から出土した有孔鍔付土器の中の土壌から検出したヤマブドウの種が検出されたことで酒樽説が高まったと書いている。これも最近の著作であるが渡辺誠は『よみがえる縄文人』[五五]のなかで「有孔鍔付土器は果樹酒を醗酵させる樽のようなもので、中期になると大形化して樽らしい形になる。とても正常とは思えない人体や顔面、蛇などが表現されている。醸造の発展はそれを促した社会的変化が注目される」として、酒を醸す樽であったのではないかと述べている。渡辺の着想はいつも先見的なことで評価されている。ついでであるが江坂輝弥は注口土器の注ぎ口が土器の下部についているのは果汁の沈澱が下部に集中するからだといっている。最近縄文早期（押型文土器）に注口壺形土器が九州各地でみつかり、果樹醸造はかなり古

く考えられるようになった。

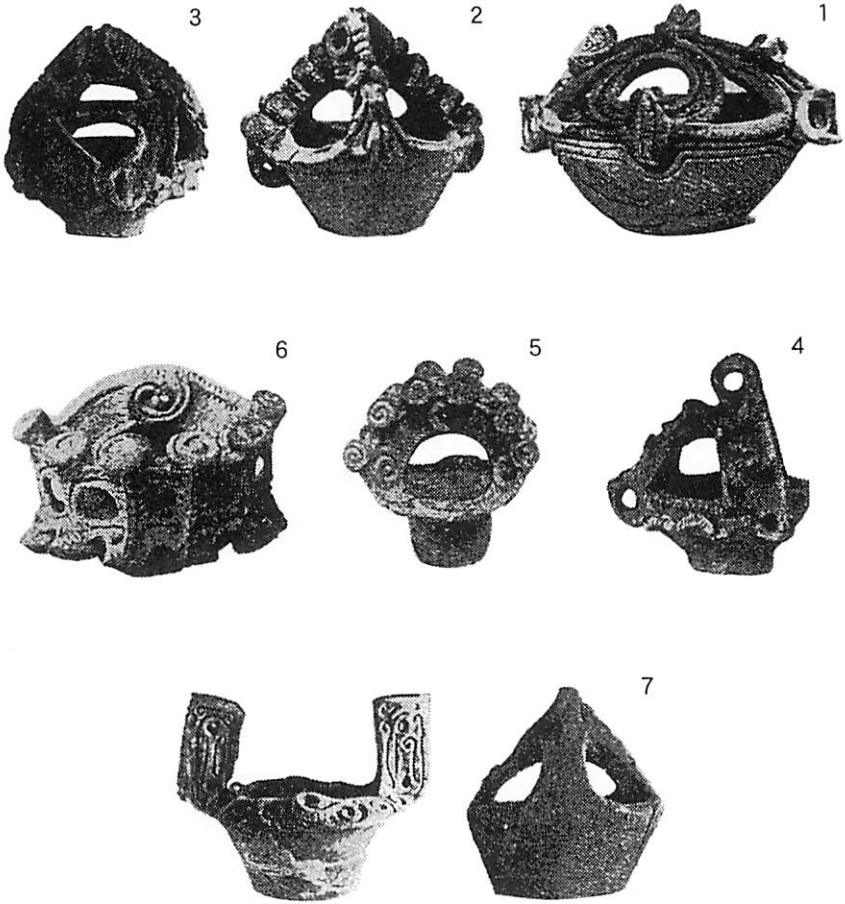
藤森は武藤の実験報告の中から問題を摘出して報告しており、有孔鍔付土器と同じ編年の酒器（台付壺）をあげて酒樽説にも興味をみせている。つぎに酒については、薬であったか、祭りの神のためのものとして、原始酒造可能な野生の植物種をあげている。更に醸造課程についての方法や保存法まで検討した武藤の酒樽説を紹介し、最後につぎのように述べている。

「有孔鍔付土器が穀物の貯蔵樽にしろ、酒樽にしろさして緊急なことではない。その種（生命）を越冬させ、奇跡のように春の生命をよみがえらせることが、蛇や太陽や神（人面）や踊りが穀類、酒の貯蔵形態という文化現象となって表現されるところに縄文中期文化の本質がある」と述べて「中期縄文土器の貯蔵形態」を閉じている。この藤森の意見に反対を述べる理由はみあたらない。この論文の中味は藤森の縄文農耕論のクライマックスではなかろうか。

釣手土器

有孔鍔付土器とともに藤森栄一は釣手土器についても注目している。一九六三年武藤雄六と共著「中期縄文土器の貯蔵形態―鍔付有孔土器の意義」の後、一九六六年には「釣手式土器論―縄文農耕肯定論の一資料として―」[五六]という論文を書いている。この標題を見てもわかるように藤森は釣手式土器も有孔鍔土器と共に原始陸耕の資料として考えている。藤森の論文に使用している注目すべき釣手土器の発見があったとされる伊那市御殿場一一号住居跡出土の土器は一九六六年三月発掘され、公開されたとき釣手土器の先端に表現された人面に関心をもった。この釣手土器について渡辺誠[五七]は「神の火によって焼かれ、苦しみながら穀物をうむ女神イザナミ」の神話、吉田敦彦の指摘を交えて再生観念をしめす好例であると述べている。

中部山岳地帯の釣手土器については鳥居竜蔵[五八]によって注目されている。釣手土器は縄文中期のごく限られた地域、中



第13図　釣手土器

藤森栄一「釣手土器論」『文化財』39（1966）より転写
1、2　古い形式　信濃大深山、同札沢…（井戸尻Ⅰ・Ⅱ期－勝坂Ⅱ）
3、4　最盛期　信濃江戸尻……（井戸尻Ⅲ期－勝坂Ⅲ）
5、6　三窓式　信濃海戸……（曽利Ⅰ期－加曽利Ⅰ）
7　三窓式（最後）信濃曽利……（曽利Ⅰ期－加曽利Ⅰ）

部山岳地帯から南関東地方にかけての範囲を中心として分布し、数少ない特殊な土器として扱われてきた。釣手土器は尖石遺跡発掘以来各地の遺跡から出土し注目されてきたが一九六六年段階、井戸尻遺跡群調査で各遺跡から出土した竪穴住居の二三戸に一軒の割合で出土する稀有な土器である。

釣手式土器は縄文中期勝坂期、八ヶ岳周辺では井戸尻一、二期に出現したものと考えられる。深鉢型土器の取手に人面、蛇体文が装飾文として出現するのとほぼ同時期と考える。

「藤森は釣手式土器を五期に分類し一期を江戸尻一、二式にあて釣手は三本、三窓の例が多いとしている。三窓のうち一窓が大きく、そこが正面である。全体として器幅の割に背が低く吊り紐孔は正面の主釣手の芯部を貫通している。二期は江戸尻三式に当てクルミの殻を思わせるように三本鼎立形の高背の天蓋式で、蛇体文、人体、顔面などの装飾が出現する。三期は曾利一式の時期に当て天蓋式が後退して二窓式となり渦巻文が主体となる。さらに奥行きが浅く偏平となる。四期は曾利二式に当て、釣手土器では施文が後退し、単なる取手に変化する。五期は曾利三式に当て釣手は柱状形の二本の把手に変わり、上端に釣手の孔がみられる。

さて、この極めて稀有な釣手土器の用途はなんであったろうか、江戸尻三号竪穴住居跡出土、二期の釣手土器は内面に黒い汚染がみられ、天蓋の内面は真っ黒くススが付着していた。内面の汚染は油脂質の物質で満たされていたと考えられる。さらに釣付根のところに灯芯らしいこげあとがあるのもある。同じ二期の長野県伊那市御殿場一一号竪穴出土の釣手式土器には油煙が全面に付着していたという。藤森はこのような事実から推理して照明具ではないかと推理する。さらに推理は続き、釣り手土器に獣脂をいれて赤い火を燃やした家はどのような家であったろうか、という疑問である。

出土状況からみて二〇軒に一つぐらいの割りでしか出土例が無いという稀有な土器であること、破片出土の多い中でほぼ完形の状態で出土すること、さらに有孔鍔付土器はじめ、立石、石棒、土偶、埋甕など宗教的要素と考えられる構造物、遺物と共伴することが全体の半数以上と多いことなどからみて単なる照明としてではなく、特定の家での呪術的

灯明とみるべきだとしている。釣手土器について藤森は「蛇や蛙をはじめ冬眠からさめて春の新しい土の中からわいてくるアラタマの生命をむかえるために長い祈りの冬があるとしたら、釣手土器はうってつけの道具といってよい。筆者はこの資料を日本原始陸耕の小さいながら一資料として提出したいと思う」と結んでいる。

釣り手土器について渡辺誠は「神の灯をともす土器として藤森の考えに近い意見を述べている。渡辺はトドやアザラシなどの生態を見事に描き出した装飾文のある青森県大湊近川遺跡出土香炉形土器に注意する。灯はトドやアザラシの油を燃やしたかもしれないとして釣手土器も縄文人の神の灯とみることは想像にかたくないとしている。そしてこの釣手土器の系譜を引くのが縄文後期、晩期の香炉形土器であると述べている。

藤森の農耕論に反論する

藤森は一九六三年前後に次々に論文を発表している。その内容からみてよほどど充実した年であったと思う。江戸尻遺跡を中心として、数々の成果が相次いで公表されたのもこの時代であった。特に、縄文中期集落の構造、祭祀遺構、有孔鍔付土器を初めとする土器編年の見通し、そしてパン状炭化物の出土などが注目された。渡辺誠が後に「藤森栄一、中期農耕論論拠の整理[五九]」として上げた次のことがすべて構築された時期で、藤森の充実時代である。渡辺の藤森の論拠の整理とはつぎのとうりである。

一　栗帯文化論　二　石鏃の希少問題　三　剥片の復活（籠細工の盛行）　四　石匙の大形粗型化（採集具）
五　石皿の盛行　六　凹石の意義（クルミ割り）　七　土堀具の盛行　八　石棒、立石と祭壇
九　女性像しての土偶　一〇　土器機能の分岐　一一　蒸器の完成　一二　顔面取手付き甕
一三　神の火（釣り手土器）　一四　貯蔵具の形態　一五　埋甕の問題　一六　蛇、人体、太陽の施文
一七　集落の構成　一八　栽培植物の問題

などである。これらの問題は『江戸尻遺跡』（一九六五年）などその後、藤森の著作の中で充分述べられている。

さて藤森の一九六三の著作「縄文中期文化の構成」「縄文時代農耕論とその展開」が発表されると、それについて春成秀爾、赤松啓介、永峰光一などの論文があいついだ。

藤森の農耕論に対して春成秀爾の論文は具体的で反響をよんだ。春成の論文[六〇]は「藤森栄一・縄文中期文化の構成を読んで」である。「実際に農耕の資料がなくとも農耕を否定しては理解のつかない社会機構」を縄文中期の社会において組み立てようと試みる藤森の構想について意見を述べている。

まず石鏃の減少をはじめ、石匙の粗大化などは狩猟的社会になじまないとする藤森の意見に対して蜆塚貝塚では、貝層から石鏃、石匙の出土が少ないにもかかわらず獣骨、骨角器が数多く出土し、狩猟が盛んであった例をあげている。中部山岳地帯では貝塚が形成されず獣骨などは遺存不可能である。そのことと石鏃がすくないことで、狩猟の後退の理由にはならないと述べている。

打製石斧については、植物採取の道具であるとし、石皿は植物性澱粉の処理用具という推察の域に止どまる。凹石の用途について藤森は焼畑のための発火器としているが理解に苦しむ。このように石器についての藤森の見解は、用途に対する論証が不充分であるとして厳しく反論している。

藤森は石棒、土偶を土地生産の神として、そこから農耕を引き出そうとしている。しかし狩猟社会においても石棒や土偶は土地の生産と密接に結びつくという考えもなり立つ。石棒や土偶の解釈は水掛け論になる。

また中部山岳地帯の縄文中期土器は用途に応ずる器形の分化（煮沸、貯蔵、祭祀）を証明できるとして農耕社会の条件とする藤森の考えには狩猟社会においても生産力や生産用具の発展に応じて用途別に分化しても不自然ではないと評している。

以上のように藤森の中部山岳地帯の縄文中期農耕論の基礎を整理して、決め手は栽培植物の検出が必要である。そし

て食用植物が検出されるとすれば、イモ、クズ、ワラビなどの根茎類であろうかと述べている。

つづいて一九六四年には赤松啓介[六一]『原始農耕についての断想』、永峰光一[六二]「勝坂期をめぐる原始農耕存否問題の検討」が発表された。春成以下の論文について藤森は「縄文中期農耕肯定論の現段階[六三]」で右のように答えている。「筆者らが信じているような原始農耕の決め手は握ることがたしかに出来なかった。筆者の固く信じてきた縄文中期農耕論は、一応、自らこれを棚上げのかたちにして巻き終えた」

と述べ、さらに「新しい縄文中期農耕論の可能性について」ということで永峰氏の収穫民にちかいだろうが雑木林のなかで、濶葉樹の果実と、そこに集まる生物を中心とした植物嗜食民の生活を考えた。野火による原野に食物の栽培は難しく考えなくても可能だとして否定論を虚心に受け止めたいとしている。

藤森は春成以下の意見には充分謙虚に答えようと努力していることが、この論文でよく分かる。ここで縄文中期農耕論についての新たな期待を膨らませることになる。そして八ケ岳南麓の竪穴住居跡、沼沢地の研究から植物食の実態が分かることを信じていると結んでいる。春成の「決め手となる食物の検出が必要だ」とする意見に答えるためには八ケ岳南麓の泥炭地の発掘に期待しなければならなかった。

さて一九六五年の『古代文化』第一五巻第五号は縄文時代農耕論特集号として「縄文時代農耕問題をめぐって[六四]」という江坂輝弥を司会者とする座談会が掲載されている。座談会は藤森の野火による灰を肥料に発芽したクリ、クヌギ、ナラなどの植物食は計画的な山焼きによって確保できるということから始まる。そして曽根遺跡のコッペパン状の炭化物に関連して議論が集中している。江坂は「パン状の炭化物は、石皿に粉をふって葉脈の太い葉（カシワ、トチ）にくるみ、更に石皿をかぶせて水をかけ、蒸し焼きにしたものと思われる」と述べている。材料の検査に当たった渡辺直経は「イモという澱粉質は残っておらず炭酸カルシュームが圧倒的に多いことが分かった」と実験結果を述べる。前川文夫は「まぜもののなかのヤマイモ、サトイモの中にはいっている炭酸カルシュームの結晶から、炭酸ガスが膨らんだので

はないか」の意見に渡辺は「焼いて塩酸をかけるとものすごく発泡する」と実験経過を述べている。甲野勇は「得体がし知れないですね」と述べている。このコッペパン状の炭化物は理化学の分析や農学的知識では理解できないかなり難解なものであったようである。

つぎに大山柏が注目した打製石器論が討論がされている。議論は石斧の着柄、身の先端に生ずる使用痕についてが問題とされ賛否があった。

座談会では農業の定義も議論されている。ここでは「種をまくということに基礎をおいてあつかわねばならないのではないのか」と意見がだされる。関連して花粉分析によって栽培植物がどの程度の効果があるのかについて前川は「現在の花粉分析ではっきりいえるのは針葉樹林の花粉だとか、クルミの花粉の類である。そうすると花粉をみつけて確認することは容易でないことになる。ヤマイモでは花粉はできないし、サトイモでは花が咲かない。また花粉が化石としてでるためには、風で飛ぶもの（風媒化）に限る。クリなどは虫媒化ですから駄目。そこでサトイモのばわいは皮ぐらいは少し残るでしょうが、ヤマイモは無理だ」前川の意見ではヤマイモやクリが栽培植物であったということは非常に困難だという厳しい意見になった。しかしこの意見は分析が進歩すればするほど尊重しなければならないと思う。

報告書『江戸尻』

一九六五年藤森栄一は長野県富士見町周辺の縄文中期遺跡群発掘（一九五七－六三年）の膨大な資料にもとずく成果として『井戸尻』[六六]遺跡の報告書を出版した。藤森が戦後宮坂英弐の尖石、与助尾根遺跡の縄文中期集落を下敷きとして取り組んできた縄文中期農耕論の総括ともいえる。

先に述べたように『江戸尻』には井戸尻遺跡をはじめ、九兵衛尾根、藤内、狢沢、新道、曽利などの重要遺跡のほか二〇余りの遺跡が総括される大著である。ここで調査された竪穴式住居跡は総計七九に及び、重複して露出され竪穴の

切り合い（時期を異にした住居跡）から出土した土器をふくめて、三九〇に及ぶ実測可能な土器を整理し、これまで以上の精密さで形式分類し、編年の強化をはかった。その基礎となったのが特定される竪穴住居内のセット資料である。これまでの土器編年の研究ではもっとも格調の高い資料といえよう。

まず集落の構造は縄文中期前半と後半に分けられている。約一〇〇〇メートルの等高線上にみられる特殊な集落（環状集落など）と広範囲に分布する規模の小さい集落である。前者は中期前半、後者は後半の集落であると述べている。住居跡では円形住居から不整形大形えの変遷、その変遷の路線で土器炉から石炉（石囲炉）えの炉の変化がみられる。また内部に石壇と石柱、埋甕などがあらわれる。このような住居構造の変化の原因についての展望が書かかれている。集落、住居跡についてはこれまでの研究成果を踏まえての総括である。

つぎに土器の編年研究については住居跡の建替、拡張、放棄、廃絶などによる変化と、順序など建物構造の調査を重視しておこなっている。そのために竪穴の内部構造や遺物の出土状況はほぼ完璧な調査がおこなわれている。それによって炉跡の位置、炉の構造変化も土器の編年とともに変遷を辿ることができる。

井戸尻遺跡群出土の土器は一九六四年一〇月二四日、日本考古学協会（群馬大学・武藤雄六と共同）で発表した「八ケ岳南麓における縄文中期土器編年（上・下）と基本的に同じ内容であった。土器の研究は住居跡単位としておこなわれた。住居の廃絶したさいに埋没した土器をセットとして標式土器とする。重複する竪穴から出土する二時期の土器セットをもって編年を設定し、土器として整理されている。

このようにして編年が確立された土器は縄文中期中葉を黎明期、爛熟期、中期末葉を退嬰期、終焉期の四期に大別している。この分類については前述しているので割愛する。繰り返すようであるが曽利四号住居跡出土の曽利一式のセットは注目すべきで、渦巻文把手付土器は最高の装飾土器である。前述した有孔鍔付土器（貯蔵・醸造）や香炉形土器（灯火）など問題のおおい土器について解釈がなされている。

『江戸尻』のもっとも重要な問題は曽利五号住居跡から発見されたコッペパン、捻り餅状の炭化物についての詮索であった。この詮索の前提として狩猟的要素の少ない石器（石鏃、小形石匙）とともに打製石斧（農具・鍬）、石皿（製粉）、凹石（発火器）、大形粗製石匙（根切り・木の皮剥ぎ）などの出土が重視されている。また土器には煮沸としてのほかに蒸す機能があるとして、植物性食品の利用度が高まったとしている。

コッペパン状の炭化物については必要な実験を重ね栽培種、野生種の植物を石皿で粉砕して焼いてみると栽培種（コメ、ムギ）、野生種（ドングリ、クリ）の順番で炭化物に似ているものができるとしている。この実験をみても栽培種に期待していることが分かる。

さて、八ケ岳南麓一帯は濶用樹林（落葉広葉樹）の植生豊かな地帯であり、野火によって樹林は焼失、再生され、樹木の輪廻にあわせて人は去来する。この自然の輪廻の間にクリなどの植物は再生し、住居の周辺に移植が行われ、管理が行われたとする。このことが藤森の「実際に農耕資料がなくとも農耕を否定しては理解のつかない社会機構」の追及の基本姿勢であるように思う。

藤森栄一、名著出版

藤森栄一の縄文中期農耕論は八ケ岳西麓富士見町を中心とする井戸尻遺跡の調査で燃え尽きた。それは縄文農耕論に集中した執念の時期と言ってよかろう。その全てを投入したのが一九五八―六三年までの井戸尻遺跡群の調査と一九六五年発刊の『井戸尻』の調査報告書の刊行であった。この調査と出版に当たっては、宮坂英弐はじめ武藤雄六などの協同研究者に加え、おおくの支援者に支えられたいわば長野県全体の協同研究でその頂点に藤森が存在した。

さて藤森の縄文農耕論は一九四九年頃から数多くの論文を書いて厳しく学会に立ち向かった。その厳しさが『江戸尻』発刊以後やわらぎをみせるようになった。一九六九年『縄文の世界―古代の人と山河』という単行本を講談社から出版

したのがそれである。

長野県の中央を南北に走り抜け、東西を分断する糸魚川・静岡線（フォッサマグマ）の大地溝帯から始まる。そして人類の足跡を野尻湖底のナウマン象を狩りする人に求めて後期旧石器の発掘から書きおろす考古学のドラマである。面白いといっては失礼だが、全体として考古学の諸問題を学史的に時代を追って書き下ろしている。

この本の圧巻は八ケ岳とその山麓に展開する広大な大地のドラマである。ここは藤森のよほど気にいった故郷なのか描写が素晴らしい。「東は千曲川流域、南は甲州韮崎までも長い泥流台地を引いて富士川の上流釜無川を育てている。西麓は天竜川の水源となって広い扇状の裾野は泥流礫層のうえに硬質ローム、パミス、硬質ローム、黒土と重なり、その上を幾つかの縦断川が車輪のフレームのように輻射谷を刻み、その谷の両側には帯状台地が一つおきに並んでいる」と書いている。これを読むと台地にはクリ、クルミ、ナラ、クヌギなどの木がどこまでもつづき、いろんな下草が生えている様子が目に浮かぶ。

裾野の台地に人がやってきたのは、二万年前の後期旧石器時代である。それを最初に発掘したのが宮坂英式であったと書いている。つぎに長嶺の一群れのカラマツの下に三角錐のような巨石がある。これが尖石で、最初の発掘者は宮坂春三である。宮坂は四〇センチほどの小石のサークルに囲まれてほぼ完形の土偶を発掘した。ここから尖石遺跡は鳥居龍蔵、八幡一郎など著名な考古学者の知るところとなった。一九二九に伏見宮博英殿下の発掘が行われ、これを契機に宮坂英式の尖石遺跡の執念の調査が開始された。このような一連の出来事を分り易く書いている。

一九五三年境史学会（富士見町合併前の境村）ができた手初めに藤森が「縄文中期農耕論の話をした。これが藤森の縄文農耕論の始まりである。この頃強力な研究者として藤森を支えた武藤雄六との出会いがあった。まるで藤森自身のドラマを書いているようで面白い。ドラマは続き、富士見町鳥帽子唐渡宮出土の曽利三式土器の腹部に黒い顔料でお産の光景を描いた絵が発見された。胎児や幼児を甕に入れて家の入り口に埋める「埋甕」の風習との関係を考える貴重な

発見であった。ドラマは消えない。藤内一六号出土の土偶の頭にはトグロを巻いたヘビが現されている。何とも不思議なヘビ女である。そして最後は縄文中期の豪華な土器の数々を考古学的に解説している。

この『縄文の世界』は分かりやすく解説して地域考古学を描いたものであるが、課題ごとに集中して見事な構成で読者を熱中させた。藤森が縄文農耕論に挑み学会で対決した後の安らぎのようなものを感ずる本である。ひと仕事後の一服というところだろうか。

一九七〇年には『縄文農耕』[六七]を出版している。この本はこれまで発表してきた論文に若干手を加えて編集した藤森の研究成果である。最初は縄文土器に関する論文で、中期の特徴についての特集である。中部山岳地帯における縄文早期からはじまり、豪華な中期土器、その終末までを概観している。

中期土器の中で特徴ある土器形式を、貯蔵（有孔鍔付土器）、灯火（釣手式土器）、蒸器（顔面把手付土器）などの用途、それに付随する生活様式、構造などから植物食用化の問題にむすびつけ、農耕の問題を究明しようとする。

次に特種遺構、遺物からみた祭祀と呪術の問題をあげている。与助尾根遺跡七号住居跡北壁の石壇と石柱、曽利遺跡六号住居跡の立石など屋内祭祀跡から石棒祭祀の問題に触れ、これらの祭祀が屋外から、屋内祭祀に移行する例をあげ、石柱、石棒祭祀は地母神信仰を当てるのが的を得ていると解釈している。

土偶もまた尖石、九兵衛尾根遺跡などから出土した妊娠形誇張、壺を抱く土偶、富士見町唐渡宮出土の埋甕に描かれた出産の情景画を農耕儀礼と説明する。また埋甕については精霊がよみがえるために幼児、胎盤を入れ、家の入り口に安置し、ここから生命が甦ると述べている。

石器については石匙の粗大化に注目し、用途を石庖丁のように収穫具とみてはどうかと問題をなげている。また井戸尻遺跡群の各遺跡から出土した石器を分類し、例えば打製石斧を堀具に、凹石を割り具に分類するなど詳しく説明している。

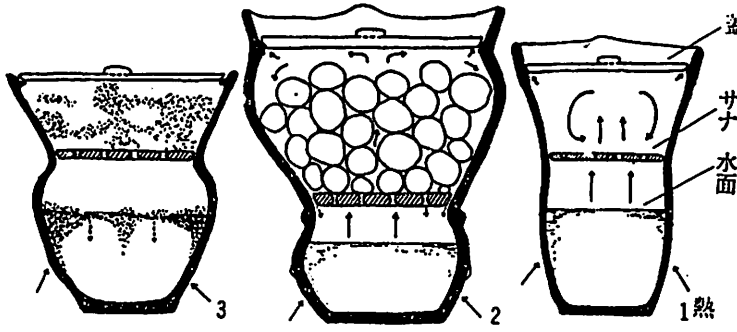
最後に土器、石器、祭祀などこれまで上げた資料を基礎に入念に縄文中期農耕論の総括をおこなっているが、内容はこれまでの論文にも度々ふれているので省略する。

「縄文中期植物栽培の起源」の項の冒頭に、植物栽培の肯定資料を列記し「近い将来における新しい発見に期待したい」と述べている。この一言を重視したい。

藤森は一貫して問題を提起しているが、私は結論を述べているのではないと理解している。藤森の生前に何度か話しあったことがあるが、藤森の口から断定的なことを聞いた覚えは一度もなかった。

さてここにあげている一から一七の項目のすべてが問題提起である。その一、の栗帯文化論[六八]について、井沢公平は「中部高地一帯に栗の繁茂帯があり、これが縄文中期文化と分布圏を一にしている」としている。この井沢の考えを藤森はおおいに評価している。ところが藤森の縄文農耕論は「栗帯栽培文化論」となってしまっている。確かに伊沢の「栗帯文化論」は魅力的であり、この項目には藤内遺跡六号竪穴出土の多量のクリ出土を注目しているが、クルミ、クヌギなどの落葉樹林の堅果類などを含めての意味があるものと思う。六の凹石についての発火具説についても、武藤雄六の実験経過を重視して堅果類の割り具としてまとめており藤森は柔軟な考察力を持っている。

興味深いことは一一の蒸器の完成の項目である。縄文土器の中でキャリパー



第14図　蒸器（武藤雄六原図）
藤森栄一『縄文農耕』（1974）より転写

形の深鉢は前期後半の諸磯B式に出現し、中期に発達する土器形式である。この土器の胴部の縊部にサナを置き、上に澱粉質の食品を入れて蓋をすれば蒸器になる。藤森はこの武藤の実験を取り入れている。このキャリパー形の土器の機能については後に渡辺誠も「アク抜き技術に伴う諸要素」[六九]の中で評価している。

この本は藤森の縄文中期農耕論の総括として必読の書であり、中期農耕の可能性を追及した好著である。藤森が待望して止まなかった「真の肯定資料（栽培植物）を近い将来における新しい発見に期待したい」の一文が身に染みる本である。

縄文農耕論の存在を信じて

一九七三年九月、雑誌『ドルメン』が『どるめん』にかわった。その創刊号に「縄文列島」を特集した。巻頭に八幡一郎の「ドルメンからどるめん」えと題する文章が過去四〇年の思い出を綴って掲載されている。そして藤森はこの創刊号の最初を飾る論文を書いている。「縄文人のお産－縄文農耕の存在を信じて－」[七〇]という題名であるが、読むと随想のような学術論文で藤森独特の文才豊かに土偶や、土器に描かれた「死と再生」の儀式を纏め、みごとな文章となっている。

藤森は軽い脳出血で産婦人科に緊急に入院した。「お産のためではない」と最初に書いているが、確かに緊急な事態であったことは間違いない。そこで垣間見た生命の息吹を藤森は、何故かおさんに詳しい文章を書き出した。ここでも「産室を覗いたわけではない」と書いているがなかなか詳しい。

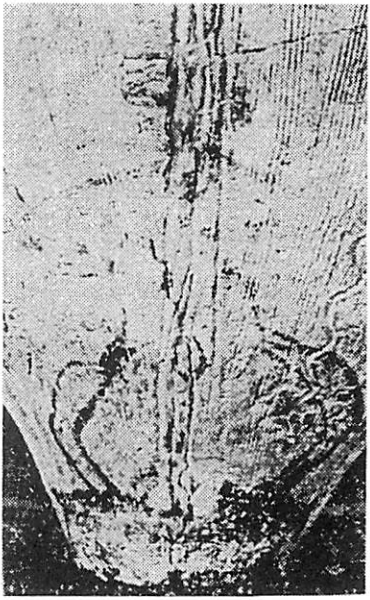
次に土偶が女性を現し、そのなかで長野県県町長瀬発見の土偶ほどぬるっとした女体と、セクシーな表現はない。よくみると三本指で乳房を押さえている。三本指は女体の懐妊、性交渉を意味しているのではないか、と書いている。生命の誕生は、高山、巨木、大河の精霊によって孕むもので、性交渉はそれを安定させるためにおこなわれる。輝石安山

石で作った太い石棒が下諏訪町駒方の縄文中期初頭、環状集落の中央広場に立てられていた。その石棒は中期中葉になると特定家屋の中に持ち込まれる。この石棒は精霊の受胎に関係する儀式のために安置された可能性があると述べる。

一九七三年三月長野県岡谷市三沢広畑遺跡の八号住居跡から出産の土偶がみつかった。この土偶は中腰で屈んでいる。両脇下で手を固定し、脇下に円形の透かしができている。これは屋内に横棒を固定させて妊婦が両脇下に抱え込み踏ん張っておこなう立位または座位の出産情景を現したものとしている。

岡谷市広畑遺跡の縄文中期（江戸尻期）の土偶の立位（座位）出産については、一九七二年富士見町唐渡宮遺跡発見の大甕にタール状の顔料で描かれた写実的出産画と共通しいる。唐渡宮遺跡の甕形土器は加曽利E二式（曽利二式）に相当し広畑出土の土偶にやや後出であるが、両脇下に固定された棒にしがみついた立位、又は座位の分娩状態をあらわしている。唐渡宮遺跡の立位分娩の絵は中腰で足を開き、股間から丸い物体が二つ紐のようなもので結ばれて落下する状態を描写している。この二つの物体を藤森は産児と胎盤だとしている。この分娩の状態が広畑出土の土偶と極めて似ており、縄文時代の出産状態をあらわす貴重な資料として取り上げている。

唐渡宮遺跡の大型埋甕に描かれた絵の解釈について渡辺誠は違った解釈[七]をしている。渡辺は女性性器が誇張され、ここから地面に向かって四条の線が垂れている。これは死んだ子供の魂が大地から陽炎のごとく母親となるべき女性の胎



第15図　分娩画土器
藤森栄一「縄文人のお祝」
『どるめん』創刊号（1973）より

内に入る様子をあらわしている。女性の妊娠の特徴が表現されていないことから子供の魂の「再入」と考えるべきだとしている。

広畑出土の土偶と、唐渡宮遺跡の土器画は縄文中期に普遍する竪穴住居跡の入り口に甕を埋め、胎盤を納めて踏ませる「埋甕」の風習を連想させる貴重なものである。藤森は「踏めば踏むほどつぎの精霊を宿し、新霊は甦る」として当時の情景を描写する。

渡辺誠は藤森の考えと基本的に同じ意見で、跨いて出入りする女性に生命が宿るとしている。渡辺の「縄文時代における埋甕風習」[注二]については、具体的例をあげて埋甕の風習と目的について考察し、なお一連の呪術体系との関係においてどのように等質化されるか、問題も投げている。

縄文中期の土器に蛇体の表現があることが分かったのは、中部山岳地帯から南関東の地帯に限られるといわれてきた。この蛇体をあらわした土器について藤森はマムシを大地の精霊として生命を再生させると述べている。マムシは四月ごろ冬眠からさめて甦る。マムシに噛まれると、子供が酒を初めて飲んだときのように喧噪におちいってはしゃぎまわる。うわごとを言い、やがて痙攣し、そして死ぬ。それは飲酒泥酔によくにている。「マムシに噛まれた死は仮の死で必ず甦って永遠の生にかえる」と書いている。

長野県富士見町藤内遺跡出土の有孔鍔付土器の表面に三本指の人が踊る姿を表現しているのがある。それは壺の中の酒を飲んで陶酔した人にみえる。その土器の裏面には、朱塗りの太陽の周りをめぐって蛇が描かれている。マムシは大地の精霊で、あらゆる生物、植物を殺しては甦えらせる。秋に地中に消えてしまったマムシが春に甦ってくるように、人も永遠に死と再生を繰り返す。土器に絡み付いてあらわされたマムシは子を生む女神（マムシ）で、大地の精霊である。このことは農耕生活の習俗を考えないと理解のつかない問題である。としめている。

藤森がマムシに噛まれ、甕（有孔鍔付土器）の中の酒をのんだように陶酔したような人、そのものをあらわした林王

第16図　有孔鍔付土器の人物

神奈川県厚木市林王子遺跡出土有孔鍔付土器（人体装飾・上）
江藤昭編『勝坂遺跡』（1988）より転写

子遺跡出土の有孔鍔付土器を調査者の江藤昭[注]に確かめたことが書かれている。有孔鍔付土器の出土地厚木市林王子遺跡の調査は一九七三年である。

江藤昭は、縄文中期農耕論を最初に提案した大山柏の後継者的活動をした研究者で、勝坂遺跡の研究に没頭した。その功績は高く評価されてよい。江藤の『勝坂式土器資料図』は勝坂式土器研究には欠かせない貴重なものである。

さて藤森の「縄文人のお産－縄文農耕の存在を信じて－」は呪文のような論文であった。この項の初めに、藤森は軽い脳出血で闘病に入っていた。この論文は闘病の中で書いたものと思われる。「どるめん」創刊号の出版は一九七三年九月であるから藤森はこの論文にかけるものがあったと思う。そういう意味で『どるめん』創刊号は藤森の縄文中期農耕論執念の論文になった。

藤森の死後、藤森が主張し続けてきた栽培植物が各地で報道されるようになった。それらの吟味については容易ではなかろうが、藤森が願望し続けた真の肯定資料「近い将来における新しい発見に期待したい」が確実になることを祈りたい。

一九四〇年頃から出土遺物、特に植物などの分析が盛んにおこなわれるようになり、その成果が考古学に応用されるようになった、藤森の縄文中期農耕論の存否も学際的研究によって長い議論の末に真価が出るものと思われる。

(五)　縄文土器にみる祭祀

蛇身土器

藤森の縄文農耕論は縄文中期を中心とする文化論である。栽培植物の存否を越え生活環境のすべてにおよんでいる。一つ一つ挙げれば切りがないほど広範な文化論である。最後にあげた「縄文人のお産－縄文農耕の存在を信じて」も精霊による死と再生についての祭祀を述べたもので、縄文人が神秘を信頼する「祭祀」についての論説である。

藤森が描く縄文時代の神秘の中で考古学の立場で重視したいことは、中部山岳地帯から南関東地方に分布する縄文中期の土器群である。広義の勝坂式土器からはじまり、有孔鍔付土器、釣手土器、人面装飾土器などの解釈をめぐって藤森はみごとに整理分類している。私はその中でまづ蛇身把手土器に注目したい。

蛇体は単独で現されるものと、人面とともに表現されるものとがある。縄文中期土器の各器種に蛇体をあらわすのは長野県から関東南部にわたる台地一帯である。その時期は勝坂期を中心とする土器の文様としてである。加曽利E式前半（長野県では曽利式前半）、中期後半になると蛇体の表現に退化がはじまる。

武藤雄六は一九六三年に富士見町党内遺跡で発見された二個の土器と一個の土偶を掘り出したことを考古学雑誌[七四]で述べている。土偶については論文の口絵として扱われているのでその特徴はよく理解できた。鳥が羽を開いたような眉、猫目のように引きつった形の目が印象的である。その左目から頬にかけて二本の沈線が描かれている。この沈線が不気味な感じをあたえている。

蛇身は後頭部にドクロを巻いて現されており、中央に口を開き、頭を持ち上げて構えている。頭の形から見てマムシである。武藤はこのマムシを含めて同時に出土した三本指の奇怪な装飾文の土器を自然の驚異、四季の変化、日常生活を無視して制作し文様を描いたものとは考えられないと書いている。

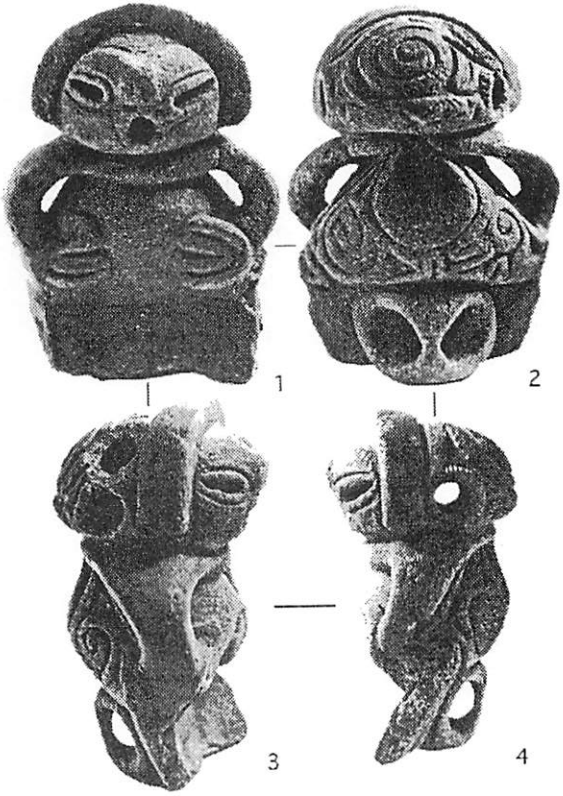
藤内出土縄文中期（勝坂期・藤内式）のこの土偶がヘビと同体の「ヘビ女」であるとしたら、縄文時代の女はヘビの精霊をそなえていることになる。それは大地の精霊で「死」と「生」の循環（冬眠・むけかわって、春によみがえる）を意味する。女体は人とヘビの合体の神であったとすると、土偶は畏怖（恐れ）と畏敬（喜び）の神であるととれる。武藤の自然の驚異、四季の変化を無視できないという表現はこのようなヘビ女を差したものではなかったろうか。

蛇体土器について野口義麿は「縄文文化の蛇身装飾[七五]」という興味ある論文を書いている。それによるとある一つの動物をモデルにして土器装飾に用いるのは前期の諸磯式B類土器になってからである。この時期は平面的文様から立体的

（隆起文）文様に発展する時期で、長野県では茅野市南大塩出土の蛇体装飾からはじまり、藤内、井戸尻期に盛行し様々な土製品に蛇体文があらわされている。縄文中期勝坂式土器は欄熟した土器文様と相俟って蛇体文様の最盛期であるとしている。

分布については、八ヶ岳山麓地帯から、山梨、東京都多摩丘陵地帯の遺跡から多く発見される。縄文中期完形土器が出土すると必ずといってよいほど蛇体土器である。福島県吾妻町庭坂遺跡出土の土偶背面には図案化された蛇体が見られ、これを北限とするとしている。東北地方の中期土器は大木式、円筒上層式が主体とされるが、希に勝坂式土器を単純に出土する竪穴がある。蛇身土器は勝坂式特有の土器とみることができるのでうなづける。

蛇体文様は何故文様の対象となったか、それが問題である。これには幾つかの意見がある。まず野口は「信仰的なものへの関連性がつよく、『蛇』に対するトーテム信仰が勝坂期を頂点として盛んにおこなわれた」として、トーテム信



第17図　東京都町田市小野路藤塚遺跡　人面・蛇体装飾土器
江藤昭編『勝坂遺跡』（1988）より転写

仰説をとる。

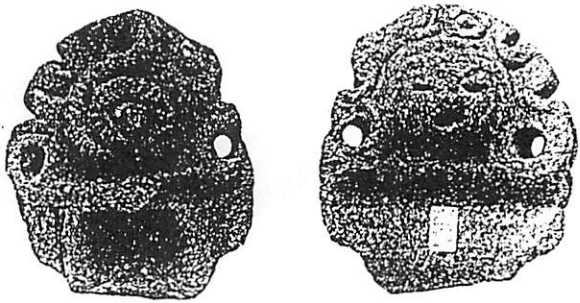
藤森は春と共に甦る新しい精霊の願望を冬眠からさめるマムシに見出だそうとする。植物の再生、植物の芽生えは「原始農耕の可能性」と結びつくとして農耕祭祀説をとる。

春成秀爾[十六]は蛇は冬の間冬眠し、脱皮もする。そして毒を以てこたえる。どうみても土の精霊としか考えられない。また頭にマムシをのせた長野県藤内遺跡や山梨県坂井出土の土偶は、土の精霊がのりうつった「蛇女」ではないかと考えられるとして、精霊説である。

江藤昭は広く南関東地方から出土する蛇体土器、土偶を整理して『勝坂式土器資料図[十七]』を発行した。夥しい蛇体土器、土偶の整理は資料的価値が高く、最後に膨大な図版、挿図を照合できる一覧表をのせている。それだけに江藤の考えは興味を注がれる。一九七三年厚木市林王子遺跡三号住居跡から出土した有孔鍔付土器にあらわされた人面土器は一まわり小さな住居跡の石囲炉の横からみつかった。マムシのあらわしかたは人体像のまわりを守護するように左右に配置されている。これを女神護符と考える。

さて、土器も女神もマムシの精霊によって生産を繰り返すことができる。マムシに対する意見は一致しているとみてよい。その中で「女は土の精霊がのりうつった蛇女ではないか」という春成の意見は興味がある。

東京都町田市小野路藤塚遺跡で一九八四年の調査でみつかった顔面取手の頭部にとぐろを巻いた蛇体をのせている。先の藤内遺跡や坂井遺跡出土の土偶と同じで蛇女である。口縁部に接して顔がやや前に傾いていることから、土器はキャ



第18図　東京都南多摩郡川口村楢原出土人面・蛇面土器
『東京府史蹟保存物調査報告書』第10冊より転写（1932）

リパー式の甕とみて間違いなかろう。キャリパー式の甕とすれば胴部にサナを置き、その上に澱粉質の食品をいれて蓋をすれば蒸器となる。これも食品を生む用具の一つであり、その機能は女神そのものと考えられまいか。要するに蛇の妖精によって酒が醸され、食物を生むことができると考えればよい。人面の頭部に蛇体をのせた蛇体土器で古くから注目されたものに東京府（都）南多摩郡川口村大字楢原出土の人面把手付土器[七八]がある。

第19図　長野県藤内遺跡出土土偶
考古学雑誌49巻第3号　武藤雄六論文より転写

顔面把手付土器（人面装飾付土器）

縄文前期以降、主に東日本を中心として人の面を装飾する鉢形土器が出現し、名称に顔面把手付土器（人面装飾付土器）がある。この項では藤森栄一の足跡を追うことが主であるので前者をとり、渡辺誠の引用については人面把手付土器の名称を用いる。

さて長野県富士見町藤内遺跡出土の頭にマムシをのせた土偶を春成秀爾は「女は土の精霊がのりうつった蛇女ではないか」と表現したのは面白い。これを証明するのが顔面把手付土器であると思う。東京都町田市小野路藤塚遺跡出土の

頭にとぐろを巻いたマムシをのせた人面（女神）をあらわした顔面把手付土器はまさに藤内遺跡出土の土偶と同じである。この土器は器形が判明しないが顔面把手付土器の多くがキャリパー形の鉢形であることから煮沸器と判断できる。顔面把手付土器については江坂輝弥「顔面付土器・獣面把手・顔面把手」の論文[八九]に続いて一九七二、三年には中村日出男の論文『郵政考古』第一・第二がある。最近では吉本洋子、渡辺誠の「人面・土偶装飾付土器基礎的研究[八〇]」その他がある。

さて藤森栄一は「顔面把手付土器―縄文農耕肯定論の資料として[八一]」と題する論文を書いている。顔面把手という用語の起こりからはじまり、一九二二年に「鳥居龍蔵が日本石器時代民衆の女神信仰」を発表されたことなど、顔面把手付土器についての研究史を纏めている。顔面把手付土器にはキャリパー形土器、有孔鍔付土器、釣手土器など比較的広い範囲の土器にもちいられるマジカルな文様である。ここでは、中期中葉、井戸尻期、曽利前半のキャリパー形の鉢形に注目する。前述のごとくキャリパー形土器は口唇が平らたく、頸部でくびれ、底部が屈折形の平底になった鉢形で、頸部のくびれ部にサナを置けば武藤雄六の指示どうり蒸器となる。

顔面把手はキャリパー形の鉢形の胴部から平たい口縁に取り付けられ、口唇から特殊な顔面を取り付けている。その欄塾期の顔は丸く、眉は新月を並べて弧をえがき、柿の種形の釣り目、鼻は縦孔であらわされ、口はポカンと開いている。この表情は藤森の言う驚きの顔である。頭頂には日輪、それを囲む髪形は蛇体または蛇体のデフォルメされた装飾文であらわされるのが目立つ。岡谷市小尾口海戸第三号竪穴出土の顔面把手付土器、また一九三一年相模市大正坂遺跡で工事中にみつかった顔面把手付土器はそのよい例である。

顔面把手付土器は人、蛇体とともにあらわされたものが多い。最近中部山岳地帯から南関東各地の勝坂三式（藤内期、井戸尻期）、加曽利一、二式（曽利前半期）の鉢形土器にあらわされた顔面把手付土器は中部山岳地帯の縄文中期文化論として問題を投げることになった。この顔面把手付土器についての研究は多いが、前述の吉本洋子、渡辺誠の「人面・

土偶装飾付土器の基礎的研究」また渡辺の「底を抜かれた人面装飾付土器」[八二]の論文はその核心を突いたもので評価される。

渡辺は土器口縁部装飾モチーフを整理して次のように分類する。

a　男性土偶（マムシ）＋女性土偶　b　マムシ＋女性人面

c　マムシ＋イノシシ　d　イノヘビ（頭はイノシシ、身はマムシ）

としイノシシは山の神に共通する多産性を重視されたものと考えるとしている。

さて渡辺はこの分類から深鉢形の人面装飾付土器にかぎるとして考察を進めて、人面装飾付土器をつぎの四類に分類している。

一類　人面が肩および胴部にある。

二類　人面が口縁部直下にある。

三類　人面が口縁より上にある

四類　人面が口縁の上にあり粗大、立体化する。

二類は縄文前期、一、三は中期初頭、四類は中期前半に発達する。中期後半はそれらの退化期であると分類し、一―三は東日本に、四は西関東から長野県にかけて範囲を限定して典型的に分布するとし、分布図を示している。

ここで範囲を限定して西関東から長野県にかけて分布する人面装飾付土器のうちきわめて特徴あるものについてついて検討を加えてみたい。それらは主に廃棄された住居跡で発見されたもので、底を抜き取られて放棄されるか、破砕放置されたもので、これらを渡辺はつぎのように述べている。

「ケガレによる聖性の喪失を恐れて底部を損壊して埋設した縄文人の意思を、きわめて明確に認めることができる」

まさに明快な解釈である。この解釈は富士見町唐渡宮遺跡で発掘された甕の下腹部に描かれた分娩または「再入」の

土器画と一致して興味深い。これは広く縄文時代各期に死者を住居に放置する廃屋説の解釈に共通するものではないかと考えてみた。また底部破壊の埋甕の風習は九州地方の縄文後期以降晩期の小児埋葬の甕も底部を故意に損壊している。

次に土器文様のモチーフについて考えてみることにする。長野県伊那市月見松遺跡出土の鉢形土器[八二]は竪穴式住居（第二八号）の石炉の北西部、壁際より出土し、底部が破損して出土した。土器の復原形は高さ五九・二センチ、縄文中期中葉、井戸尻期（勝坂式）である。女性顔面は把手上部、土器の内側にあらわされている。顔は円形の輪郭、左右の新月形眉を縦溝の鼻上で合わせ、柿種形の釣り目、口を開いて稚拙、斬新な彫刻法によって見事な女神に仕上げている。反対側の把手の下には隆帯文で女性の陰部をあらわし、中に大陽形の円形文をあらわしている。この円形文の表現について、渡辺は「出産前の子供をあらわしている」と述べている。また春成は「洋膜を破って出てくる直前の状態」と述べ表現は違うが両者共に出産モチーフを表現しいることでは一致している。ここで注目したいのは土器そのものが、ふくよかで女体をあらわしていることである。

第20図　人面装飾付土器
伊那市教育委員会提供（1999）月見松遺跡出土

月見松遺跡出土の顔面把手付土器に続いて山梨県北巨摩郡須玉町津金御所前遺跡出土の鉢形土器[八四]（完頭写真）がある。廃絶した住居跡（第五号）の床面に掘られた地床炉直上に圧倒破潰されて出土し、破砕状態と観察されている。復元された土器は高さ五七・五センチで月見松遺跡出土の顔面把手付土器よりやや小振りで、胴張も少ない。女神の顔面は内向きにあらわされ腹部には円形輪郭の顔が刻目のある隆線で陰部の下端に表現されている。誕生の光景を描写したみごとな表現力である。この土器の特徴を強調して報告書では「出産土器」と呼ばれている。

藤森がマムシに噛まれて陶酔して踊っている三本指の人と表現した富士見町藤内遺跡出土の有孔鍔付土器装飾に「半人反蛙の精霊」とよび、ヘソの緒が付いていると図解を示した春成の解説は興味がある。同じような表現の厚木市林王子出土の有孔鍔付土器は三本指[八五]の両手を開いた装飾土器である。これは出産後全身を露出した歓喜の表現ではないかと思う。それが武藤雄六、渡辺誠が酒を醸す有孔鍔付土器の装飾であることに注目したい。

月見松遺跡の出産直前の状態、御所前遺跡の分娩初期の情景、藤内遺跡、林王子遺跡の誕生歓喜の描写など一連の土器は正しく精霊の誕生を表したあらわしたものではなかろうか。藤森の「縄文人のお産さん―縄文農耕の存在を信じて」の論文の表題は、出産と酒を醸す豊饒を意味し農耕の可能性があるものと考えたい。

さて吉本洋子、渡辺誠の人面装飾付土器に関する論文には、人面装飾土器に関する研究史について第一期（鳥居龍蔵、八幡一郎、後藤守一）、第二期（藤森栄一、江坂輝弥、中村日出男、上川名昭）第三期（古田敦彦、渡辺誠）に分類している。第一期の八幡の「土偶の職態と共に当時に於ける信仰や祭祀に関係があるもの」。第二期の藤森の「地から無限に生まれ育つ、新しい霊と体、これを地母神の信仰として縄文農耕論と関係を求める」。江坂は「祭儀のときに神に食物を供える煮沸具」と述べるなど、学史を踏まえ、古田は「母神の妊娠した姿を表し、煮炊きの用具であると同時に神聖な女神であった」として火に焼かれる女神と焼畑を結び付けて論じていると紹介している。このことから資料の比較研究、分類など総合的な立場で検討し全国的な出土分類表を掲載しており、充実した論文で細部はそれを参考とされ

たい。

さらに吉本、渡辺は一九九九年『日本考古学』八号に「人面・土偶装飾付き深鉢形土器の基本的研究（追補）[八六]を発表して、追加資料をふまえて地域と土器の時期的研究をおこなっている。また課題として、細部検討によって分類の再編成を上げている。この人面・土偶装飾付深鉢形土器は、主として縄文時代中期の生活史、（採集、藤森の農耕論）のなかで生活を取り巻く環境、生産等をふまえた宗教、精神構造の核心の問題として注目される。

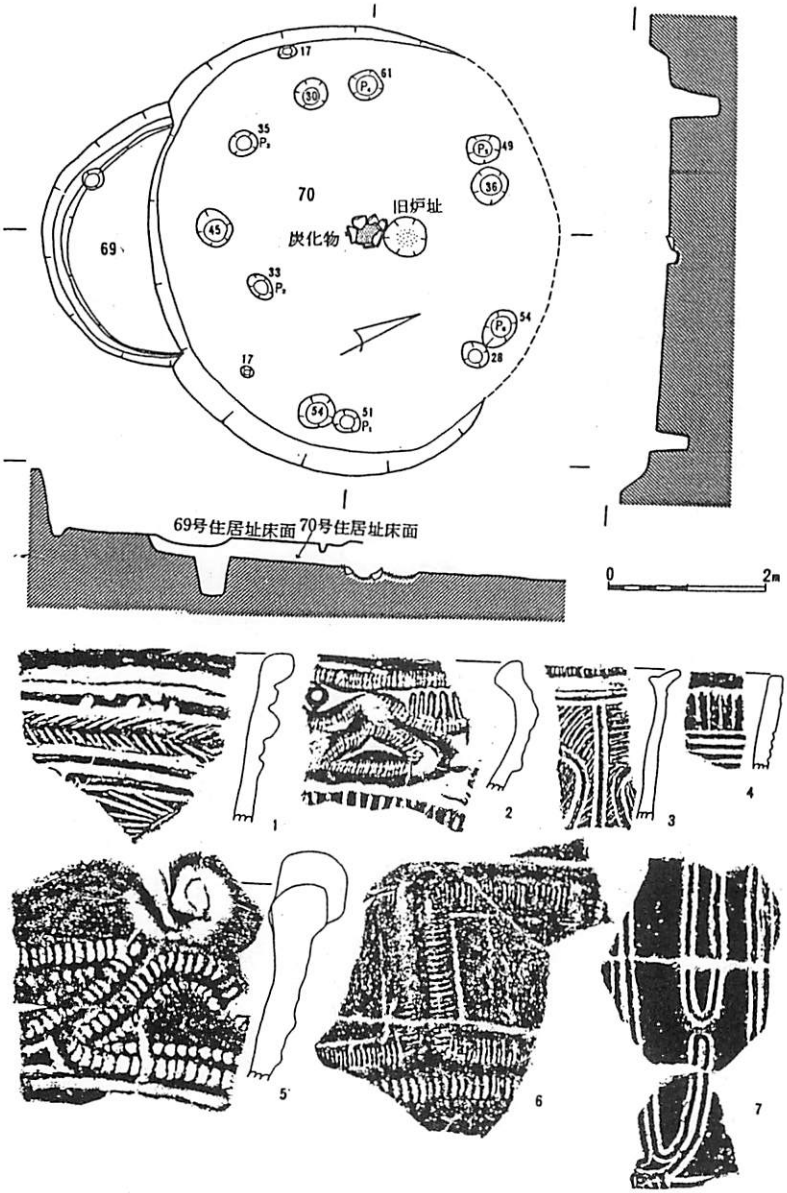
最後に渡辺は、一　装飾モチーフが性的対立と合一を顕著にあらわしているとして女神は深鉢の中で料理されつつある食物を自分達のために子の神として生もうとしている。二　いずれも人為的に底部を損壊している。三、土壙に埋設したり、住居を破棄して汚れを避け、神聖を保持しようとの意図がある。この三点から、神人共食（直会のような）のセレモニーが縄文中期頃に盛んに行われていたと述べる。そして結びに人面装飾付土器は「縄文人の死と再生観念の発達」[八七]によるものであると結んでいる。

ここで藤森の地母神と焼畑農耕説は古田の火に焼かれる女神と焼畑に継承されるが（その存否はともかく）先き送りになっている。いずれにしても藤森の縄文農耕論の実証は農学者、分析学者によって証明されることになる。

㈥　植物炭化物出土と分析をめぐって

荒神山遺跡出土の植物炭化物

藤森栄一の死と同じ一九七三年から諏訪市湖南字南大熊小字荒神山遺跡[八八]の第一次発掘が行われ、翌年には第二、三調査が行われた。この調査で第七〇号住居跡から植物炭化物がみつかった。七〇号竪穴住居跡は東西五・九五m、南北五・二mの不整形竪穴である。縦穴のほぼ中央に六個の石からなる直径五〇㎝の石炉があり、炉の南側から炭化物がみつかった。炭化物は直径五㎝、厚さ二㎝で重量約八gであった。炭化粒は直径一・五㎜で球状である。荒神山遺跡第七〇号住



第21図　荒神山遺跡70号住居址・上
出土縄文中期中葉（藤内式）
『長野県中央道路埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』より転写

居跡出土の土器は藤内一式で縄文中期中葉に編年される。主な石器として打製石斧五点が出土されている。

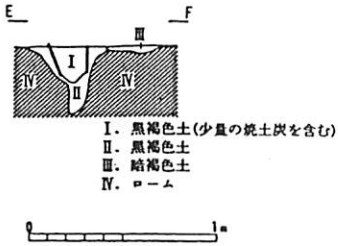
荒神山遺跡七〇号住居跡から出土した植物炭化物は長野県中央道路遺跡調査会を通じて松本豪に鑑定を依頼されたの[八九]は一九七五年二月であった。松本は慎重に観測し、まず楕円形の穎果を分離することができた。穎果には縦溝その他の特徴は認められず、胚の位置、形態は不明である。そして良好な粒子の形状一一粒の形質をあげている。一一粒の平均は長さ一・九〇㎜、幅一・五七㎜、厚さ一・二一㎜、形状基準（長さ÷幅）一・二一㎝、大きさ基準（長さ×幅）二・九八㎜としている。

塊の表面の小穀粒のなかに子実の存在がみとめられるものがあったので穎果であろう。その大きさは二・〇×一・七㎜、形は卵形である。このように穎果を結ぶものは禾本科植物にある。それらはチカラシバ属、キビ属、ヒエ属、レモングラス属などがあげられる。大きさと形からみるとヒエ属とエノコログサ属がもっとも近いとしながら佐藤敏也の意見を求める慎重な鑑定となっている。

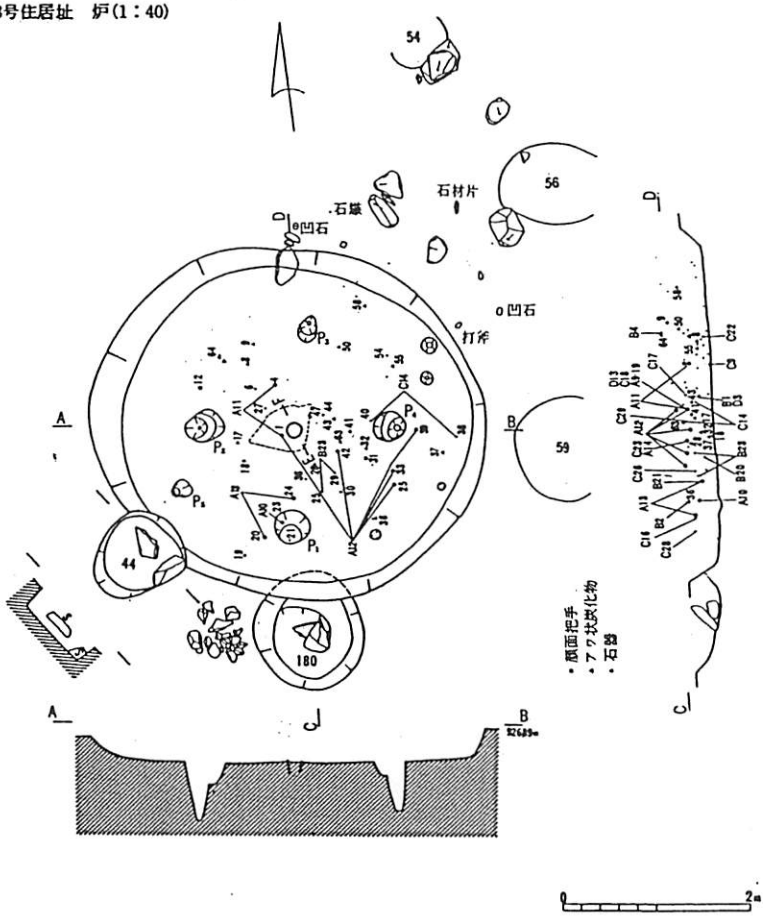
つぎにエノコログサ属のなかのアワは果穂を集め、乾燥し、脱落した穎果を集めて蓄える。炭化した塊の表面に見られる卵形の小穀粒はアワの穎果によく似ているがアワとエノコログサとの区別は難しくできない。松本は慎重に鑑定結果をふまえて炭化物について断定を避けている。

大石遺跡出土の植物炭化物

荒神山の発掘に続いて一九七五年長野県諏訪郡原村大石遺跡[九〇]の発掘により複数の住居跡から、植物の炭化物が検出された。大石遺跡も荒神山遺跡同様に中部山岳地帯特有の縄文中期の大規模集落である。新旧複合の住居跡を入れるとその数は五八棟になる。集落の開始の時期は縄文前期神ノ木式がら黒浜式への移行期である。また集落の盛期は中期初頭の貉沢、新道期で、新道期の住居跡は二二棟におよぶ。このうち九兵衛尾根二式から新道期の中期前葉の住居跡に集中



4．第18号住居址　炉(1：40)



第22図　植物種子炭化塊出土の大石遺跡18号住居址（1976）より

して植物炭化物が検出された。

一八号住居跡は長径四・三〇m、短径三・七五mの楕円形竪穴住居跡で、その中央に顔面装飾土器が面を南向きに据えて土器炉とし埋められている。植物炭化物は住居の床上一八－二〇cmで、九兵衛尾根一式土器とともに出土している。植物炭化物は小塊状をなしていた。また同時に出土した石器は、打製石斧一四点で目立って多い。

一九号住居跡は何度か建替えがあり、最終の住居は新道期で大きさは長径五・三五、短径四・五〇m（？）で中央に石炉がある。植物炭化物は五ヶ所より出土し、タール状に付着するもの、粉状で焼かれた残片の一部に粒子が観察されるものがある。ここでも打製石斧一一が出土し目立って多い。

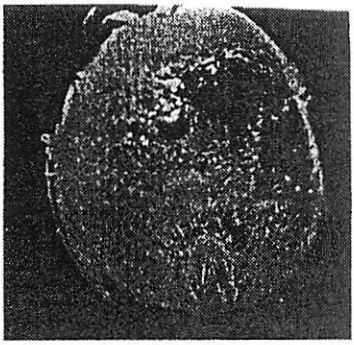
二四号住居跡は長径七・六八、短径六・五〇mと新道期の住居跡としては最大形で良好な状態で発掘された。中央よりやや北よりに方形の石炉があり植物炭化種子がみつかっている。一ヶ所では粒子の確認はできないが、澱粉のように粉砕された鱗片がみられた。もう一ヶ所では明らかに粒子がみえる状態で出土した。石器には打製石斧が一三点出土し目立って多い。

二五号住居跡は長径五・八五、短径五・二五mの竪穴住居で、中央北よりに六個の石を組み合わせた石炉がある。住居の床面に小指状の大きさでタール状に炭化して粒子が癒着した状態でみつかった。土器は新道期でこの住居跡でも打製石斧が二〇点が出土している。

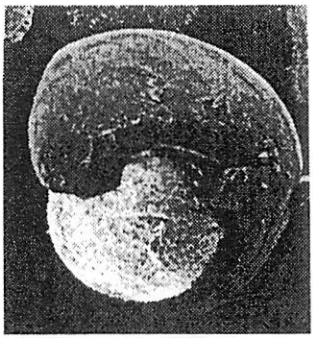
大石遺跡では植物炭化物が相次いでみつかり、炭化物の正体について興味が倍増された。一九七五年一八号、一九号住居跡から検出されたタール状の炭化物の鑑定を依頼されたのは松本豪[九一]である。松本は実体顕微鏡で検査、観察している。炭化物の内部は空洞で、表面の文様は不明だが、形は卵形、楕円形をしている。

穀粒は頴粒のものに包まれ、包みのなかに子実らしいものが認められた。しかし表面の文様、胚芽の位置、大きさなどは分からない。更に頴の包みを除く努力をしたが、わずかな力でも破壊され、一八号住居出土のもので八粒、一九号

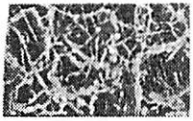
1



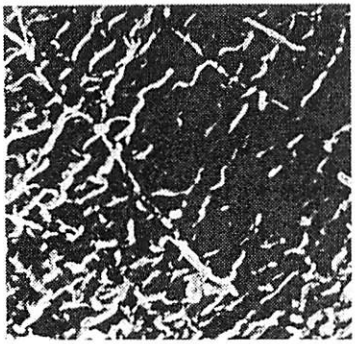
4



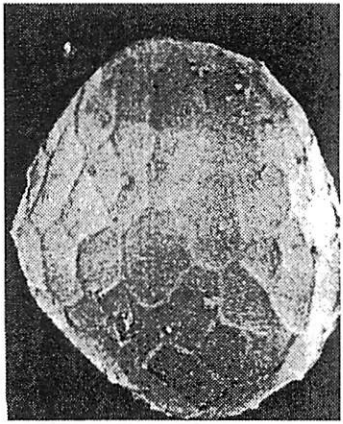
5



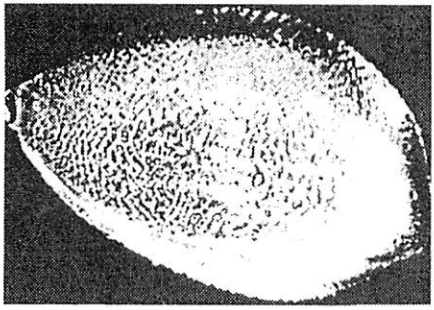
2



6



3



7

第23図　種子同定

『長野県中央道路埋蔵文化財包蔵地調査報告書』より転写

1　原生アワ穎を除去（×50）　2　1の拡大（×1000）　3　穎のついてアワ

4　原生シソの果皮、種子　5　シソの種子にみられるワラビ状細胞（×400）

6　エゴマ（赤）の分果　7　エゴマの種子にみられるワラビ状細胞（×400）

住居では三〇粒を分離できた。これらはすべて子実状のものが認められたので穎果であろう。

次に分離した穎果の近縁のものと思われるエノコログサ、イヌビエ、栽培のヒエ、アワと比較してみると、荒神山遺跡三〇号出土の植物炭化物エノコログサ属の穎果とよく似ていた。さらにエノコログサ穎果一〇〇粒、アワ一〇〇粒、その他を無作為に選び、ルーペ（一〇〇分の一まで読める）で観測し、同様に一八号、一九号住居跡出土の炭化物も測定してみると先の荒神山遺跡七〇号住居跡の炭化物と大差ないことが分かった。

これらの検査は測定数の少ないこと、胚芽の位置がはっきりしないことなどから断定は出来ないがタール状に塊まった炭化物は、アワ状のものが炭化する過程でできたものと思うと結んでいる。

次に大石遺跡出土の植物炭化物は一九七八年松谷暁子[九二]に鑑定を依頼している。このとき松谷は荒神山遺跡七〇号住居跡出土のタール状炭化物の追加資料もあづかっている。したがって松谷は大石、荒神山両遺跡出土の検査を行うことになった。

松谷の検査は灰像法の測定である。イネ科の植物には表皮細胞に珪酸が沈澱する。この珪酸は灰になっても残るのでアワが炭化しても粒を包む穎の部分か存在していれば、穎の表皮細胞に沈澱した珪酸の存在によってアワ特有の形態が灰像として認められる。松谷は灰像法によって荒神山遺跡出土のタール状炭化物にはイネ科の穎に特有の灰像は検出できなかったとして、笠原康夫、粉川昭平に試料を分割して鑑定を依頼した。

笠原は走査電子顕微鏡をつかって荒神山、大石遺跡、前尾遺跡、東京都なすな原遺跡（縄文後期）などの炭化物を検査したところ、皆同じようで、イネ科ではなく、双子葉植物の可能性があるとの結果になった。さらに荒神山の炭化物には、肥厚した幾本もの線条が走る特異な細胞（わらび状細胞）を検出した。また実体顕微鏡の観察では編み状の表面文様が認められ、そこからシソ科のものではないかとの予想がおこった。

わらび状細胞が現れたことでエゴマの果皮を想定し、その果皮を除去するとその下から小判状の文様が検出された。

大石遺跡の炭化物については電子顕微鏡の検査結果ではこれまでのところアワなどのイネ科に相当するものは見当たらず、エゴマなどシソ科に該当する構造が認められることになった。しかもこれらの植物の炭化実験ではシソとエゴマは同じようにタールの塊と化した。ここで荒神山、大石のタール状炭化物についてはシソとエゴマが残ると結んでいる。

松谷は次のように感想を追加している。大石遺跡の近くでエゴマの畑をみた。エゴマは油の原料であったほかに煎ってつぶし、ホウレン草などにあえて食べる。過去において広く用いられた食品が今では忘れられている。エゴマはかって飛騨地方では焼畑の作物であったことを思うと新たな問題が提起される。

さてここで松本と松谷の観察に違いがみられるが両者の熱心な研究によって一つの共通点を見逃すわけにはいいかない。アワ、エゴマを通しての焼畑作物としての提言である。ここで大石遺跡の炭化物出土の住居跡から目立つて多くの打製石斧が出土していることを考慮に入れるならば、藤森栄一の焼畑農耕論の着想はまさしく慧眼と言うべきである。

さてエゴマについて、松谷はその後も研究を続け、最近次のような報告（一九九五「遺跡からのエゴマの出土について」『考古学ジャーナル』三八九）をおこなっている。

長野県富士見町曽利遺跡五号住宅跡から出土の「井戸尻のパン」にシソ属の特徴をしめす構造が観察された。また長野県豊丘村伴野原遺跡三

第24図　ミズイモ（クワズイモ）
中尾佐助「半栽培という段階」向って左
江坂輝弥「縄文の栽培植物と利用植物」『どるめん』13号（1977）より転写

三号住宅跡から発見された「パン状の炭化物」からもエゴマやシソと考えられる粒が検出された。これらの食用化について調味料としての役割を考え、その主体食糧が、ドングリなどの野生澱粉質だったのか、渡来植物だったのかは見当を要するとしている。エゴマは日本に自生しない植物でマメなどの渡来植物との関係にも関心を寄せている。このように松谷の真摯な研究によって縄文時代の食糧としてのシソ、エゴマなどの植物が広く利用されていることが明らかになった。渡辺誠の「ドングリ」の自然食に続いてエゴマなどの活用が縄文時代の食用植物の幅はかなりの広がりを見せるようになったのは注目してよい。

半栽培という段階

荒神山、大石遺跡出土の植物炭化物の観察結果は、中部山岳地帯の縄文中期農耕論の根幹に迫る問題であり、なかなか根の深い研究である。それだけに熱心な研究成果が注目された。この炭化物がアワまたはエゴマであるにせよ、野生種でなければ焼畑を介して生産されたことになる。

栽培までの過程で人は生態系を攪乱し、その後、新しい環境に適応した植物のうち有用なものの保護から栽培がおこる。このような段階を中尾佐助は半栽培[九三]といっている。縄文中期農耕は中尾の半栽培の段階にあったとみられないであろうか。荒神山、大石遺跡の炭化物の検査では、一九六〇年三月曽利遺跡五号住居跡発見のコッペパン、捻餅の本体は模糊として解明されなかった。ここで中尾の「半栽培という段階について」[九四]（季刊『どるめん』一三号）の野生サトイモ研究は興味がある。

中尾によると野生のサトイモは東アジアの村落内の時に日陰になり、浅い水の場所に盛んに育成している。この野生のサトイモは雑草学からみると人里雑草ということになるという。野生サトイモは一〇㎝以上になるがエグ味が強く食糧にはなっていない。しかしこの野生イモは分布範囲から見ると意識的伝播を想定できる。そして半栽培によく適応し

た品種であるという。

中尾はこの野生サトイモは食用にできると考えている。「イモを焼いてから叩きつぶし、ボールにかためてから大形の葉で包み、土中に埋めてから数週間放置して醗酵させる。それを取り出してあらためて焼いてから食用にする」中尾は野生サトイモの食用化をこのように説明し根栽農耕文化の初期に半栽培の段階を設定できるとしている。

中尾は日本の野生サトイモの分布は北のほうで藤森栄一の紹介（『縄文の世界』―信州のイモ―）した長野県青木村沓掛温泉の湯尻で群生していることを知った。そして信州のミズイモを写真で見ると東南アジアの野生サトイモにあまりにもよく似ているのに驚嘆したと書いている。

中尾は、野生サトイモが仮説のように食用化ができるとしたら、多分「縄文中期根栽型半栽培」という段階の設定の根拠になるだろうと述べ、そのとき人為的に随伴伝播したものとしてカジノキ、ウルシなどが候補となり、同時にヒガンバナ、オニユリなども候補になるだろう、と結んでいる。

中尾の推論が許されるとすれば曽利遺跡出土の炭化コッペパンの材料の候補に沓掛温泉湯尻に自生するエグいミズイモのようなものが考えられまいか。藤森[九五]は通称弘法芋といわれるミズイモはかなりエグくて食べられないが、今でもズイキは食用になっている。そのために残存していると述べている。私はミズイモもトチやクヌギなどの食用化のための煮沸や水晒しなど、かなり面倒な方法ではあるが食用化ができないものだろうかと考える。

中尾が野生サトイモに随伴伝播したとみている植物について江坂輝弥[九六]はまずヒョウタンをあげている。ヒョウタンは一九四〇年発掘の埼玉県岩槻市眞福寺泥炭層はじめ、千葉県八日市場市多古田低湿地遺跡、福井県三方郡三方町鳥浜貝塚、福岡市西区四箇遺跡などからつぎつぎに出土している。とくに多古田遺跡からはヒョウタンを模した杓子が出土しているのは稀有な遺物である。ヒョウタンは西アフリカ、ニジェールの原産とされている植物である。

つぎにウルシは鉄丹と樹脂塗料を混ぜて土器面に漆彩したものが縄文前期の千葉県加茂遺跡、福井県鳥浜遺跡で出土

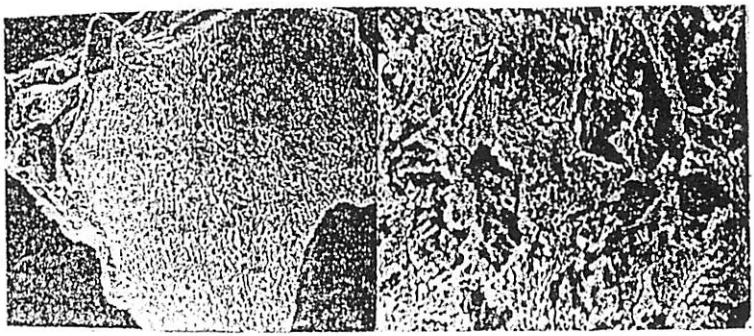
している。このほか外来から伝播したとみられる植物にアズマビシ、緑豆等の食品となる植物がある。これらは長江流域を経て縄文時代前期には伝播されたものと述べている。またカジは繊維布として東南アジア伝播として出土遺跡をもらさずあげている。

これら外来の植物について江坂の研究は数多く、しかも間違いなく文化層を確認しての見解であり、先の中尾の見解と一致するところが多い。とくに野生サトイモについてはかなりの興味を持って研究をすすめている。

江坂は一九六〇年曽根五号遺跡発見のコッペパン状炭化物はその後各地で発見が相次いでいることから縄文前期以来の食糧として一般化したことが明らかとなった。食品の材料については未だに未解決のままであるが、多くの植物の中から推論して、乾栗、ヤマイモ、サトイモ（野生サトイモ）などを有力視している。そのものなのか、その混合物であるのか、究明したい課題だと強い関心をしめしている。

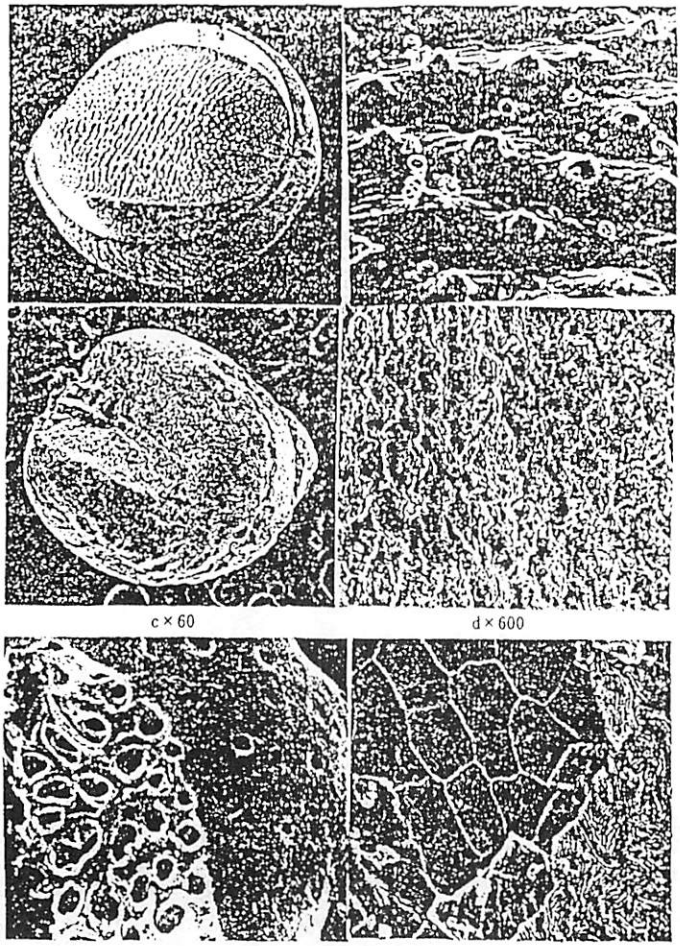
縄文農耕論の実証性

文部省科学研究費特定研究『古文化財』[九七]（代表 渡辺直経）総括班は縄文時代の栽培植物の発見が各地で報じられるようになったことから、その問題点を指摘し、考古学、自然科学の立場でその信頼性、疑問点を討



第25図　種子同定

長野県荒神山縄文中期遺跡から出土炭化片．a（左）．松谷暁子氏1975年３月上旬持参品）．同表面（シソ科植物の果皮の内表皮の多孔細胞と一部厚膜細胞層の穴に相当．『縄文農耕の実証性』シンポジューム（日本考古学協会・1982）より



第26図　種子同定

現生アワ穎果の内外穎の山脈型横しわ(a)，内穎の山脈上に乳頭突起が並ぶ(b)，
福山市草戸千軒町中世遺跡から出土の胚の欠けたアワ類(c)，同表面の消失途上の横しわと乳頭(d)，
現生白エゴマの果皮断面の厚膜細胞層の穴および内表皮の多孔細胞(e)，
現生シソの外表皮（流線紋細胞）を剥いで網状細胞層を見る(f).
『縄文農耕の実証性』シンポジューム（日本考古学協会・1982）より

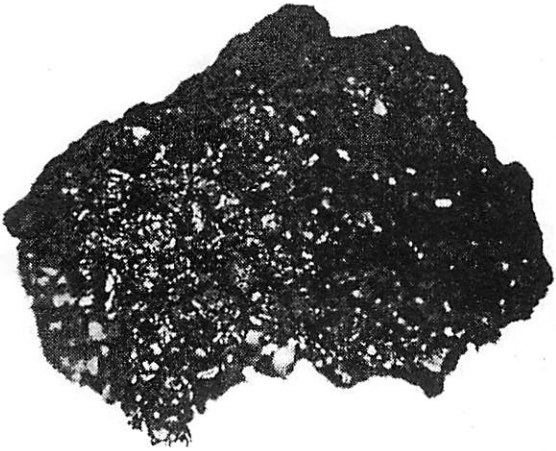
論するために、「縄文農耕論の実証性」の討論会を一九八二年三月東京で行った。

さて前述の如く、藤森栄一が亡くなった翌年、一九七四年、諏訪市荒神山遺跡から、つづいて原村大石遺跡からアワの種子が発見という情報が流れた。このこいについて武藤雄六は一九七九年、次のような表題「高原に甦る執念の灯ー藤森栄一先生の縄文農耕論[九八]」を書いている。この論文を読んだ藤森の門下生の感動は計り知れないものがあったろう。私も同じ感動を持って武藤の論文を読んだ。

「一九七三年夏といえば先生のなくなられたわずか半年後のことである。それもお膝元の諏訪市は荒神山遺跡のことであった。藤森栄一という人はよくよくつきのない人であったのかもしれない。それからと言うもの、原村の大石遺跡でもおなじ炭化種子が発見され、おなじ原村の上前屋敷遺跡では自分たちの手で掘り出すことができたのである。はたして、八ヶ岳西南麓に謎を解く鍵が埋もれていたのである。しかもそれはイモではなくて、れっきとした穀物であった」と書いている。

一九八二年の「縄文農耕論の討論会」は戸沢充則の「縄文農耕論の現状と問題点[九九]」という基調講演から始まり、中心の討論は、荒神山遺跡、大石遺跡の鑑定に当たった科学者の報告から始められた。

笠原安夫[一〇〇]は走電子顕微鏡によって荒神遺跡出土のタール状炭化物はエゴマ・シソと判定され、資料によってエゴマの多孔細胞、シソの小判形細胞に就いて説明があり、東京都なずな原出土の炭



第27図　荒神山遺跡70号住居址出土タール状炭化物
『長野県中央道路埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』より転写

化物と同じく、エゴマと確認できると述べている。

松谷暁子[一〇一]は荒神山の炭化種子を灰化して灰像法で顕微鏡でみるとアワらしいものはなく、さらにアワの穎の表皮細胞らしきものが見当たらない。アワの穎がなくなったと考えられないかとしても炭化物がタール状に塊まっていること、殻がきわめて厚いことなどがちがっていると述べている。

大石遺跡についても笠原、松谷は、他の実験経過を踏まえて、資料で実験の状態を説明し、最後にエゴマとシソは炭化すると油を出してタール状になったと述べ、荒神山、大石遺跡出土の植物炭化物はエゴマの可能性が強いと述べた。

つぎに藤下典之[一〇一]は一九七五年福井県鳥浜遺跡発見の九粒のマメについて報告を述べている。このマメについては鳥取県桂見遺跡のものを走査顕微鏡で観察し、インド産のリョクトウ、その人工栽培種子を顕微鏡で観察すると、リョクトウによく似ているとしながら、ツルマメ、ヤブツルアズキも考えにいれる必要があと慎重に述べる。

このほか各地から出土した炭化物について実験結果が報告されているが。考古学者が期待するほど簡単では無かった。ここで江坂輝弥は長野県曽利遺跡出土のパン状炭化物にふれ、ヤマイモをつぶし、木の実をつぶしてまぜた塩野半十郎の実験[一〇三]を紹介し、パン状炭化物のようなものができる。このイモ澱粉は藤森栄一の長野県小県郡青木村沓掛温泉の弘法芋（ミズイモ）の着目に注目してよいと述べている。江坂のミズイモについては前述の中尾佐助「縄文中期根栽型、半栽培」の設定の根拠になるだろうとの提言に一致している。

考古学の視点から渡辺誠[一〇四]は前述の藤森栄一の中期農耕論の論拠の整理をおこない、藤森の考えたどの分野でも食用植物ドングリ、各種の地下茎などの水アク抜きに深い関係がある。水晒、アク抜きをするばわい製粉ということが一番大きな要素になる。つぎに自然湧水、保存のための乾燥と貯蔵がある。藤森があげた石皿には製粉の問題が係わってくる。

また尖石遺跡をはじめ中部山岳地帯の中期集落構造の特徴として環状集落ををあげているがその中央の広場はドングリなどの貯蔵、乾燥、作業場と見るべきではないかとの見解を述べている。そして藤森は広葉樹林についての問題が重

要視される今日まで生存していたとすればこのような生産手段によってある程度安定が保たれるということに到達したであろう。そうであれば主旨は達せられたと思うと述べている。

また打製石斧についても見解をのべ、水晒しの必要な食用植物、根茎類などの採集用具として用いられたものと考え、栽培植物の問題検討には東から西えの伝播の中でまた在来文化要素も引算してから、大陸からの新要素を整理する必要があるとも述べている。渡辺のこのような自然食についての研究は、縄文中期農耕論、植物食用化の中核的な問題だと考える。

(七) 稲の炭化物出現

古閑原貝塚の発掘

中尾佐助は一九六六年に『栽培の起源と農耕の起源』[一〇五]を出版し、照葉樹林文化論を展開し大きな反響をよんだ。続いて一九六九年上山春平編『照葉樹林文化』、一九七六年『続・照葉樹林文化』が出版され、稲作にもふれている。この一連のシリーズの最後は上山春平、渡部忠世の『稲作文化』でしめられている。

この一連の稲作への道ともいえる大キャンペーンに先立ち、熊本県玉名郡高道村古閑原で縄文中期（阿高式系）の土器と共に貝塚から炭化稲籾が発見された。発掘は一九四八年に坂本経堯によって行われ、調査報告書は熊本県文化財調査報告書第六集「古閑原貝塚調査抄報」[一〇六]として一九五二年に出版されている。

九州山脈の中央、筑肥山脈と阿蘇火山の間に刻まれた複数の渓谷から発して西に向かい、菊池、山鹿盆地をへて玉名市の南で有明海に注ぐのが菊池川である。この下流付近は内陸部から伸びる低い台地が海岸近くまで延びている。菊池川は西側を並行して流れる境川とともに河口地帯に広い沖積部を形成する。この境川の西側の台地縁端部に古閑貝塚が庄司貝塚と並列している。

古閑原貝塚の層位は大きく四層からなる。表土は約三〇センチの水田耕作土で、下部は黒色有機質粘土層（黒色粘土、黒褐色粘土）となり更に貝層が約三〇センチ堆積している。貝層下は白色粘層につづく。貝層の上面、下面には湧き水があり、湿り気によって泥炭状態となっている。発掘は粘土層中の一メートル五〇センチにおよび、粘土層には遺物の包含の無いことを確かめている。

表土下部の黒褐色土層は弥生時代の文化層で、弥生式土器を包含し、一部に縄文式土器を混在する。この層からイネモミはじめウリの種、ヒシの実、モモの種などが検出されている。貝層は縄文中期阿高式土器の単純層でここからも泥炭化された貝層から炭化植物がみつかっている。貝層下部は湧き水があり白色粘土層上部まで湿り気が認められた。調査は貝層下二〇センチまでおこなわれ、貝層下部でイネ籾八粒をはじめウリの種、イチイカシ、シイの実などの炭化物が発見された。

さて貝層は上下に湧き水があり、貝層と貝層下の粘土層上部は湿り気が強く、植物炭化物残存条件は良好であった。このことが植物種子の確認につながったことになる。確認された植物の種子はすべて土壌の水洗方式で採集されたと報告され、層の遺物は細心の調査方法ですすめられたことがわかる。

古閑原遺跡の発掘は貝層上下の湧き水によって湿り気のある状態であり、予期しない植物炭化物が出土した。貝塚の時代については阿高式土器の出土から縄文中期後半期に相当することが明らかとなった。またイチイガシ、コジイなど常緑広葉樹の炭化種子の出土から当時の環境を知ることができた。そうした環境の中で、イノシシ、シカ、獣類が出土し、とくに頭骨後頭部から上顎骨に達する石槍の嵌入がみられたシカの出土は圧巻であった。

貝塚を構成する魚貝類については細かい記載はないが、石錘が多く出土していることから有明海における漁業活動が活発であったことが予測される。貝についてはアカガイ、ハマグリ、マテ、ニシなどがあげられている。

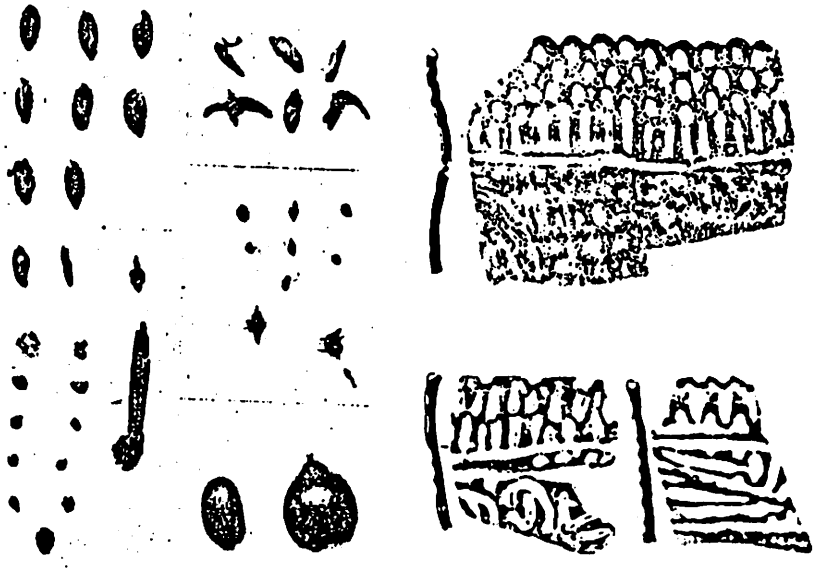
出土遺物の中で最も注目したいことは、炭化イネモミ八粒の検出である。貝層が湧き水によって泥炭状態にちかかっ

たこと、イチイガシなどの出土からみて温和な環境にあったことなどの好条件のもと、検出に当たっての調査者の慎重な対応など前述の通り疑う余地がない。しかしこれほど古く溯るイネの出土は例がなく、それだけに慎重な対応が必要である。

貝層から出土する縄文土器を坂本経尭は五類に分類し、その主体を三、四、五類の滑石粉を混入する凹線文を主文とする縄文中期阿高式土器を当てている。土器は比較的薄手に作られ、口唇部は平縁、波状に分けられ、やや上げ底の気味の平底で安定した甕、深鉢、皿形に分類できる。

土器の文様は太形の凹線文が主体で、大形列点文がある。凹線文は直線、並行、曲線を交えて多彩に構成される。太形文様の工具は指頭施文の説もあるが、中には二枚貝（シジミガイ・ハマグリなど）の殻頂を使用したものがある。胎土に滑石を混入しているのが特徴である。

阿高式土器のうち、甕、深鉢に煤が付着しているものが多く、それらは煮沸器と考え、滑石粉が多量に含み赤褐色の塗彩（酸化鉄による）のある良質の土器は貯蔵具



第28図　縄文中期古閑原貝塚より出土した籾と種子、及び阿高式土器
『熊本県文化財調査報告書』第六集（1952）より

とされている。

石器のうち注目したいのはシカの頭該骨に打ち込まれた石槍である。先端は折れて解体のさい失われたものとみている。石斧は粘板岩を使用し偏平半磨製で蛤刃に加工されている。打製石斧の出土はみられない。また偏平の自然礫の左右に打欠きをいれただけの石錘の出土が目立つ。その他サヌカイトを使用した小形石匙が一一点出土している。

炭化イネモミ

古閑原遺跡貝層下出土の八粒の炭化モミは坂本経堯によって高道のモミ（高道村から出土したモミ）と命名された。八粒のモミは炭化度に違いがあると書かれている。計測は当時の農林二七号と比較して坂本が行っている。

高道のモミ　長さ七・九㎜　幅三・九㎜　比率二〇・三

農林二七号　長さ八・五㎜　幅四・〇㎜　比率二一・三

とされているのでどちらも短粒型である。

つぎに、坂本は炭化モミが縄文中期の時代のものに間違いないとする証拠について次の諸点を上げて説明している。

一　炭化モミ出土の粘土層上部の貝層（縄文中期・阿高式土器包含）は厚さ一五センチ以上で貝類が堆積し、観察の結果下部の粘土層に達するまで攪乱による貝層の変化はみられない。

二、貝層から発見された土器や動物の遺骸は貝層の中にまとまり、貝層が安定していた状態を示していること。特にシカの後頭部から上顎に達して打ち込まれた石槍など、出土状態は貝層形成当時そのものとみてよい。

三、農耕具として打製石斧、収穫具としての石庖丁形石器の出土はなかった。これについては民族資料により、耕作具は木器、収穫具は貝殻を当てることにして無理がないと考える。

四、縄文後期には稲作栽培が行われていたとみてよい。熊本県菊池郡三万田東原遺跡[一〇八]は大規模集落が形成され、打製

石斧、石庖丁が出土している。更に石棒、土偶などの出土によって、栽培の裏付けが取れる。

坂本は右のような解説を加えて、縄文中期に稲作栽培の可能性を説明している。

イネの栽培は弥生時代に始まるという定説のなかで、九州では縄文時代後晩期開始の可能性があるとされていた。しかし実証性に欠ていたこともあって古閑原の稲モミが縄文中期の貝塚から出土したという情報は大きな反響となった。

当時中国では一九五五－五七年にわたり発掘が行われた湖北省京山県屈家嶺遺跡[一〇九]は発掘後「屈家嶺文化」が設定され、遺跡から炭化したコメがみつかった。その年代がC14測定で四二三五＋九五年B・Pと測定[一一〇]された。これによって龍山文化早期に対比るようになった。発見されたコメの測定を中国科学院農業研究所、丁頴によって測定され、短粒型のもっとも初期の古代米と判定されている。古閑原貝塚発見のモミは計測では屈家嶺遺跡発見のコメと同じく短粒型であり、時代もほぼ同じである。

日本えの稲作導入でもっとも重視している韓国では一九二〇年に調査された慶尚南道金海郡金海邑鳳凰[一一一]（金海貝塚）の無文土器末期から新羅土器の間とされる貝塚から炭化したコメが発見されて以来これまで空白の時代であった。

古閑原発掘当時は稲作開始の時期を縄文中期に求めることはきわめて厳しい環境にあった。しかし古閑原貝塚の発掘で出土した炭化モミは、坂本の説明によって縄文中期阿高式土器期に当てることができる。またイチイガシはじめ、多くの植物炭化物を検出して栽培を裏付けている。

炭化モミは東京大学前川文雄に調査を依頼したとあるが、その結果は公表されていないのが残念である。そのことを差し引きしたとしても、誠実な坂本経尭の考古学的所見は大いに顕彰されてしかるべきで、古閑原遺跡出土の炭化モミの発見は、栽培植物そのもので具体的証拠として注目される。

日本では弥生式文化の源流を探るために日本考古学協会[一一二]において弥生式文化調査委員会が発足し、その一貫として一九五一から福岡県板付遺跡の調査が開始された。この調査は稲作の起源を探る研究でもあり、杉原荘介、森貞治郎、岡

崎敬などの努力で炭化コメをふくむ弥生初期の全容が解明された。稲作の画期的展開は一九六九年以来の福岡市教育委員会による発掘で台地際に水田跡[一三]がみつかり、山崎純夫の調査によって縄文晩期稲作の実態が明らかとなった。

このことは「縄文晩期農耕論」の項目で述べることにする。

おわりに

「縄文中期農耕論」（昭和第二期）は太平洋戦争の最中に継続された宮坂英弐による長野県尖石遺跡の発掘を下敷きにしておこなわれたた藤森栄一の足跡を追った。この藤森の着想は当時の考古学に発想の転換を促したものとして注目された。栽培植物の探索は困難であるが、今後藤森の後継者によって解明されることを期待して止まない。

一九四八年といえば宮坂が尖石に続いて与助尾根遺跡の発掘を熱中していた頃である。この年に九州では縄文中期稲作栽培の問題が話題となった。坂本経堯の発掘によって熊本県古閑原貝塚から炭化モミが出土したことである。具体的な作物にもかかわらず、当時の周辺環境は必ずしも積極的ではなかった。

さて板付遺跡の発掘、唐津市汲田遺跡の発掘などが相次ぐ中で、農学者をはじめ理科学者による分析が農耕起源の研究を課題とし、中尾佐助による『栽培植物と農耕の起源』か出版されたのは一九六六年である。

中国では一九五四ー五七年に西安市郊外半坡遺跡[一三]が調査され、アワが大量に出土し仰韶文化における穀類栽培が明らかになった。朝鮮半島では一九五七年黄北道鳳山郡智塔里遺跡[一四]のコマ形土器包含層の先史時代遺跡から犂、鞍形磨臼などとヒエ、アワの穀類がみつかった。

このように、隣邦諸国の調査の進展により栽培植物の研究は飛躍的に高まった。このことは縄文農耕論に影響をあたえ縄文晩期農耕論につながることになった。この課題は次ぎの項において述べることにしたい。

注

一　茅野市教育委員会　一九五七　『尖石』（宮坂英弐）

二　宮坂英弐　一九五〇　「八ヶ岳西山麓与助尾根先集落の形勢について一考察」『考古学雑誌』三六巻三、四号

三　藤森英一　一九四八　「原始焼畑陸耕の諸問題」『夕刊信州』その他

四　熊本県教育委員会　一九五二　『熊本県文化財調査報告書』第六号（坂本経堯）熊本県教育委員会

五　中村孝三郎　一九六〇　『信濃川の古代文化　火焔土器』　越後縄文研究社

六　藤森栄一　一九六九　『縄文の世界－古代の人と山川』　講談社

七　厚手式・薄手式土器、昭和初期以前の縄文式土器の分類用語。「厚手式土器、陸平式土器」は縄文中期の土器、「薄手式土器、大森式土器」は縄文後期の土器である。提唱者は八木奘三郎、下村三四吉である。一九二〇　鳥居龍蔵『武蔵野の有史以前』武蔵野三巻三号で厚手土器を山岳地方の狩猟人の土器、薄手土器を海浜の漁撈人の土器とした。

一九五七　宮坂英弐は『尖石』の「尖石式土器の形式」（二五五頁）で鳥居龍蔵の「厚手式土器」山岳式土器をひいて南関東、甲信地方に分布する土器を分かりやすく説明している。

八　山内清男　一九三二－三四　「日本遠古の文化」『ドルメン』一巻一、二巻二

九　八幡一郎　一九二五　「日本石器時代文化」『日本民族』

一〇　江坂輝弥　一九五〇－五二　「縄文文化について（講座）」一－一三回　『歴史評論』二三－三五号

一九五五　『縄文式土器』　小学館（図説日本文化史体系一）

一一　藤森英一　一九六五　『井戸尻遺跡』　中央公論美術出版

『井戸尻』（共著）　中央公論美術出版

一二　藤森英一、武藤雄六　一九六四　「八ヶ岳南麓における縄文中期土器の編年」『日本考古学協会昭和三九年度大会・研究発表要旨』
一三　江坂輝弥　一九四九　「相模五領台貝塚調査報告」『考古学集刊』第三号
一四　八木奘三郎、下村三四吉　一八九四　「下総国香取郡阿玉台貝塚探求報告」『人類学雑誌』九巻九七号
一五　大山　柏　一九三六　『神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告』史前学研究会小報告
一六　八幡一郎　一九二四　「千葉県加曽利式貝塚の発掘」『人類学雑誌』三九巻四－六号
大山史前学研究所　一九三七　「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告書」『史前学雑誌』九巻一号
一七　春成秀爾（佐原真と共著）　一九九七　「原始絵画」『歴史発掘』五
一八　八幡一郎　一九二二　「信濃国諏訪郡豊平村広見発見の土偶」『人類学雑誌』三七巻八号
一九　八幡一郎、酒詰仲男は一九三九年、茅野市塩目日向字家上において竪穴住居跡の完掘がおこなわれ、以後の尖石遺跡の発掘に影響をあたいた。
二〇　水野正好　一九六三　「縄文文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第二九回総会・研究発表要旨』
二一　藤森栄一　一九五〇　「縄文中期の集落立地」『史実誌』第四号
二二　八幡一郎　一九六〇　「長野県南佐久郡大深山遺跡調査」（第一回）『雑誌信濃』第一二巻第八号
二三　桐原　健　一九六四　「南信・八ヶ岳山麓における縄文中期の集落構造」『古代学研究』三八
二四　水野正好　一九六九　「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第二一巻第三・四号
二五　桐原　健　一九六九　「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」『古代文化』第二一巻第三・四号』
二六　八幡一郎　一九七五　「縄文遺跡と石」　雑誌『信濃』第二七巻第一〇号
二七　山本暉久　一九九四　「石柱・石壇をもつ住居跡の性格」『日本考古学』第一号

一九七六　「敷石住居出現のもつ意味」上　古代文化第三八巻二号
一九七六　「敷石住居出現のもつ意味」下　古代文化第三八巻三号
一九八八　「中部山岳地帯における柄鏡形（敷石）住居の成立をめぐって」『長野県考古学会誌』第五七号
二八　曽利遺跡特集号　一九六四　『長野県考古学会誌』創刊号
二九　『曽利』　一九七八　長野県富士見町教育委員会
三〇　長野元広・宮下謙司　一九八四　「長野県における縄文集落の変遷」『日本考古学協会昭和五九年度大会資料』
三一　末木　健、山本茂樹、今福利恵　一九九二　「山梨県大泉村甲ッ原遺跡の調査」『日本考古学協会平成四年度大会資料』
三二　平林　彰　一九九三　「敷石住居体制の北村文化について」『日本考古学協会平成五年度大会資料』
三三　長崎元広　一九八〇　「縄文集落研究の系譜と展望」『駿台史学』第五〇号
三四　江坂輝弥　一九七六　「沖ノ原遺跡」－新潟県中魚沼郡づ津南町大字赤沢－『津南町文化財調査報告書』一〇
津南町教育委員会
『沖の原発掘調査報告書』　一九七七『津南町文化財調査報告書』一二　津南町教育委員会
三五　『長野県史・通史編』第一巻・原始・古代　一九八九（戸沢充則の担当、第一章「信濃史の黎明」第二節、「原始文化の繁栄」長野県史刊行会
三六　藤森栄一　一九四八　「原始焼畑農耕の諸問題」『夕刊信濃』
三七　藤森栄一　一九四九　「日本原始陸耕の諸問題」『歴史評論』四巻四号
三八　藤森栄一　一九五〇　「縄文中期集落立地について」『史実誌』第四号

三九　大山　柏他　一五に同じ
四〇　藤森栄一　一九五三　「石棒と原始農業」『農業信州』三六巻一〇
四一　藤森栄一　一九六一　「縄文中期農耕存否に関する新資料－信州境住居群おける所見」『日本考古学協会第二七回総会研究発表要旨』（特別発表）
四二　江坂輝弥　一九五九　「縄文文化の時代における植物栽培起源の問題に対する一考察」『考古学雑誌』第四四巻三号
四三　国分直一　一九五四　「粟と芋」薩南民俗　七
四四　江坂輝弥　一九六二　「縄文時代の植物栽培存否の問題」『立正考古』二〇一
四五　藤森栄一　一九六三　「縄文中期文化の構成」『考古学研究』三六
四六　渡辺　誠　一九九八　『縄文紀行－もの人・味を訪ねて』
四七　藤森栄一　一九六三　「縄文時代農耕論とその展開」『考古学研究』三八
四八　澄田正一　一九五六　「日本原始農業の発生の問題」『名古屋大学文学部研究論集』一一
一九五九　「濃飛山地に出土する石皿の研究」『名古屋大学文学部十周年記念論集』
その他多くの論文がある。
四九　国分直一　一九六〇　「古代日本の芋作について」『人類学・民族学連合大会発表記事』一四
五〇　坪井清足　一九六二　「縄文文化論」『日本歴史』・岩波講座　一
五一　『長野県考古学会誌』　一九六四　創刊号『曽利遺跡特集号』
五二　江坂輝弥他　一九六五　座談会「縄文時代農耕をめぐって」『古代文化』第一五号五巻
五三　藤森栄一、武藤雄六　一九六三　「中期縄文時の貯蔵形態について」『考古学手帖』二〇
五四　春成秀爾　一九九七　『原始絵画』　注一七に同じ

五五　渡辺　誠　一九九六　『よみがえる縄文人』　学習研究社
五六　藤森栄一　一九六六　「釣手土器論－縄文農耕肯定論の一資料年手」『文化財』三九
五七　渡辺　誠　一九八九　監修・梅原猛「異形なるものと呪術」『人間の美術』　学習研究社
五八　鳥居龍蔵　一九二四　『諏訪史』第一巻
五九　渡辺　誠　一九八二　「考古学の視点から」『縄文農耕の実証性』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
六〇　春成秀爾　一九六三　「藤森栄一・縄文中期文化の構成を読んで」『考古学』第一〇巻一号
六一　赤松啓介　一九六四　「原始農耕についての断層」『日本考古学の諸問題』
六二　永峰光一　一九六四　「勝坂期をめぐる原始農耕存否問題の検討」『信濃』第一六巻三号
六三　藤森栄一　一九六五　「縄文中期農耕肯定論の現段階」『考古学研究』第一五巻五号
六四　江坂輝弥他　一九六五　『古代文化』座談会「縄文時代農耕をめぐって」第一五巻　五号
六五　藤森栄一他　一九六五　『江戸尻』　中央公論美術出版
六六　藤森栄一　一九六九　『縄文の世界－古代の人と山川』　講談社
六七　藤森栄一　一九七〇　『縄文農耕』　学生社
六八　井沢幸平　一九二六　「栗帯文化論」『信濃毎日新聞』（一二月一二日）
六九　渡辺　誠　一九七七　「アク抜き技術に伴う諸要素」『縄文時代の植物食』　雄山閣・考古学選書　一三
七〇　藤森栄一　一九七三　「縄文人のお産」『どるめん』　特集・縄文列島　創刊号　萩書店
七一　渡辺　誠　一九八九　「再生の祈り－祭りと装飾」『人間の美術』監修・梅原猛　学習研究社
七二　渡辺　誠　一九七〇　「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』四〇
七三　江藤　昭　一九八八　「勝坂様式の把手について」『勝坂式土器資料図・勝坂遺跡－勝坂遺跡を中心とした考古

遺物ー』　縄文文化研究会
七四　武藤雄六　一九六三　「蛇身装飾土偶と土器」『考古学雑誌』第四十九巻　第三号
七五　野口義麿　一九六五　「縄文文化の蛇身装飾」『古代文化』
七六　春成秀爾　一九九七　「精霊の絵」『原始絵画』
七七　江藤　昭　一九八八　『勝坂式土器資料図』　注七四と同じ
七八　『東京府史蹟保存物調査報告書』第一冊　楢原石器時代地住居遺跡　一九三一
七九　江坂輝弥　一九七〇　「顔面付土器・獣面取手・顔面取手」『土偶』校倉書房
八〇　吉本洋子、渡辺誠　一九九四　「人面・土偶装飾付き土器の基礎的研究」『日本考古学』第一号　日本考古学協会
八一　藤森栄一　一九六八　「顔面把手付土器論ー縄文農耕肯定論の資料としてー」『文化財』六一
八二　渡辺　誠　一九九五　「底を抜かれた人面装飾付き土器」『人類の創造へー』梅原猛古希記念論文集
一九五五　「人面装飾付き釣手土器」『比較神話の展望』青土社
一九五七　「足を広げた縄文土器」『堅田直古希記念論文集』
一九九八　「人面・足形装飾付香炉形土器」『名古屋大学研究論集』一三一　史学　四四
一九九八　「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮（浪江町埋蔵文化財調査報告書）』第十二冊
八三　『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』（林茂樹、他）　一九六八　伊那市教育委員会
八四　『津金御所前遺跡』一九　須玉町埋蔵文化財報告・第四集（山路恭之助、深沢裕三）　須玉町教育委員会
八五　七四　江藤昭『勝坂式土器資料図・勝坂遺跡』参照
八六　吉本洋子、渡辺誠　一九九九　「人面・土偶装飾付き深鉢形土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学』第八号

日本考古学協会
八七　渡辺　誠　一九九五　「人面装飾付きの釣り手土器」『比較神話学の展望』　青土社
一九九八　「縄文の女神のおわします伊那谷の遺跡」『縄文紀行』
八八　『長野県中央道路埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市・その三』　一九七五日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会
八九　松本　豪　一九七五　「諏訪市荒神山遺跡出土の植物炭化物」（注八八）
九〇　長野県中央道路埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その一、富士見町その二－　一九七六　日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会
九一　松本　豪　一九七六　「長野県諏訪郡原村大石遺跡で発見された炭化種子について」（注九〇）
九二　松谷暁子　一九七六　「長野県諏訪郡原村大石遺跡出土のタール状炭化種子の同定について」（注九〇）
九三　上山春平編　一九六九『照葉樹林林文化・日本文化の深層』　中公新書
九四　中尾佐助　一九七七　「半栽培という段階について」『季刊どるめん』第一三号
九五　藤森栄一　一九六九　「信濃のイモ」『縄文の世界』　講談社
九六　江坂輝弥　一九七七　「縄文の栽培植物と利用植物」『季刊どるめん』第一三号
九七　『シンポジウム・縄文農耕の実証性』　一九八二　文部省科学研究費特定研究「古文科財」総合班
九八　武藤雄六　一九六九　「高原に生きる執念の灯－藤森栄一先生の縄文農耕論－」『藤森栄一全集』第九巻　学生社
九九　戸沢充則　一九八二　『シンポジウム・縄文農耕の実証性』（注九七参照）
一〇〇　笠原安夫　一九八二　「穀粒状出土物の鑑定例」『シンポジウム・縄文農耕の実証性』（注九七参照）
一〇一　松谷暁子　一九八二　「穀粒状出土物の鑑定例」『シンポジウム・縄文農耕の実証性』（注九七参照）

一〇二　藤下典之　一九八二　「ヒョウタンとリョクトウの問題」『シンポジウム・縄文農耕の実証性』（注九七参照）
一〇三　江坂輝弥　一九八二　「取浜貝塚その他の遺跡からの発見例」『シンポジウム・縄文農耕実証性』（注九七参照）
一〇四　渡辺　誠　一九八二　「考古学の視点から」『シンポジウム・縄文農耕の実証性』（注九七参照）
一〇五　中尾佐助　一九六六　『栽培植物と農耕の起源』岩波新書
一〇六　『熊本県文化財調査報告書』第六集　一九五二　「古幹原貝塚調査抄報」（坂本経堯）　熊本県教育委員会。
一〇七　小林久雄　一九三五　「肥後縄文土器編年の概要」『考古学論評』一－二
一九三九　「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』一一　凹線文施文の深鉢形土器をメルクマールとした九州地方に縄文中期土器。
一九七九　前川威洋『九州縄文文化の研究』　前川威洋遺稿集刊行会
一〇八　坂本経堯他　一九七二　『三万田東原調査報告』　泗水村教育委員会
富田紘一　一九八一　「三万田式土器」『縄文文化の研究』四　雄山閣
一〇九　『京山屈家嶺』　一九六五　中国科学院考古研究所
一一〇　丁　穎　一九五九　「江漢平原新石器時代紅焼土中的稲穀考察」『考古学報』一九五九－四
一一一　浜田耕作、梅原末治　一九二三　『金海貝塚発掘調査報告』一
一一二　森貞次郎、岡崎敬　一九六一「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』　東京堂
一一三　『板付周辺遺跡調査報告書』一－一三　一九七三－八七　福岡市埋蔵文化財調査報告書
山崎純男　一九八四　「北部九州における初期水田」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第三二号
一一四　『西安半坡－原始氏族公社集落遺址』　一九六三　中国科学院考古研究所、西安半坡博物館
一一五　『智塔里原始遺跡発掘報告』第八集　一九六一　朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及民族学研究所

謝　辞

このたびの「再考・縄文農耕論」は一九九三年六月一九日、別府市白菊ホテルで開催された私の古希祝賀会で発起人代表、小田富士雄から「縄文農耕論」の再考を書いて欲しいと、激励のお言葉があった。以来そのことが頭から離れず、なんとか一文を投じたい気分であったが、浅学非才のためズルズルと今日にいたった。そしてようやく今年一月五日、喜寿を迎えて前半の「縄文中期農耕論」、（藤森栄一とその周辺の素晴らしい業績）を書くことができた。それもほんのさわりであり、もとより十分ではない。武藤雄六はじめ藤森の周辺の研究者には深く触れることができず残念に思っている。藤森の周辺の人が藤森をささえて活動された数々の事例については後日まとめてみたいと考えている。

さて「縄文中期農耕論」昭和第一期に続いて、第二期を書くにあたってすでに亡くなられた八幡一郎、藤森栄一、中村孝三郎、江藤昭など恩師や親しかった先輩から受けた学恩は計り知れないほど大きいことに気づいた。生前、中部山岳地帯の縄文文化を語り合ったことがつい最近のように思えた。

長野県生れの八幡一郎に師事した縁もあって藤森の業績を追い続けて「縄文中期農耕論」を書くことができた。またこのたびの論文には江坂輝弥、渡辺誠、小田富士雄、西谷正などから心のこもったご指導を頂いたことが支えとなった。木村勇、高山純、橋口尚武、井口直司、長野県教育委員会平林彰、長野県伊那市教育委員会飯塚政美、山梨県須玉町教育委員会山路恭之助などから資料の提供を受けた。とくに山路からは巻頭を飾る写真の提供をうけ、飯塚からは写真の提供を受けた。

平林からは数々の資料を送付頂き論文などでは分からない藤森の姿にも触れることができた。東京都埋蔵文化財センターの岡崎完樹は資料の収集と選択に終始協力され、論文制作の支えとなってくれた。ここにこれらの方に心から敬意を捧げる。

これら多くの方に御迷惑をかけたわりには物足りない論文になったが、浅学に加えて年寄りの冷や水と思ってご容射頂きたい。